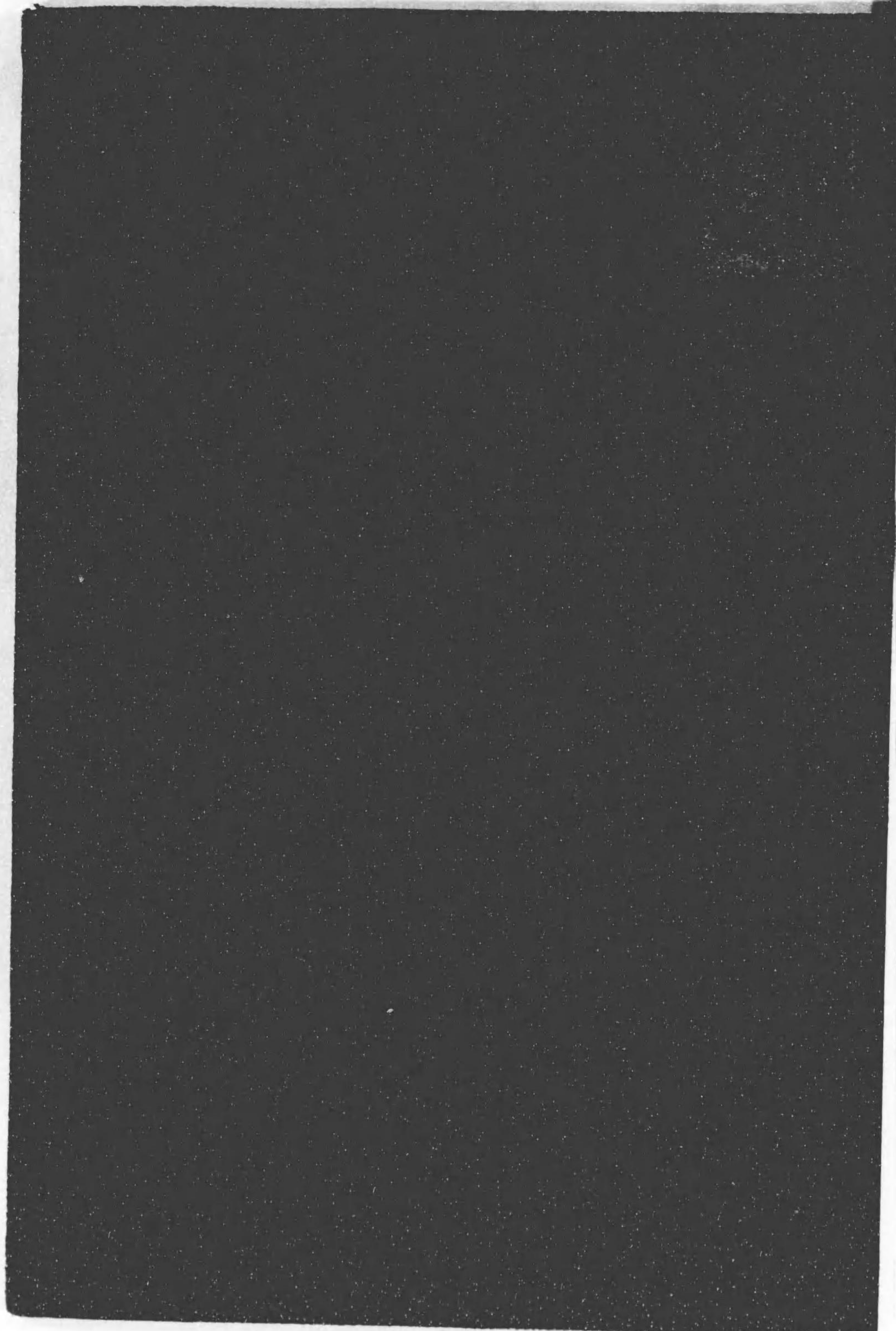


始



536
256

大道無學

堀井梁步著



平凡社

大正
15. 11. 10
内交

大道無學

536-256

此書を
子等の爲に
他の何が無くも足れりとぞ思ふ
彼等の母に献ぐ

一九二六年十月

—著者—

大道の歌

私の教育論

大自然のぶつかさ

- 一、出 水
- 二、入 梅
- 三、川 霧
- 四、朝の西空
- 五、嵐の前
- 六、落日

七、洗 足

八、深夜の逍遙

九、秋 立 つ

十、晚 秋

十一、北國の冬

農業を指導する者……………二九

地べタから観た農政問題……………二六一

洋農と和農……………二五五

集約農法……………二〇三

農業の共同經營……………三二六

カマドのまぢまぢ

技術のまぢまぢ

事情のまぢまぢ

共同作業から共同經營へ

共同經營は共産に非ず

農人にもヒマが必要

耕地の集團的使用

田圃が一の工場

百姓道具、役畜の節約

個人の身代あせり

一つの懸念

近代の傾向

農村振興の根本的着手

人間を冷血にする機關の話……………三九



大道の歌

—ホキットマン—

健康と自由、そして心も軽く
徒歩で俺は出掛ける。

目の前には、長い／＼緒チャケた大道が
どこへなりと俺の行きたい放題に任かせる。

俺はもう幸運なんか追ひ廻さない、俺といふものがその幸運なんだ、もうグチらない、もう延ばさない、もう何にも要らない、強く、満足して俺は大道に上る。

大地は充ち足れり矣。

俺は星座をもつと近くなどは願はない、

あれは彼處にあつて一番いゝ、

あれは彼處にあつて充分だ。

今も尙、俺は何とも言へないアノ例の荷を負つてゐる。

男よ、女よ、俺は何處へでも負つて行くぞ。

俺はどうしたつてお前達から離れることはできぬ、

俺はお前達に依つて充たされ、お前達は俺に依つて充たされる。

オウ、大道よ、俺は歩き乍らあたりを見廻はす。

お前は只見える限りのものではない、

見えざる中にも、お前が在ることを俺は知る。

二

來者不拒、去者不追、

「現前受用」の哲理は維れ、

黒奴、兇漢、癡疾、文盲、

出産、醫者への急使、さまよふ乞食、よろめく醉漢、

出奔の若者、墮落男女、町へ往く放蕩息子、

笑ひさざめき乍ら通る職人の群、

朝市へ急ぐ野菜車、棺桶も来る、引越車も往く、

何でも通る、ウン何でも通れ、何ものをも俺は拒否しない、

何でも受け容れてやる、何ものも俺にはいとしい。

物言はさんとして呼吸さす汝、大氣よ、

俺を——否凡てのものを同じやうに美しい驟雨に浴さしむる汝、陽光よ。

地殻の上を悠々として動く汝等動物よ、虫ケラ共よ、

大空を自由自在に翔廻る汝等鳥類よ、

畑から菫々と萌え出て来る芽生、籬の下の雑草よ、草の莖よ、

蛙麩の痕のやうに路傍の藪蔭につけられた小徑よ、

混沌の中から各自固有の意義を認めさせんとて俺に呼びかくる汝等、凡ての物體よ、

お前達は、未だ知られざる不思議な存在の意義を以て俺に迫る。

平たい石を、タ／＼並べた街路、ギツクリ曲つた街角、

巾廣い板と、太い杭の連つた波止場、遙かなる沖の船、

突き出し窓、破風、廂の行列、

垣根代りの鐵の鎖、石の門、玄關口、

アケスケに見える硝子窓、扉、階段、

果しもない舗道の連続、踏みならされた十字路、

手近かな一切のものからお前は何かしら與へられる。それをその儘ソーツと俺にも呉れる。

生者からも死者からも、無關心なお前の表面は賑はされる。

そしてそこから生ずる魂魄たましいがあり／＼と親しみを以て此の俺にも迫るヨ。

右に左に大地は擴がる、

何處の一角へ目を放つても、一幅の畫圖はそこに生きてゐる。

聴かうとさへすれば、何處でも妙なる音楽が聞ける、(聴かうとしなきや止んでゐるが)

この快活な大道の聲よ！
この朗らかな大道の氣分よ！

三

オウ、大道よ、俺の旅する、

オウ、公道よ、お前は言ふか、

「私を離れるな、山氣を出すな、

私を離れたら踏み迷ふ許りぞ、

私は既うに具へられてあるんだヨ、

よくコナれて、ツキがよくて——

だからシツカリと私に寄り添ふて居れ。」

ア、大道よ、俺は斯く言ひ返す、

「俺はお前から離れることを恐れない、

だが、俺はお前に参つてゐるんだヨ、

お前は俺よりもよつほどよく俺自身を表現してる、

お前は俺に取つて、俺の詩以上だ。」

俺は惟ふ、凡ての偉大なる行爲は大氣の中で生まれ

そして實に、大道の上で爲されたことを。

俺は茲に止まつて奇蹟を行ふことも出来る、

俺の思想、俺の論斷、そして俺の詩、これから俺は凡て大氣の中、大道の上でそれを試みる、

大道の上で出くはす何ものでも俺は好きになれる、

俺を見る何者も亦俺が好きになれるだらう、

俺の目に映する凡てのものが幸福でなければならぬ。

今日の今時から、サツパリと自由、

爾今、一切の制限、一切の劃定線からキレイに放たれたことを俺自身に宣告する、
何處へ行かうと俺の主人は俺自身だ、全的に、絶対に。

他人の言ふことにも耳を傾ける、おとなしく。

憩ひ、調べ、受け容れ、熟考もする、

けれ共俺を捉へようとする何者からも身グルミ脱いでスルリと脱け
拒み難き独自の強烈な意志を以て、俺は往く。

俺は全空間の氣流を精一杯吸ひ込まう、

東も西も俺のものだ、南も北も俺のものだ。

俺は今迄思つてたよりもより良くより大きい、

俺はこんなにも多くの美點を持つてゐることを知らずにゐた、

ア、一切が俺に美しく見えるヨ、

俺は繰り返してお前達に告げる、男よ女よ、

お前達はほんたうに俺に好いことをしてくれた。

俺もそのやうにお前達にしてやるんだ。

俺は行く先々で俺とお前達の鋭氣を補充する、

行く先々で俺自身をお前達の中にふり撒く、

新たなる愉快と無頓着をお前達の間投げつける、

誰が俺を受け容れまいとそんなことを氣にかけない、

俺を受け容れるものに幸あれ。

サア、此處に、完全な男が千人も現はれて來たつて俺ア駭くもんか。
 サア、此處に、美貌な女が千人も現はれて來たつて俺ア駭くもんか。

完全な人間となるの秘訣を、俺は知つてゐるんだもの。

それは、大氣の中で成長することだ、——大地と共に睡り、大地と共に食しつゝ。

茲にこそ偉大な行爲が爲さるべき餘地がある、

そして偉大な行爲こそ全人類の心を擱へる、

アア、意志と力量の噴湧の前に、一切の律法が何んだ、一切の權威が何んだ、一切の反對が何んだ、

律法は壓倒され、權威は愚弄され、反對は蹴破られんのみ。

茲にぞ智慧の證左がある。

ホントウの智慧は、結局學校なんかで證されるものか。

智慧は、持てる者から持たぬ者へ譲り渡すことのできるものぢやない、

智慧は元來靈魂より産れ來るものなんだもの、——それは證明を要しない、それ自身が明徹な證明だ。

あらゆる舞臺に、あらゆる物體に、あらゆる質量に、引當てゝ見て申分がない。

實在の儼乎たる確かさ、物質の不滅性、物體の其處にある素晴しさ、

ア、何物か、物體の在るほとりに漂ふものありて存するヨ、

そは實に靈魂より出で來れるものに非ずして何んぞ。

ドレ、俺はもう一度諸々の哲學と宗教を謂べてやらう。

それらは教室の中では既に充分證明せられてゐるかも知れぬ、

だが、大空の下、大地の上、大河の盡きざる流に持ち出して來ると何の證明にもならぬ。

茲に、「顯現」といふことがある、

茲に、割符を持つた人がゐる——彼がその有てるものを顯現するのは此處でしかない、過去、未來、尊嚴、愛欲——もしそれらのものがお前に取つて空しくんば、お前こそそれらのもの前に空しいのだ。

どんなものでも、中の實が滋養になるなれ、

俺とお前に外の殻をむいて中の實を食はして呉れる者が何處に居るだらう？

何等の策略もなくお前と俺をヤンワリとかい包んで呉れる者が何處に居るだらう？

茲だ、密着といふのは——それは豫^まねてふさはしく造つて置かれたのではない——只カバ、と吻合するのだ。

道を歩いてゐて、見ず知らずの人から愛されるといふのは何ういふわけか？

すれちがひざまに物を言ふアノ瞳の意味がお前に分るか？

七

魂は滾々として流る——

葛^{つた}蘿^らで蔽はれた小門を潜つて、

奥深き木立の中から、

解き難き疑問を扛^かげつゝ、

是等の止み難き憧憬、手さぐりさせる思想、こはそも何ぞ？

男や女が俺の側近くゐる中は太陽の如く俺の血を温めるが、

彼等が俺を離れると直ぐ、俺の歡喜のペンナント（三角形の小形）がダラリと垂れるのはどうしたわけか？

その下をまだ歩いたこともないが、何かしら偉きな音律のある思想がふりかゝつてくるアノ樹

樹？

(夏も冬も恒久にアノ樹々に懸つてゐる思想が、通るたんびに果實を落してよこすのだらう)
道を歩いてゐて見知らぬ人にもヒョクリと取り交はすアレは何だらう？
乗合馬車の馭者臺に並んでかける俺と馭者との親し味、
濱邊を散歩してゐて網曳きの漁師達に手を貸すアノ心持、
男や女の好意に無雑作に飛込める俺と、俺の懐ろに無雑作に飛込める男や女、
——アリヤ一體どういふわけだ？

八

魂の射精！ 幸福とは是のことだ。
それは大氣の中に遍満して、いつも待ち構へてゐる、
そして今我々の番が来たのだ。
そこから密着性の流動體が生じる、

この流動體が男や女の清新サと甘美サだ。

(朝な朝なその根からいき／＼と生え育つ藥草の匂も、
男と女とから生ずるアノ清新と甘美には及ぶまい)

この密着性の流動體へ老ひたるも若きも汗ばむ程に愛着する。
それから蒸溜されて滴り落ちるものゝ前には、美貌も教養も何のその、
それの方へアノふるひつきたいやうな抱擁の痛痒さが喘ぐ。

九

サア、行かう、誰でも来い、一緒に行かう、
俺と旅する者は倦むことを知らぬ。

大地は倦むことを知らぬ。

荒削りで、沈黙で、取っつき難い大地は、

荒削りで、沈黙で、取っつき難い自然のやうに、
ぶっつけはさうだが、失望するな、しがみつけ、
そこには聖の聖なるものが藏されてあるんだ。

誓つて言ふ、そこには言葉の及ばない美にして聖なるものが存することを。

サア行かう、此處に留つてはいけない、
どんなにこれらの儲へ物が甘からうと、
どんなにこの住居が居心地がよからうと
此處に留つてはいけない。

どんなに此港が山に囲まれ
どんなに港内の水が穩かであらうと

こゝに礎を下ろしてはいけない。

どんなに我等を圍繞する人々の情けが篤からうと、
暫しの間しか我等はそれを受くることを許されぬ。

10

サア行かう、いやまさるこの推進力！

我等は道なき荒海に乗り出さう

風の吼え、浪の逆立ち、海の怒號する中に
満帆の風を孕んで。

行かう、動力、自由、大地、四大（地水火風）！
健康、膽力、豪快、自尊、好奇心！

行かう、一切の形式から擺脫して、

お前達の拵へたその形式からよ、アノ蝙蝠のやうな目付をした唯物主義の坊主共よ！

醜態道に横らば、此れを葬るに何をか待たん。

行かう、だが是丈は言ひ渡して置く、

俺と旅する者は、最上の血液、最上の筋肉、最上の忍耐力を必要とする、

完全な健康と、金剛の勇氣とを持つた男、女の外は此の試練に來り投ずる勿れ。

お前の生涯のいゝところを既に消費し盡したものは來るな、

まだ水々しい匂はしいそしてガツしりした軀幹のもののみ來れ、

勿論、病身者——酒飲み、花柳病のケあるものなんか。

俺及び俺の一味は、是等のことを議論や引喩や律呂などに依つて信ぜしめんとするのぢやない、俺達の存在が、その證しだ。

一一

ナアオイ、俺らアどこまでも正直だ、

俺らアスベスベした舊臭い賞牌なんかやらうとは思はない。

荒っ削りな、眞新しい賞牌をお前達に贈る。

お前達は今、當然來るべき時代に際會してるのだ。

お前達は、富ナンテものを溜めやうと思ふな、

お前達は、拵へた凡てのものを吝しみなくばら撒け、

お前達はどの道、運命められた市まちに行き着く外ない

——やう／＼落着いたかと思ふと又直ぐに出發しなきやならぬ。

お前達は後に残つた者の爲に擲擧され愚弄されるだらう、

お前達はどんなに魅かすやうな愛の手招きを受けても、絶え入るやうな別離のキツスを交はず丈だ。

お前達は彼等の擴げた腕にドツブリと入つて完全に掴まつて了つてはならぬ。

一一一

行かう、アノ大軍勢の後を追ふて、彼等と合すべく、

彼等も亦大道の上にある、疾風の如く去りしアノ偉大なる男達よ、それからアノ女達よ、

彼等を阻み、彼等をためらはさんとせし一切の障害を乗り越え、踏み破り、——行き、行き、行く、

アノ美はしい徳行者よ、アノ美はしい犯罪者よ、

凧ぎ海も、荒ら海も共に楽しむ航海者よ、

遠き異郷の住民よ、僻遠の部落民よ、

沈黙のまゝ働きづめに働く者よ、静かなる市井の大隠よ、

一莖の草、一輪の花、汀に寄する貝殻の屑にもトツクリと觀察の目を向けるものよ、

婚禮の夜の舞踊團、キツスを交はず花嫁花婿、介添役の童男童女、それらを宿す母の胎、

反逆をたくらむ軍人、墓穴のまはりに立つ人々、棺を下ろす人夫共よ、

季節から季節を追ふて、様々な道連れを伴ひつゝ、旅から旅へ渡り行く者よ、

最初の第一歩を歩るき出した嬰兒よ、

自身の若サを抱きしめて巢立ち行く若者よ、

よき木理を持つた毛深き中年の壯夫よ、

博大にして仁慈なる完き女性よ、

幾多のクライマックス(峠)を通り越し、世界の廣表を一身に藏めて、

静寂な、恢宏な境地に達した老年者よ、

——近づける死のおのづからなる解脱を俟ちつゝ。

行かう、永劫から、永劫へ、

晝はひねもす歩るき、夜は夜もすがら憩ひ、

何もかも此の旅に没入せしめ、

何もかもより以上の旅に没入せしむ、

汝等の行き着くところ、それを又通り越して行く外に何物をも見ず、

汝等の行き着くところ、それを又通り越して行く外に何の時をも定めず、

汝等の前に蜿蜒として横たはる道の外に、何の道をも求めず、

汝等の共に達し得ることの外に何の權威——然り、神だらうが何だらうが——をも認めず、

汝等の持てるものの外に持たうとはせず——働かず、購はずして凡てを享け——饗宴を飽喫しつ

つ、殘膾と冷炙には見向きもせず、

果樹園から果物、庭園から花卉を、農園のいいといふいいものを收穫し、

富める者の豪者な別荘を失敬し、よき配偶者の健康な幸福を攝取し、
汝等の通り過ぎる市街の中から入用なものを悉く集め、
後々、汝等の行く先にそれらの街衢と建築とを運びゆく、
逢ふ人毎に、その頭から心を、その胸から愛を取り集め、
愛する者を後に取り残すことなく、行路途上に伴ひつつ、
世界を一の大道と見て——多くの魂の旅する多くの道から成る——。

一四

魂は旅す。

魂の如く體は旅し得ざれど、

さはれそは魂に劣るなき偉大なるもの、而して魂の旅立の時に別離る。

凡てのものは魂の進行の故に別離る。

一切の宗教一切の固形物、美術、政府、——此の地球上、或は他の地球上に現存する一切のものは世界の大道を旅する魂の通りすがりのその隅、この限に落ち零るるものでしかいひ。

男や女達の、世界の大道を旅し行く進歩に比ぶれば、その他の進歩は只それに必要な象徴であり資料であるに過ぎない。

永劫に生き、永劫に進む、

汪洋として、肅然として、悄然として、退嬰し、挫折し、狂亂し、委靡し、
自暴、誇大、愛着、疾病、包容、排擠、

而して行く、彼等は行く、されどその何處に行くやを知らず、
さはれ最善を目がけて、何かしら偉大なるものを目がけて。

行かう、汝等が誰れであらうと、來い！

汝等は家の中で情眠を食つてゐてはいけない、よし汝等が自身の爲めにそれを建てたのであつても。

行かう、薄暗い籠居を出て。

ナニ、抗辯は無益だ——俺には皆んな分つてゐる、皆んな露け出す、

見よ、汝等も亦、他の凡ての者の如く、

笑ひ、踊り、食ひ、飲む人々の中に、

美しき衣裳と眩ゆき装身具と、梳られたる髪と、洗ひ塗られたる顔の下から、
包み切れぬ無言の憎悪と絶望を、

夫にも、妻にも、友にも、ホンに心からなる告白を聞いて貰ふものがゐない、
影の形に添ふ如く、もう一つの自己が見えつ隠れつ、ついてゆく、
形なく、言なく、都の街々を通り、家々の客間で慇懃を極め、

列車の中、甲板の上、公會の席にて、
家庭の中にさい、食卓の周まはりにさい、寢室にさい、ア、ど、どんな處でさい。
身嗜みよく着こなし、晴れやかに媚び笑ひ、昂々然として起居はするが、
其の肋骨の下は只夫れ死灰、その頭蓋骨の中は只夫れ地獄、
寛濶な着物と華車わしやな手袋と、造花と、リボンに飾られて、一寸の隙もなく風俗習慣と妥協し乍ら
只の一言も自分自身のほんとうのことは言はない、
他のことは何んとも言ふが、只の一言も自分自身の本音は吐かぬ。

一五

行かう！ 争まがひと闘たたかひの中を通過しつゝ、
俺達の決勝點はもはや撤回するわけに行かぬ。

これ迄の争まが闘たたかは成功であつたか？

成功？ 自身がか？ 民族がか？ 自然がか？
イ、カ、この事を記せよ。成功の果實は取りも直さず、より以上の闘たたかひの必要といふことではないことを。

俺の絶叫は戦闘の雄たけびである。反逆の行動である。

俺と一緒に来るものは厳しく武装しなくてはいけない。

俺と一緒に来るものは飢えと貧乏と怒れる敵と戦場に遺棄さるゝを覚悟しなけりやならぬ。

行かう！ 大道は我が前にある。

それは安全だ——俺が試みたんだもの——俺の此の足がそれを踏破したんだもの。

行かう！ 引止めらるゝな、

いゝから、紙に書きかけたまゝ机上におけ、本は読みさしたまゝ棚におけ、
道具は仕事場にほつとけ、錢は儲けずとまゝよ、

學校は雨晒らし、先生の聲にも耳をかすな、
坊主をして勝手に説教をさせ、法官をして勝手に法をいちくらしして置け！

いとしき吾子よ、サア俺の手を握れ！

俺は錢よりも尊い愛を呉れてやる、

俺は説教だの法律だの、代りに俺自身を丸ゴト呉れてやる、

お前もお前自身を呉れるか？ 俺と一緒に旅するか？

俺達は生きてゐる間いつまでもくつついて居ようナア。

後記

「大道の歌」は漸く了はつた。一ト荷下りた氣持だ。初めはナアニと高をくより乍ら、そゝられるやうに勢込んでやつつけたが、中頃になつて爺オヤジの例のミスチズム（神秘的な魂）が出て来て、ギグツとつかへた。説明はされず、説明しては益々拙くなるし、図書館へ行つて二三の邦譯も参照したが、只文字の辭書的ホンヤクの外成つてゐず、相談する師友もなし、實は弱つたなアと溜息もついた。

その中ヒヨツクリ、パピニの人物月旦を手にしたら、中にホキツトマンの評論もある。そしてあの人觸ルレバ人ヲ斬リ馬觸ルレバ馬ヲ斬ル底の鋭い男が、爺のことを胸上げする程に書き上げてゐる。それを見て又新たに勇氣が出て来て、チリ／＼と後を續けた。

爺も言つてるやうに「一ト所に俺を見失つても、落膽するナ、俺は別の處にニツと笑つて待つてゐる。」吾々は自分の分る所丈、分る程度に正直に譯してアトは残して置けば一番無難なんだがやり出すとそうも行かず、ツイ無理をして飛んでもない間違ひをし出かす。文字を辭書的に譯し

出した所が何ンにならう。俺はどうかして俺自身が、爺の息吹をかけられてゐるその氣分を正直に出したいと願つた。が何と言つても言葉の異ひで、アチラ立てればこちらが立たずと言つたやうな憾みは奈何ともされない。詩の譯はまアこれから御免を蒙らうかと思つてる。丁度好きで好きでたまらないのだが、口に出すと妙に感じが薄くなる氣がして、却つてツラク當りたいやうな或る場合の感情に似て。

「俺は野蠻人の吼聲を、世界の屋根の上に打つ飛ばす！」と云つたアノ爺の意氣を懐ふ。

私の教育論

どんな仕事にも「理想」がなくていゝ仕事といふものはないが、とりわけ、教育といふものから「理想」を取つたら何が残るか？ それは單なる〇の外の何物でもない。

第一

ペンをかいたやうな晩秋の空は、涙と決して汚された地の澁面と相對してゐる。照るよりも降ることの多い時雨時の田舎道は、小作米を運ぶ馬車の爲に存分に破壊しつくされた。アングリ開いた轍の痕は、いやが上にも地を濃まして、道の上に時ならぬ小沼を點綴させてゐる。緒の切れ易い下駄は、口の開き易いゴム靴に變つたにしろ、子供達の通學は依然として氣の進まない日課である。横なぐりの雨風に道に沿ふた堰に落つことされさうなフラフラ婆が、寒鴉のやうに點々と

一條の駁道につづく朝な夕な!

わけて齡ハの行かない初年級の子供達が、その父母に負はす心の重荷は非常なものだ。輝かしい朝の日の出にだまされて、傘をうるさがる子供に負けて出してやつたものゝ、いつのまにかムラと半夫を蔽ひかくす雲の渦きに怖れて、野良から急いで歸り、雨具を持って學校へ迎へに行くのも、週に何ん遍と數へ切れぬ。暮れ易い秋の日に寸時を惜んで立働く父兄にとつて、どれ丈けの犠牲を拂はしてゐることか。それもこれも學校に出さなければ惻口にはなれない。目も開かない、口も利けない自分達の低劣な地位に思ひ至つては、せめて子供に丈けは人に負けない發明なものに仕上げねばならぬといふ親達の切なる希願からである。勿論義務などといふ自發的でないヨソヨソしい心持ちからなどではない。それも學校といへば小學校丈けのこと、その外のこととは全く問題外だ

私の教育論に取つても、初等教育以外の教育はまア問題外だ。否、口ハバツタイことを言ふやうだが、ほうたうの教育といつば、初等教育の外ないと思つてゐる。中等教育とか、大學教育とか言ふのは、アレは現状から見て、全然教育などと言はれない代物ではあるが、本質論としても

教育といつば、初等教育に限つていゝもんだと私は思つてゐる。初等教育が成つてゐないで、その上にいくら安普請を層々積上げて、到底ものに成りつこないのは明かだ。然るに教育といふものは、大學を俟つて完成するものだと思ひきめてゐるから、滑稽とも氣の毒とも誠に以て言ふに忍びない仕儀である。

一體小學校教師よりも中學校教師の方が月給が高くなければならぬワケはどこにあるだらうか。中學校教師は何故に小學校教師よりもエライと只單に思はれてゐるのか。昔から偉大な教育家として、我人共にその前に頭の下るやうな大人格者は、小學校教師の中により多くあらはれてゐるではないか。もし小學校教師の月給が大學教授の月給よりも、必ずしも低くなければならぬものでなかつたならば、それらの名教員は何を好んで中學校教師となり、大學教授たらんと欲しよう。ほんたうに教育の爲めに身を捧げる爲めには、小學校こそ最も骨折甲斐のある壇場であるんだから。

中學校は小學校を卒業してから入る學校だ。この外に、實にこんな幼稚な子供らしい考へ方外に、中等教員をして小學校教師の上にあらしむる理由は皆無だ。そんなら日本の大學教授の卵は必ず一度は在外研究員の名の下に、西洋の大學に入つて來ることを必要な資格としてゐるからには

西洋の大學はことごとく日本の大學以上の地位にあるのか。

中學へ入つて英語だの、代數だの、外國地理だの、西洋歴史だのを學ぶことが、どうして始めて文字といふもので、新しい世界を展開され、物の觀察や、感じの現し方や、總じて世界との最初の接觸に依つて起されるそれらの驚異的な心の上の經驗、變化、影響よりも、より重大であり得るのだらう。幾何とか、國語とかを専門に教授してゐる先生が、全人的の教育を最も嫩芽の軟かい時代に施し行く先生よりも、どうしてエライのだらう。

道端に嬉戯する小學生と中學生とのつき合はそれでいゝとしても、少くも子を持つた親の身になつて、もう一度トツクリと考へてご覽！

中等以上の教員はマア教育家とは言はれない。何となれば、彼らの目的は教育ぢやない、教授だから。全人の教育に非ずして、一學術の教授にしか過ぎんのだから。そしていかに多くの學術を教授したにしろ、到底それは教育のキョウとも言はれないことなのだから。

教育と教授！ このことを今頃とやかく言ふことは、具眼の人の前に小恥かしい氣もするが、私自身教育の素人として、同じ素人の人達に喚びかくるものとして、この教育論は書かれつゝあ

るのだからゆるして貰ふ。

ホキットマンの詩にもあるぢやないか。

茲にぞ智慧の證左がある。

ホントウの智慧は、結局學校なんかで證あされるものか。

智慧は、持てるものから持たぬものへ譲り渡すことの出来るものぢやない。

智慧は元來靈魂より生れ來るものなんだから。

——それは證明を要しない、それ自身明徹な證明だ。

全くこの通りだ。ホキットマンも一度小學教師をやつたこともあるが、誰も教育家だとはしない。(勿論、ほんたうの意味からは學校なんかで白墨をいぢくらない丈けの差で、偉大といふ折紙を何ぼつけても足りない世界を相手の大教育家なんだが。何はともあれ、人間の魂を喚びさますものが大教育家でなくて何としよう。)けれ共彼の詩は、教育學の上にもピッタリ當筈まるることが

あるから妙だ。

あゝ「教へ込む」といふ主張の下に、教育が行はれた期間はそも幾十年であつたらう。抑も日本に小學校令なるものが布かるゝ初めから、ヘルバルト流の教育信条が文部省といふ絶對権力者の絶對權を揮へる間、永久に押し付けらるゝかに見えた。今だつてどうだうだか？ 其證據には文部大官よりもチツト許り年の若い吾々でも、實は昨日迄も知らず識らずこのヘルバルト教育を信条となし、今日も尙ヘルバルト教育を受けたその習慣から脱け切れないで困つてゐる次第だ。實に呪ふべきはダイアレクテツクな、系統的とか、學問的とか、理論的とかいふものから編み出された法則を、無理矢理に全人の生ける魂をもつ人格に押し付けらるゝ事である。人間の魂はどんなにしたつてよそから縛られるものぢやない。それを縛らうとしたことから、一切のぶん間違ひが生じて來たのだ。そしてこの魂を縛らうとする僭越至極なチョコオまな繩を解き放つのが、抑も教育といふものゝ役目ではないのか。それをあべこべに、繩が教育だと心得てるものが、いかにザラに多いことであらう。

ゴムの管を使つて、嬰兒に牛乳壺から乳を吞ませるやうに、凡百の智識も教師の口から生徒の

頭へトトロと注ぎ込まるゝもんだ、といふ觀念、これがまア約言したヘルバルト流の教育法だ。従つて教授といふことに全力を注ぐ。有難迷惑なのは、ロクでもない料理を無理強いに強いらるゝことである。ヘドとゲリはその當然の結果だ。ヘルバルト流から出發した詰込教育がその當然の結果として、いかに多くの人の子を低能にし、狂人にし、若しくは畸形にしたか知れやしない。そしてそれが今、現に人の親として、その子供達に迄そうした觀念の下に君臨する空恐ろしさよ！

人々よ、教へ込むとは何を教へ込むのだ。どんなにお前達の目が驚かされようと、現代の大發明でもが、次代の子供のオモチヤにしか過ぎない。

舊い頭から新しい頭へいくら注ぎ込んだ所が、それはそのままで役立つもんぢやない。舊くさいがらくた道具許り與へて満足させやうとしたつて承知できない所から新しい時代が開けるのだ。これ丈で、もう詰め込み主義のものにならぬことは分つてもよさそうもんだ。

所で、中學以上の學校に於ける教育は、マチマチな片々たる學術に對するこの詰込教授の外に何がある？ それは教養でも何でも無い單なるお稽古でしかない。だから中等教育でも、大學教

育でも、必ずしも學校に長いムダ足を運ばなくとも、講義録ででも、参考書ででもやれる。檢定試験、文官試験、醫者試験、辯護士試験、外交官試験、代議士試験（オットこれはまだ無かつたつけ）が、通りさへすればいふことは文部省でも認定してゐるぢやないか。

それは全くその通りだ。諺にも「問ふに落ちずして語るに落ちる」といふ事があるが、中等以上の學校なんか無用だと言つたら、文部省ではコイツ怪しからんことを言ふと思ふか知れんが、學校といふものを無視してもいふ事實が、何よりも雄辯にそれを語つてゐる。一時八ヶましかつた大學昇格運動だつてこの筆法でゆけば、何にも手古摺ることはない。ウンヨシヨシでみんな昇格させてやれば、昇格してくれといふものも無くなる。今頃基本金を納めぬとか、年賦にしてくれとか云つて、ケチなブザマを暴露せずに済んだものを。

中等教育以上の學校は、教育所に非ずして全く教授所である、講義所である。だからその先生は教授であつて教師ではない。つまり教育家といふものではない。學問といふ學術は身につけてゐるかも知れぬが、教育といふことには唯一不可分についてゐなければならぬ人間としての底光りが必ずしも必要とされない。たまに小學教師の間にキラリと光つて見えるあゝした人格の光り

や、小春日和のやうなバーミイな暖か味などはとても中等教員にも大學教授にも求められない。

加之、小學校に於て取り扱ふべき基本教育さへしつかり學び得られたら、中等以上の學術は獨りで充分やれるわけのものなんだ。そして中學以上の教育を獨りでやれることを目標としないやうな教育だつたら、どうして萬人必須の義務教育などと言へた義理カイ。それなのに小學校は間に合はせ、いづれ中學校へ行つてから、いづれ大學へ行くんだからと——そして猫も杓子も大學を出なけれや——とシビレが切れるのも知らずに、足つま立てゝ待つてゐる父兄の心！ 氣の毒とも惘然とも見ちやゐられない。

かう思はせたのは一體誰の罪か？

教育といふものを段階的に心得させて、小學校よりも中學校がエラク、中學校よりも高等學校がエラク、高等學校よりも大學がエライと思ふこの心理は、あらゆる點に非常な不都合を來してゐることに氣がつかないか。

先づ、教育の本質に取つては、共に天を戴かざる「試験」といふものが何から生じたかを思つ

て見よ。

一體、人を試験し得る者は誰か？ 神か？ 運命か？ どの道人が人を試験し得るものぢやあるまい。(恰も人が人を裁き得るものでないが如く) 試験し得るものは到底自分自身でしかないのぢやないか？ そして自分で自分の試験ができないやうな、成り上り者とお調子ものに何らのほんとうのこの出来る道理があらうか。

こんなことを大きな聲で叫んだところが俚耳には入るまい。ぢやア聞いて見やう。學校に於ける試験といふものが一體どんな方法でやられてゐるかを。

教師が問題を出して、生徒が答案を書く。エ、カ、與へられた時間以内でヨ、一時間、せい／＼二時間。先づ雑作ないヤツから手をつけて六ヶしいのは後まはしにして。答案は綺麗に、先生が見ることを嫌がらない程度に。そのホカ、——いろ／＼な試験に向ふコツ——道理こそ、東京には試験専門の學校が大繁昌し、試験の故の考へ方といふものさへ汗牛充棟も只ならざる出版をさせてゐることや。

その又、問題といふのがどんな種類のものか？ それは或一學科に取つて是非共知つて置かな

ければならぬやうな類のものぢやない。是非共知つて置かなければならぬ事項は誰だつて注意すらア。そんな問題をいつも出してた日にや試験にやならんと仰しやる。誠に御尤もの次第だ。そこでなるべく人の氣のつかない様な教科書の隅つこの名前、文字、もちつた、ゆがめた疑問、できる丈けいぢめてやらう／＼とするコスイするい行き方——教師が人が悪いさうナ——人の悪い教育家もないもんだが——

何のことはない試験とは、その内容から見ても、人の子をいぢめ、いぢけさし、頭を悪く、體を悪くさせる爲にたくらんだカラクリのやうになり下つた。それは徹頭徹尾、單なる機械的記憶の強制でしかない。この機械的な記憶のクセが人間の創造力の養成に取つていかに悪い作用を爲してゐるかは後に説く。人間の眞價、實力の試験であるべき筈だつたなどと言つても、耳の曲り角にさへ入れるものがない。もう／＼元の本道に反るべく餘りに深く岐路へ迷ひ込んで了つた。

こんな試験が教育の眞髓に取つて全く無價値であり、人間の心意の正順な發達に取つて取變へつこの出来ない毒藥といふ價値を有するに過ぎぬことは、もう大低心あるものには分つてきたらしいが、これが抑も何の必要から産まれてきたのか？

曰く、中等以上の學校の不足から。(國民よ、小學校だけは幸ひにまだ足りなくないのを喜べ。尤も田舎の町村では學校の増築、改築で税金の嵩み行くのにへトへトに疲れてはゐるが。)實に大學の不足が高等學校を試験勉強化し、中學校の入學難が——諸君呆れたもんぢやないか——今や小學校のいたいけな子供達をも試験の故にアノ無邪氣な顔に小皺をしかめさせてゐる。そして課外教授だけの自宅教授だのと追ひまはしこき使つてゐる。

かうして日本の教育機關は、悉く上から下へと鐵則を以て押し付けられてゐる。大は中を壓し中は小を壓し上から下へ下へとイケニエを捧げしめてゐる。天にまで届くべき人間の發揚が、頭から大學といふ中實の空虚なコケオドカシの建物を行き止りとしてそこから下へ下へと成り下り、とう／＼肝腎かなめの小學校教育までもふん縛り蹂躪して了つた。何といふ矛盾、何といふ本末顛倒、何といふ頭熱足寒。丸で震災前の海上ビルの建物ソツクリだ!

しつかりした小學校教育に立たない中等教育や大學教育などの到底本物になれつこないことは、入學試験を要するやうな學校を眼中に置かないで、ほんとうに人間の成長といふことに目標を置く人にはすぐ解る筈なんだが、それがさう行かないのは、あまりに人間それ自身の價値や能力を

見逃して、ホカのもの、社會の組織とか、階級とか、いろ／＼な関とか、凡て從來の習慣に従つて立身出世を唯一の目標として判斷するからで、それが知らず識らず次代の子孫までも現前の習慣や組織に無理にも遵はせやうとする所以であることに氣付かぬ。

吾々は人間の創造性を信じないで、何處に希望を持ち得やう。來るべき時代は、どんなにしたつて現代以上のものを創造するに極つてゐる。それがどんなものであるかは想像だに出來ない。原始時代と違つて最早豫言者の出現さへも困難としてゐる時代だ。豫言者以上に創造者の仕業が破天荒なのだ。それ故に吾々の教育の全部は、吾々の後に來るものをして思ふ存分創造せしむるやうに仕向けさへすればよい。そしてそれだけがまア譯りのない吾々の爲し得る仕事と云つてい

一體、何人も是非讀まなければならぬ本で、而も何人もウツカリして讀まうともしないのである本、それは教育の本だ。何といふ可笑しい現象だらう。起きるから寝るまで何かといへば子供の爲に美田を買ふことを考へ、子供の教育といへば、何かしらピンとなる大抵の人間でも、一冊の教育書さへ書棚にない現象は誠に不思議といはねばならぬ。之は全く教育といふものを學校

の先生に丸ツきり任せつ切りで、學校にさへ出して置けば教育といふものが大丈夫だと心得て、そのクセ家庭では。學校の行き方と全然反對のやり方をやつて居り、教育の効果をぶちこはして恬としてゐるものがザラにある。だから兒童は學校と家庭とに完全な二重人格を使ひ分けることを覚え、學校では辛棒してゐた事をウチでは勝手に振舞ひ、或はウチで縛り附けられてゐるうつぶんを學校で晴らしたり、兎に角二つの違つた世界を劃然と拵へてゐる有様だ。勿論教育の本質から言つて學校なんか家庭の脚下にも寄れない資格のものなのに、それがアベコベに取り違へられて、家庭はいつでも學校の成績さへ立派ならと思ひ込んでる途方もない見當違ひには呆れさせられる。

それといふのも昔の教育書といふものは、倫理書の片われの如くであり、そして倫理書と同じ位の乾燥無味であつたから、誰もさう教員以外の誰もが閉却して居つたらうが今は全く違ふ。昔の教育書を葬り去る程それ程今の教育書は違つた或るものを提供してゐる。それは大抵の人が想像するだらうやうな教員の學問なんかぢやない。正に人間の再生を暗示する書だ。今まで人間を隷屬視したり、玩具扱ひしてた舊夢から愕然として覺めしむる警鐘なのだ。それ故に何人も讀ま

なればならぬ。

新しい教育學は、ア、學などと言ひたくない。それは人間を中心として、無限の時間を縦に貫き、無限の空間を横に流るゝ原理のそれであり、書齋の机の上や、教壇と黑板の間などでいぢくるべく、あまりに廣大であり、深遠であるのだから——何かもつと外の魂を揺るがすやうな名辭はないか——それは哲學よりも、宗教よりも偉大なんだがア——まア仕方がない、新しい教育學は實に「人間の發見」である。そしてその當然の出發として、「兒童の發見」である。

「兒童の發見」、これこそ新しい教育研究の大きな贈物である。そしてこの兒童に對する考へ方と態度とで、新しい教育と舊い教育とは截然として分たれる。

兒童といふものを、成人の卵だと心得てゐた。成人の機能から見ても、未熟な未完成な不足な——悉く未とか、不とかいふ字を冠すべきものと心得てゐたこと。兒童を白紙に譬へたり、ものゝ入つてゐない空虚な器に譬へたり、凡て成人の状態から割出して兒童を觀察してゐたことの、形態上は兎も角、教育上から宥すべからざる程の謬り。これが舊い教育學の立前であつた。従つて兒童を成人の標準で律しようとした。そして成人の標準で以て律されてきた者が、やはり又今の

兒童を成人の標準を以て律せんとする悲しむべき事實。兒童の世界といふものの、成人の及びもつかない程の高サ、廣サ、深サ、それを知らないで來た不幸。それを今以て知らないで澄ましてゐる空恐ろしさ。

兒童は生れ乍らにして一つの人格だ。(神格と言つても決して胃潰ぢやない)これが新しい教育の標語である。このことがハツキリ解らないではとてもく教育のことは論ずる資格がない。勿論このことは殊更に色眼鏡をかけさせられ、猿マネ(成人の、アノ英雄豪傑などいふ人間虐殺者の)許り強ひられ、何かしら型に籍まるべく手カセ足カセをかけられてきた我々の幼年時代を回顧したつてとても分りこないのだが、自分の子供丈けでも成人の成心を離れて常住坐臥に不斷の觀察を向けて御覽。そこには言ひ解くすべもなき微妙な含蓄の深い現象が日々夜々に現はれて來るであらう。それを例の子供は成人の卵的見方で雑作なく片付けて了へば何の意味をも爲すまいが、成人の卵ぢやない、既に孵つた雛である。雛は卵こそなさないが、その他の機能は成雛に備はる程のものは既に備へてゐるのである。

實に今の成人が自分等の幼年時代を回顧することに依つて、現前の兒童を判断しようとするこ

と位危険なことはない。それは恰も封建時代の古老を墓場の中から連れてきてデモクラシーを批判させるにも等しい時代錯誤である。吾々には、今の言葉でいはるゝやうな幼年時代といふものがなかつた。吾々の幼年時代にはまだ「兒童が発見」されなかつた。何事も成人と比較して律された。兒童といふものが只成人と比較されることに依つていと小さきものに見做されてゐたのである。そうした時代に最も大事な幼年時代、少年時代を過ぎて來た吾々に、どうして成人と同様、否それ以上にまで引上げられた今の兒童の世紀が、回顧作用に依つて分る筈があらう。吾々はほんたうに今迄かけられてた色眼鏡をかなぐり棄て、新しく目をむいて悔恨の涙を滿眼に湛へつゝ、吾々の目前に嬉戯する兒童を新たに見直さなければならぬのである。

「生れた者」、それが兒童である。

それは吾々が創つたのぢやない。彼が生れて來たのである。人々よ、天孫降臨にもたぐひつべき此の事實に先づ驚異の心をおのかせよ!

兒童は一つの完全なるものである。勿論それは成人の意味のそれではない。(ア、私は幾度斯うした成人との意味の區別を一々ことわらなければならぬのだらう。)彼にはタマシヒ(魂)があ

る。――

タマシヒといふので思ひ出した。村外れの石地藏や庚申塚を新たに建てる時、坊主や彌宜が物々しいイデ装たもで口に呪文を唱へながら、石像にタマシヒを入れるといふ行事がある。今迄石切りの店頭の地べたにゴロン／＼轉がされてゐた石塊が、呪文に依つてタマシヒが入り、それからは村人の尊崇の的となり、村で餅搗きのある度毎に餠コロ餅を各戸から捧げられ、乞食と烏が思はぬ御馳走にありつくのである。

所がネ、兒童にだつて此のタマシヒを入れることをムキになつて考へ、それを司る或る一種の坊主や彌宜が儼然と存在してはゐないか知ら？――

タマシヒは外から入れられるもんだらうか。入れられるやうなタマシヒなら取り上げることできるだらう。又入れられるものがタマシヒであつたら、幾らでも切りも限りもなく入れられるだらう。頭の中で魂の鉢合せ、成程それで頭痛鉢巻といふワケか。

生れた者。――兒童に魂がなうて何とせう。それは疑ふ餘地もない儼乎として存在してゐるんだ。それは入れることも取り出すこともできない。(只歪めないでくれ。それ丈けは手を合せ

て拜む) それが有る故にこそ兒童が生くるのである。

既にタマシヒがある。その他のことは悉くこのタマシヒから派生するものである。その他の事といふのは、兒童がだんだんに成長して行く一切の機能は、タマシヒを中心として自ら具はり、必要に応じて顯現されて行くのである。されば一切の成人は教師であらうが父兄であらうが、兒童の成長に取つて補助機關たるに過ぎないもので、決して兒童の生成者でも主宰者でも、――いはんや彫刻者でもないのである。親が子に對してすら、既に補助機關たるに過ぎぬものだ。いはんや第三者たる教員に於てをや。

實に解釋に苦しむのは教育に關するいろいろな法令である。その一つの例として學齡といふことがある。人間は生れて滿六ヶ年を経過しなければ學校には入れない。そして學校に入れること丈けが教育の初まりと心得てる一般人は、滿六ヶ年といふ最も大事な期間をまるつきり無頓着に暮してしまふ。無明の暗の帷が上つて、初めて天日の赫灼たる此の世界を發見して驚異の目を輝かし乍ら、むさぼるやうに五官を通じて物を覺える此最重要の時期の六年間といふものが、まるで教育といふものから除外されること。もし學齡といふものがなく、學校といふものがなかつた

ならば、人は果たして此重大な時期を、今のやうにホツタラかして置かれたらうか？ 此期間こそ實に學校に於て分るゝ多くの違つた個性、多くの違つた能力をせつせと生成しつゝある時な
んである。教育學を讀むことの子を持つた親に取つて必要なことは、實に此期間が大事の上にも大事だからなんである。

兒童は決して満六歳にして初めて目が見え、耳が聞え、口がしゃべれるわけぢやない。それらの機能の働きは早くから具はつてゐる。勿論その働きには、先後遅速があるであらう。それだから満六歳といふ規則が益々不合理となるのである。生れた月に依つて學齡そのものにも、一ヶ月以上十一ヶ月までの違ひが出来てゐる。そしてかの學校に於ける低能兒の多くは此月足らずの兒童に多いといふことは、統計の上に歴とした事實を物語つてゐるではないか。

兒童の時代に於ては、成長の段階は年に依つて律されない月に依つてすら大變な違ひがあることが、統計の上にも分るのだが、それは實は月の問題ぢやない、日の問題である。此生々活機の盛んに行はるゝ時代を六七年もホツタラかして置くことは、何といふ空恐ろしい怠慢であらう。學校といふもの、學令といふものがなかりせば、人はよく安んじて斯かる怠慢をなし得るであら

うか。

教育を以て學校の獨占となし、一切を擧げて學校に依頼し過ぎる弊害は實に計り知るべからざるものがある。もし學校といふものが、教育の上の絶好の機關であるならばまだしも、ほんたうの教育といふことからは、到底是認すべからざる多くの缺陷がアリアリとあらはれてゐる今日尙且つ人々は學校といふものゝ外在的な問題にのみかゝづらつて、眞に人間を教育する上に、學校が果たして最善のものなりや否やの本質的な問題に考へを向けようともしない。それは頭から教育とは學校の問題であり、教師の問題であつて、父兄たる吾々素人、又は教育を受くる子弟の彼等自身の自動的な問題でないかのやうに思つてゐるからである。

教育は之を與ふる者の問題であるよりも、之を受くる者の問題である。パンを求むる者に石を與へては、恨みを以て投げ返されるまでの事だ。求めざる物を與へたつて何にもならぬ。

勿論、その何を求むるかは、初めから分るものでは無いから、何でもかでも、初めは提供して見なければならぬ。その中から好きなものを發見したら、今度はいくらでもドンドン與へて行きさへすればいい。

をさせ得たらもうシメたものだ。注意をしないもので我々の頭に残つてゐるものはない。或事に没頭し得るといふことは、成人にも子供にも極めて必要な資質である。

然らばかうした注意集中は何うして得られるか。それはどんなにしたつて、外から来るもの、——義務とか理屈づけられた必要とか、單なる命令とか——そんなものから生れつこない。いくら生れさせようと努力したつて生れる氣づかひはない。それは飽までも内在的のものだ。個性本位のものである。それはどんなにしたつて、自分が心の内から、湧然として興味を感ずることではない。興味を感ずることには、注意を集中せざらんとして得べからざるものがある。そしてかうした没頭され得ることを持つたもの、ものにインダグチ（耽り）得る資質のものは、いかに幸福なことであらう。

然るに教育といふことは、これと 反對の行き方をするものだと思つてゐる者が多い。興味といふことが二の次になつて、義務とか單なる努力とかが習慣的に要求さるる。その爲に折角の個性が劃一的標準の爲に雜作もなく蹂躪される。

興味を覚えざるの故は、不出來な一つの學科の故にさへ一概に落第と烙印される。伸びゆくものを伸ばさざることの代りに、持つてゐないものを矢鱈にひつぱり出さうとし、若しくは矢鱈に押しつけやうと試みる。

これらのいけないことが抑も何から生じるか。それは。總じて觀察といふことが足りないことから來てゐる。觀察をする下地ともいふべき自由を兒童に與へることを否むクセから來てゐる。兒童に自由を與へずしていかにしてその個性を發露させることが出來やうか。兒童が教師の顔付に依つてその態度を變へるやうな状態で、どうして自然流露の個性が擱めやうか。兒童と共に遊び乍ら（然り、學ぶことが遊ぶことでなければならぬ）神が萬人の行藏を見そなはずやうに靜かに思ひやり深く觀察することが、ムダなおしやべりを続け乍ら絶えず忙しく、心に餘裕のない教師に出來ることぢやない。そしてかうした觀察眼のない教師に依つて取扱はるゝ兒童がいかに不幸なことであらう。

然し乍ら兒童の觀察を爲す最好適の位置にあるものはその父母である。とりわけ其の母である。いかなる最良の教師と雖も、母ほどの好適な位置には居れない。苟も母たるものが此の好適な位

置と、そこに於て爲すべき絶好の仕事とを知らずに過すならば、いくら我が子の教育を口にしても何にもならない。一番大事なことをお留守にして、末梢のことをいくら精こめてやつたところは何にもならない。父は必ずしも子供に親炙すること母の如く厚きを得ない。外に於けるその仕事は彼の大部分の時を占める。けれ共、母は子供をよそにしてどこにその時を最も有意義に送り得やう。

觀察し得る母を家庭に持つことは、それ自身家庭を教室に化して餘りある。教育は境遇だといふことは、昔からの通り言葉だ。而し境遇とは拵へものゝことぢやない。えり好みさへ必ずしも要しない。母といふものが境遇を創り成すのである。母そのものがいかなる境遇をも生かすのである。母の生きることが取りも直さず境遇が生くることである。あゝ、母、母、母のことは何ば言つても切りも限りもない。私の婦人觀は母に盡きる。私の教育論も母に盡きる。私の社會觀さへも母に盡きる。孔子は治國平天下を修身にまで還元した。私は更に母に迄煮詰る。

教育のスタートは學校ぢやない。學校は既に晚い。スタートは實に母の膝下に劃されてゐる。學齡に達する頃どころか、生れて間もない幼児が、目か覺めてさへ居れば、生きた蜻のやうに

矢鱈に四肢を動かすのは、アレア全く物を知覺せんとする要求に外ならないといふから驚く。實に、アノ頃から學齡に達する迄の知覺に對する幼兒の要求といふものは、その他の、人間の一生の、どの期間にもどの時代にもまして熱烈であり眞摯である。此の期間にこそ人間はその教育要具としての五官を整へるのである。此の期間に失つた感能、害はれた感能は最早永久に取り返されないのである。實に教育の最重要時といふならば此期間に比肩し得べきものは他にないと言つていい。

生れたる一箇の人間が、その五官を唯一の教育用具として最も忙しく知覺の爲にそれを働かす期間は、學校へ入る前に既に滿六ヶ年といふ長期である。此間の時間は、その眞剣サに於て、その全人的努力に於て、到底後の成長期の時間に比ぶべくもない。生理的に心理的に、恰も拋物線の發速から頂點までの線の如く只それ躍進あるのみである。此期間に教育といふものが爲されないうで、何時をか待つべきであらう？ 知る爲には火をさへも掴むことを辭せない此の最幼兒期こそ基礎的の教育の礎を置くべき時ではないか。

既に學校へ行つてゐる兄弟を持つもの、又は智識階級の如き讀書人の家庭などに於ては、既に三

四才頃からでも文字を覚えやうとする嗜慾が熾烈なものである。こうした時代には別に規則正しくなくともその折り／＼にチヨイ／＼教へてやるだけで充分小學一二年程度の読み書きがいつとはなしに出来るやうになる。此時代にやることは少しも頭の重荷にもならない。それが一つの遊びに外ならないのだから。(そして遊びと共に物が學ばれるといふのがいかによき教育のねらい所であらう) こうした機会に覚えたいことはいくら覚えさせた所が本人の得であつて損にはならない筈だ。それなのに大方の家庭に於ては、いまに學校へ行つてからつまらなくなるといふ杞憂から、無理にもそれを覚えさせまいとする。何といふ惜しい損失か。何といふ教育への絶好の機会を永遠に亡失させてゐる事か。何といふ兒童の完き働き——そのペインダの冒瀆か。

學校へ行つてからツマラナクなる。尤もな話だ。そうするとツマラナイものをさも有難いものやうに拜ます爲に學校といふものがあるのか。家に居て聞き飽きる程聞き慣れる話を、學校では一週間に割つて話して聞かせてゐるんだから。ツマラナクなるのは當り前ではないか。文字だつてさうだ。何も本で學ばなくとも既に相當の量のヴォケアバラリー(言葉)を口にしてゐるのである。何は措いても耳に慣れ、口に慣れてゐる位の言葉を読み書くこと位はいつ初めたつて

一向差支ないではないか。読み書くことは成人と同じく子供に取つても必要缺くべからざる方便である。その必要は外から押付けられる迄もない。子供自身内在のものだ。然るに學校へ入れる爲に肝腎の教育の萌芽を無理にも抑へ付けて置かなければならぬといふペラボウ至極な用意つてあるものか。

勿論、読み書くことを就學以前にやることはどんな家庭に於ても可能だといふわけではサラサラない。よしんば読み書きを教へ得ない家庭に於ても、子供の教育は學校以前に既に初められなければならぬもんだといふことをしつかり念頭に置かすことは、あらゆる家庭の純化の爲にも極めて必要なことだ。

新しい教育法の元祖ともいふべきモンテッソーリ女史は、ローマの貧民長屋の一部に「子供の家」といふものを持へた。それは元來教育を目的とするよりも、寧ろ共稼ぎの夫婦者の托兒所として設けられたものであつたが、おぼせいの子供達を預かつて見ると、必ずそこに何かしらの教育の事が爲されねばならぬ自然の要求が生じてくる。こゝに集まつてくる子供は二三才から學齡迄のもので、年齢が極めてマチ／＼なものであつたが、それを一堂に收容して何等の喧囂も混乱に

も陥らずに済んだ。參觀者達はそこに完全な教室にも比すべき靜肅と熱心とに感心せず居れなかつた。そこでの教育は大部分遊ばす事であつた。それも學校などでやるやうな團體的の訓練を主とする遊戯ではなく、めい／＼の子供にその好きなことをやらして置くことであつた。めいめいに好きな遊びをさして置き乍ら、一人の娯樂が附いてゐる丈で充分靜肅が保てるといふのは信すべからざることのやうだが、それがいかにも自然に行はれたさうである。こゝでは勿論本などを教へたわけではないが、子供達は落ちてゐた新聞の切れ端や、拾つてきたピラなどを持つてきて、それを讀んで貰ふ。又は地べたにそれを書いて遊ぶ。そういふ風にしてだんだん讀み書くことを覚えて行つた。それは子供に強制するのでも注ぎ込むのでもなく誠に自然に行はれた。これ等の兒童は最下層の貧民であつたに拘らず、學齡に達する頃には既に小學一二年程度の學力を優につけ得られたのである。モンテツソリー女史は此の程度の讀み書きは學校の邪魔になるところか却て必要だといふてゐる。

讀み書きはいくら早く初めたつて差支ない。それは子供自身の内から生ずる必要に外ならないのだから。そしてそれを知ることが、何と言つても自ら教育する最捷徑の方法を得ることなんだ

から。自ら必要を感じ自らそれを欲する時に躊躇なく之を與へるのが一番自然の行き方であらう。

算術の如きは必ずしも幼年期に於て、兒童自身がその必要を感じるわけぢやない。數の取り扱ひにも親交するわけぢやない。又頭でモノを抽象的に考へるといふことができない時代でもある。そうした時代に、無理にも數理に関する教へ方をしようと思ふと、兎角乾燥に流れ易い。そして乾燥に流れ、強制的になつたらもう學習といふ事が全然駄目になつて了ふ。最初は何よりも先づ算術といふことに對する興味を起させるといふのが根本條件なのである。新聞の切れ端でも讀みたがるやうになる時機を俟たなければならぬ。それは全く時期の問題であり、頭の、乃至體質の成長の程度の問題である。頭が數を取扱ひ得る程度の成長に達したならば、算術の如き例外といふものがない、一から十迄同一の原理法則から出發して行つてゐる學科はトン／＼拍子に進んで行けるべきものなのである。一つの法則をよく理解すると「それからそれと」推し及ぼして獨りで何處までも進んで行けるべき筈のものなのである。故に昔から學校での數學の成績が極めて悪かつた者でも、何かのキツカケに數學の法則に興味を持ち初め、それから心醉的に數學に没

頭するやうになつたといふ例はいくらもある。つまりその時機、その頭の状態といふことが數學學習には見逃すことのできない條件なのである。それだからたとへ年齢が同じでも、必ずしも同時に數學が初められるものぢやなし、又同時に進度し得るものではない。

ところが小學校に於ては、とてもそうした微妙な點に迄立入つて生徒を簡別的に取扱ふことが出来ない。單なる年齢といふものを唯一の基準として分類し、箇々の兒童の生理的、並びに心理的狀態などに向頓着なく、所謂一齊教授といふものをなしてゐるのである。そして一年にこれだけ、二年にこれだけといふ風に時間割に小切つてやつてるので、一寸した後は永久に取返しが附かない。實に兒童が最初の一寸した數觀念を他のものと一緒に理解することが出来なくつて、そして分らないなりに次から次へと引づられて行つた爲に、いつまで経つても分らずじまひに終り、算術といふものを徹底的に不得手なものときめて了つた者が多いことであらう。

一體物を覚える上に、速いものもあるだらうし遅いものもあるだらう。遅くとも覚えることは、速くない爲に覚えることまで斷念することよりは遙かにいゝ。他人が一年でやることを二年かゝつたつてそれは決して耻などと言はれるものぢやない。それは成長の遲速に過ぎないのだから。

速くて粗漏なるよりは遅くとも正確の方がよい。だから一年半などゝチヨコオな區切りなんか止めて、小學校を初學年、高學年の二期位に分けて、その各々を二三年宛かゝることにすれば、生徒の箇性に從つて學科進度の伸縮も出来るし、理解が遅いといふだけの理由で落第などといふ極刑にも等しい變な懲罰を與へることも入らぬではないか。落第で以て同じことを繰返さすよりも、もつと別の方法でその子の進度を促すやうな方法を講ずる方がどんなにいゝか。落第の汚名を雪ぐなどといふ發奮の氣は成人にならあるかも知れんが、そんな感激を所期することは兒童に卑屈な氣を起さすだけでも害毒である。その上同じことを又一年くり返すのかといふ氣持が學習に對する興味を半殺いで了ふ。くり返して物が理解出来るならば、何も一年を棒に振らせずとも、休暇を利用して個人教授をやつてもいい。兎に角、學習に對する興味を喚起するやうな方法を講ずるのが最も緊要なことではなければならぬ。

一體小學校では算術の爲にあまりに骨を折り過ぎる。何もあんなに迄クドクやらなくとも其時節が到來してからやつたら、もつと易々と出来るものではないだらうか。その時節が來ないのに無理に教へ込まうとするもんだから色々切り刻んで粉々にして、恰も強制食餌のやうなやり方

を取らなきやならなくなる。

考へても御覽、文字を教へられなかつたものは、終生文盲の域を脱しない。始終不便を嘆じつつも一生文盲であるのかなりが多い。けれ共物の勘定丈けはたとへ學校に入らなくとも充分用便が足りてゐる。人から教へられなかつたばかりに文盲ですごすものは多いが、學校へ入らぬ爲に勘定を知らないといふものはゐない。そして小學校あたりの算術はまア勘定に役立つといふこと位しか實用性がない。されば學校に於てあんなに迄クドクドしく算術にのみ骨折る必要が疑はしくなる。況やそれをさもさも六ヶしいもんだといふ風に觀念づけ、算術のできる生徒を一概に頭がよいとなすなどは益々考へものである。

理性は必ずしも數學でのみ養はるゝものでも、又鍛へらるゝものでもない。數學の効用に依つてのみ兒童を律することが出来ない。兒童の世界に取つては、よき文學、よき藝術がより多く偉大なる感化をもつ。理性はよき文學に依つても充分に鍛へられ得る。これ迄は數學の眞の必要よりも、數學といふものゝ取扱ひ方を誤つたが爲に、ヘンに難解な觀念を與へて了ひ、難解なるが故に高級であり大事であるといふやうに思はしめてゐた罪が大きい。實に數學も頭の力の一つの

練習に過ぎないもので、唱歌、體操と同位置に取扱ふ方が却て効果があるかも知れぬとさへ思ふ。實際、學校に於てはあまりに數學が強調され過ぎる。そして機械的暗記を強ひる試験勉強が、丸つきり方法の異ふ、暗記などでゴマカすことの出来ない數學までも同じ筆法で取扱はしめる。

惟ふに小學校に於ては、兒童の頭を苦しめるとどんな事でもが、害にこそなれ益にはならぬ。苦しめる事で無くて、楽しましめる事でなければならぬ。顔をしかめ乍らやる事では無くして、眼を輝かし乍らやる事で無ければならぬ。眼を輝かさせる事が、物を教へる事よりも大事でそしてむづかしい。清新と快活とは兒童の大きな徳である。それを曇らすやうなやり方ならもうオジヤンだ。

然るに學校には教科書といふものがある。只安いといふ事を專一にしてその體裁も内容も一目見た丈けでウンザリして了ふ程、色彩もければ美的な表現もない。ことごとく安ツボいづくめである。兒童をして第一番に學文に導くべき重大な役目をもつ教科書なら、少し位文部省が損をしても、モットしつかりした見ても讀んでも氣持よい創作であつてもいゝぢやないか。

教科書の乾燥無味が、食慾にも等しき智識慾を、變に稀釋して了ふ。その害毒丈けでも堪まら

ないものである。「教科書は骨だけ書いてある。だから乾燥無味たるを免れない。之に血肉をつけるのは教師の役目だ。」かう一般に思はれてゐるやうだが、なぜ骨丈け書いて済まして置くのか？ それからが分らない。もし骨丈けでなく血肉までもつけた生きた書き方であつたら、全然教師といふものがいらなくなるわけか？ すれや教師といふ職業に飯を食はせんが爲に、教科書といふものが態々味もない甘くもない風に書かれるのか？

文學でも、科學でも、劃時代的なもの、その道の權威として一般に認められてゐる述作は確にある。それは大振誰にも讀まるゝやうに書かれてあるものだ。何となれば、初めて新しい説を世に問ふ人は、全世界に向つて喚びかくるので決して或る特定の専門家に依つてのみ鑑賞されんことを期するものではないから。それは誰にも讀まるべきものであり、又誰でもが讀むべきものだ。さうした大作を一年でも二年でもかゝつて教師と生徒とが相協力して讀む、研究して行くといふ態度がなぜ取れないのか？

易より難に、簡より繁に、といふ方則に餘りに拘泥し過ぎて、同じものを程度を變へてやつてゐるやうな場合さへある。よしんば難易の程度が違ふにしろ、同じものゝ繰返しは決して生徒の

興味を増す所以ではない。初めから渾然たる一つの述作を研究しつゝやつて行く態度こそ一番自然の行き方で、且つ効果の多いやり方なんだ。

ツギハギでない、繼續した、脈絡のある考へ方、讀み方——追窮とか、研究とかに赴くよき習慣が、さうしたところから養はるゝのである。各々の人が各々の個性に従つて、津々たる興味に促され乍ら何處までも食ひ込んで行ことが許されないやうな學習法は、とてもとても本物ではない。

教科書の只一つの得は、試験勉強の盲目的暗誦に役立つ丈けだ。あれは恰も此頃流行のカード式寄せ集めと排列に過ぎんだから、試験勉強には誠に持つて來いの代物なんだらう。それから無能な教師の手引草としての役目はおまけ分だ。下らない教科書ちうものゝ爲に、教師を要し、獨案内を要し、更に學生にノートを要求するそれらの浪費丈けでも許すべからざるものだ。

讀まるべき一切のものは、どつかしら文學的に取扱はれてゐなければならぬ。人間はどんなにしたつとて、美といふものゝ魅力からは免れつこない。智識だつてさうだ。之が表現を美的にするといふことは必要なことなんだ。然るに教科書といふヤツは讀みものとしての價値はゼロだ。

どんなに苦心したらアンナ風に面白くなく書けるのだらう。全国幾十百萬の人達に義務的に読ますこと、讀者の数が法令できまつてゐるやうな安心出来る著作者の仕方としては、もう少し工夫してもよかりさうなもんだ。アレはどうしてもあゝいふ風に面白くもない型に作り上げないと文部省認定といふ大きな印を貰へないからなのだらうか？

讀まざるゝ者こそいゝ迷惑だ。更にそれに味をつけて、兎も角も食べいゝものに料理しなければならぬ教師こそいゝ迷惑だ。料理ケのない教師は、試験のコケオドカシで理が非でも食はさでは措かぬ。

教科書許りは、秦の始皇の御手を煩はしてもいゝナ。

小學校の國語讀本はアリヤ一體、外國人にでも讀ますつもりで拵へたものか。尋常一年でアノ六ヶ年全部の讀本を讀ましたつていゝ位のものだ。物を讀みたい慾求、従つて文字を覺えるといふことを必ずしも重荷としない。そして又最も物覺えのいゝ時期に、態々それを抑止して、ケチ臭く小さくチ切つて與へる。一年、二年、三年、四年、——六年のものが八ヶ年に延長されたか

らつてアンナことをしてゐたんでは、日本人であり乍ら日本の古典の一冊、名著の一冊だつて讀めはしない。否その古典なり、名著なりの存在すら知らずに終るだらう。年とつてから來朝した外國人だつて、もつと早く日本語日本文といふものに熟達し得るのに、日本の子供が六ヶ年もかゝつて何一つ日本自身の代表的作物が讀めないとは情なくもバカゲたやり方ではないか。

文部省よ、一度町へ出て、本屋の店頭で蠅の如くむらがりたかつてゐる小學兒童の慾求を見ろ！ 教科書、讀本の無味乾燥が、汗牛充棟の安出版と、それにたかる蠅の如き兒童とを製造して居るのだぞ！ そして何物をも、何らの纏まつた思想の片鱗（否、片鱗ではいけない、どんなに小さくとも全魚でなければいけないのだが）でもが、讀本の中になく、それに依つて自分で創作慾を充たせる何ものをも與へられないものだから、止むを得ず彼等兒童は本屋の店頭でむらがり、そして安つばい豆本と雑誌にその渴望を充たしてゐるのだぞ！ そしてお前達が知らず存ぜざるうちに、さうした安出版物から學校に於けるよりも千百倍のアイデア（思想）を受けてゐるのだ！ 批判もし淘汰もなし能ふ何等の心の素養も與へられることなしに！

日本人にして、古事記を讀み、萬葉集を讀み、更に源氏物語を讀んだものは何人ゐるだらう。

近頃源氏物語の英譯第一巻が出て、相當評判になつてゐるやうだが、日本の普通教育の學校教科書にその一ページでも採用されてゐるのか。抑も日本人が誰でもそれを讀めるやうに教へられてゐるのか。日本人に取つて上代の古典が英語よりも學び難いのか。英語に最も多くの時間を取る中學、及びそれ以上の學校のやり方は、源氏物語を英譯で讀まそうとする爲か？

民族的に目覺めよと近頃頻りに叫んで來てはゐるが第一日本の教育といふものが民族的に目覺めてゐるかどうか。それが先決問題だ。日本の學校といふものが田舎で最初のそして唯一の洋風建築物である如く、日本の教育といふものが丸切りスツテツペンから洋風の受賣りではなかつたか。寺小屋學問はチョンマゲと共に切り棄てられた。だがチョンマゲの代りにペンキ塗りの床屋が榮え、コスメツクとポマードが輸入されたにしろ、人間の頭がどれ丈け民族的に進化したと言へるか。寺小屋の代りに永代負債の立派な學校が改築されたにしろ。物を學んだといふ價值が、寺小屋に半年乃至一年通つたものと、義務教育六ヶ年通ひつめたものと、どれ丈けの違ひがあるのか。義務教育の普及といふことは長屋のおかみさんが新聞をよみ、兵隊が郷里に手紙を書ける程度のものでしかなかつたならば、寺小屋で讀んだ、子曰く「學んで時に之を習ふ又樂しからず

や」てなことを口にし得る方が遙かにましぢやないか？

昔は日本人が日本語を學ぶ爲に今のやうに多くの年月を要しなかつた。彼等は必ずしも教育の理論とか方法とかを詮議立てはしなかつたかも知れないが、端的に思想學問といふものに入つて行つた。今のやうに準備許り長くて、恰も準備そのものが教育の全體かと思はるゝやうな浪費はしなかつた。各々が必要を感じて學び、學んだものは必ず生かすといふギリ／＼決着の仕事だつた。今のは何だかポーツとしてこれもやるあれもかぢるといつた風に、各々の頭に必要の意識が生じない。何の爲にこれ／＼を學んでゐるんだか明かでない。ただ義務だからやつてゐるといふ位に過ぎないかに思はれる。少しも眞劍味がない。教師にも生徒にも。

そして見よ、義務教育の制度布かれて四十年、今やその謬つた方針の立て直しが、新教育の名の下に、却て寺小屋學問のよきところに着眼され初めたのではないか。例へばダルトン案の分圖式といふのは、もうチャンと昔の輪講といふことに存在して居たんだ。更に丁抹の國民高等學校は、その原則は全く一人の人格を中心とした昔の私塾に外ならぬではないか。

教育といふものは元來一人の人格の一生涯に亘る仕事で、そして根本は學校といふやうなバラ

ツク集團でやるべきもんぢやない。一私塾に於てやるべきものなんだ。笈を負ひ薪水の勞を厭はざる程で初めて教育の目的が達せられるものなのだ。辨當を下げて何時に行つて何時に歸るかどといふキマリ切つたマダルツコイ、ウヤマヤで過ごせるやうな仕事ぢやない。もつとインテンシブな、集約なカルチュアの仕方であればならぬ。さてこそ新しい教育はだん／＼從來の粗放的な大農式なカルチュアに反抗して、もつと端的に深く切實に耕し初めたのだ。

今になつて思へば、教育制度といふものがいかに多くの優秀なる教育家を其資格の故に、單に師範學校を出なかつたといふ故を以て、ムザ／＼淘汰して了つたことであらう。吾々の少時を回顧して見ても、師範學校出でない人の方に何かしら人の師表に立てる精神力といつたやうなものがあつた氣がする。勿論それは大抵漢文を教へる漢學者の生き残りだつたせいもあるだらうが、その教へる學科に對する含蓄は勿論のこと、教育といふ職を兎に角今のやうには安ツぽく見てゐなかつた。そして教育を今のやうには段階的に見てゐなかつた。どんな質問にも全幅の答解を與へた。それはまだ早い、もつと進んだ學校に行つてから、などといふ言ひ譯はしなかつた。従つてよしんば上級の學校に榮轉するアテはなくとも、死ぬまで學問に對する研究は吝しまない類ひ

の人だつた

一體、教育家といふものが學校なんかで養成できるもんだらうか？　これがほんとうに大きな問題だ。師範學校さへ出れば誰も彼も教師で飯が食へるといふことは、それ丈で大きな不都合を孕む計りでない、師範學校出でない外の飛入りを絶對的に防ぐことの方がより多く不都合だ。本當の教育家とは生れて來た人の外にない。又は自分で産みの苦しみを嘗めて來た人の外にない。生れて來た教育家が中學校に入れられて役人たり技師たるべく養成され、生れざる教育家が學資の故に多く師範學校にいや／＼乍ら入れられる。そうかと思ふと待遇が悪いのと面白くもないので足を洗はう／＼と心掛け乍らそれ以外の修練をやらなかつた爲にヤニヤニ教職に留まつてゐるといふのも多い。そして、アレもやり、コレもやつて見たが、その純眞な氣質や無差別に人を愛したい氣持や苛辣な競争場裡に立てない性質から、將又、何をやつても徹底しない、何をやつても幻滅が來る。そして苦しみ抜き考へ抜いた揚句の果に、一番根本的な、一番恒久的な、一番生命的な仕事は教育にあると泌々と思ひ付いても、扱教育界といふものが師範出といふもので、爪も立たない様に固められてゐるのを見る時、そしてその爲にそうした社會の鐵砂で眞珠の

如く分泌された眞成の教育家が教育にたづさはれない事實、そうした制度、それは償ふべくもない無盡の損失を人の世に持ち來すものではないか。勿論、今の様に餘りに系統的に官廳、役人といふ様な者の爲に干渉され、縛り付けられてゐる學校といふ機關の中では、どんなに生れたる教育家でも自由に振舞ふ事ができないのは分り切つてゐるから、譬へ教育界の門を開いて普く人材を天下の廣居から採り入れた所がそれ丈で教育が生る譯でもない。加之分業とか失業豫防とかの經濟上の鐵則が益々そうした墻壁を固くするのは見易い道理だから、何といつても新しい教育は私塾的に出發する外に道がない。

第二

素人の教育論はもう止めやうかとも思ふたが、どうもまだ言ひ足りない。恐らく毎號何かしら教育に就いて、言つてゐなければ氣が濟まないやうにさへ思ふ。盲人蛇に怖ぢざる勇に任せて又前號の續きをつゞける。

俺は教育の素人だから、黒人連から見たら「ソナナ事はとうにやられてゐる」とも言ふであら

うし、「又ソナナことは今の時代に、今の政府の下にはとても出來さうにない」とも言ふであらう。とうにやられてゐるなら尙結構だし、今直ぐにやられなくとも、ほんとうのことはいつかはやられるにきまつてゐるから、言ふだけはいくら早く言つたつて早すぎるなんてことはない。政府なんちゆうものは、時の上に、歴史の上に、ブクブク浮かんでは消える泡にしか過ぎないものだから、その爲に人間の恒久的の進化運動までが差控へられるもんぢやない。吾々は人間の可能性を信じないで何を信じればいいのか？ 政府だらうが何んだらうが、人間の拵へたものはやはり人間の手に依つて造り直される外に道がないではないか？

一體我が日本國に於いて、大學教育と中等教育と小學教育とに於いて、生徒一人當りの公費はどんな割合になつてゐるだらうか？

私は之を數字に依つて示したいと思ふた。けれども私の手許にはそれを統計すべき何等の資料も無い。だが、小學教育が一人當りの經費に於て、最も少額であるべきは疑ふ餘地がない。何となれば、その生徒數に於て比較にならない大多數であり、その教師は悉く安給料であり、その校舍、その設備は、悉く安ツポイントであるのだから。それは何もソロバンで割つたり掛けたり

しないでも、充分な事ななんだ。数字なんてものは、いかにも正確なやうに見せかけて、毎年々々違つてゆくものなんだし、それに第一調査の基本となるべき一々の地方吏員などには、誠に無責任な杜撰な態度のものもあるんだから餘りアテにはならない。要は大小、多少の比較が分ればそれでいゝのだ。兎に角、生徒一人當りの経費に於て小學校教育が一番少額であるべきは数字を俟たなくとも明かになり得る概念だ。

扱、問題はこれからだ。一體小學校教育に最少限の経費を當てがつて間に合はして置くのは、一國の進運に取つてどんな影響があるのだろうか？

小學校教育は國民必須の教育である。何を措いても之は國家が無料でやらなくちやならぬ最大の投資事業である。それは國民の義務であるよりも國家の資務なんである。國家がその最重要の構成要素たる人間の養成に對して、最大の投資をなすべきは是れ自明の理ではないか。然るにそれがそうではない。一番安ツボク、一番間に合はせにやられてゐるにしか過ぎない。その教師には最下等の月給を給し、その校舎設備は全然町村の瘦腰に任せ切り、それに提供する書籍は最低級の價値しか持たない。

ア、どんなに貧乏な家庭でも、學校は一人前にやりたいと願ふ心理が、なぜ國家にも乗らうつらないのか。どんなに國が貧乏だにしろ、教育費に丈は一番ふん張らうとする氣構へがさ。

そして見よ、江渡さんの調査に依れば、日本の國家が支出する教育費といふものが、それに更に産業費を加へてさへ尙且つ恩給年金額よりも實に二百萬圓も過少な事實を。ア、恩給年金なるものゝいかにして、いかなるもの達に支拂はれてゐるかは今センサクする必要はない。そのほんとうに解剖され、論議される時代はいづれ日本の國にも來やうから。只教育費なるもの、何かといへば次代の國民とか、新時代の中堅とか口先許りでおだて上げられる國民教育の費用が、恩給年金の何分の一にしか過ぎない事實。これから萌え出やうとする若木若草の肥料が、枯死を待つのみなる老樹衰草の爲にあらかた奪ひ去らるゝ事實。目ある者は見、耳ある者は聞け！

人間に取つて、最も教育に好適なる時代はいつか？ それは滿十四歳迄の小學時代の外にな

5。

父母に取つてその子供を教育といふものに全然捧げ奉つていゝ時代はいつか？ それは小學校

時代の外にない。

満十四歳といへば、昔なら元服の年齢ではないか。元服といふことは昔に於ては一人前の意味であつた。文武兼備の一人前といふことであつた。今はどうだ。これからやつと、まア學問なり職業なりに取りかゝらうかといふ位のところだ。昔と今では時代が違ふ。御尤も。時代が違ふとは人間が肉體的に精神的に退化したといふワケではなからうな。

やり方だ、やり方だ。言ふたら色々の理窟もつかう、調べたらいろ／＼の學者臭い文書も書けやう。が、俺にはそんなヒマはない。俺は只直感的に物を言ふ丈けだ。それでいゝ、理窟なんかで納得さしてどうなるもんだ。共鳴するものはその通りやればいゝし、反対なものはその通りやらなきやいゝ迄のことだから。

やり方の違ひは能率の違ひだ。人間がめい／＼の判断に依つて必要なと思ふ學習を、自由にやれたら、もつともつと教育が樂にも行けるし、物入りもかゝらずに済む。教育が全然自分自身の爲だのに、七八ケましい法令で資格だの段階だのをきめる必要はどこにあらう。實に人間の成長と同じ過程にあるべき教育をクドクドしい法令で縛る程馬鹿が切つたことはない。今の教育は全

く自らなつた繩で自分の手足を縛つてジタバタしてる。教育の問戸を今の様に窮屈にして置くことに依つて得をするものは誰か？ それは云ふ迄もなく決して國家ではなからう。それはまア三十まで親の脛を噛むことの出来る仕合はせな（或意味からは不仕合はせな）階級丈けしかなからう。

教育上の法令は十中の九分九厘まで特權擁護の爲でしかない。かの實業界のトラストや、カーポレーションの常套手段たる獨占買占の商略と全く其揆を一にするものである。もし文官任用令なるものが撤廢されたならば、帝國大學はよく今日の繁昌を持続することが出来やうか？ 此の一事だけでも日本の教育が口では自由競争を唱導してゐ乍ら、實際は悉く不自由極まる制約の下に、各々その繩張りを固守せんが爲に、汲々として日も維れ足らざる有様である。

帝國大學は競争試験に依つて選抜された頭のいゝ者のはいる所だ。だからその卒業者は均らして頭がいゝ、ところ一般に思はされてゐる。なるほど。そんなに優秀な頭の持主のみだつたら、ナンデいろ／＼な特權を持つてその繩張りを擁護し、本來自由競走であるべき活動の舞臺に、恰も駿馬と鷲馬との競走に似たるハンチケアップを設くるのか。頭のいい者なら宜しく素ツ裸で立合

ふべきではないか。任用なんか自分等の手で撒廢して見せて國民全體の前に機會均等の活舞臺を出現せしむべきではないか。實にかの學問なるものの軋轢の爲に、日本國民は社會的にいかに迷惑を蒙つてゐるか知れやしない。

更に、「選抜試験が通つたから頭がよいといふ觀念」には、根本的に大きな疑問がある。試験といふものは頭をよくする道具だか、悪くする道具だかの見さかひの附く人には説明の要もないのだが、一階又一階とあゝした破れ梯子を危つかしく上つてきた人間の神経系統は、例外なしに傷害されてゐると云つても差支なからう。零細な智識の蓄音器的再現がどうして頭のよいことになり得るか。宜なり、學校に於ける優等生の頭から創造的なる何等の産物も出で來らざることや！

一體日本中の學生といふ學生が、蓄音器的再現の練習の爲でなしに、ほんとうに興味を持つた學科に打ち込んであれ丈けの苦痛と努力とを惜まなかつたならば、どんなに素晴らしい創造がなせるだらう。それこそほんとうに怖るべく驚くべき國民の出現を、世界の前に示すこととなるだらう。現在のやうに職業的のスポーツ丈が稍生き／＼して、平學生は押しなべて燻んだ生活相を

社會から反映し、試験といふ壓搾機で萎縮されてるやううでは、少しも世界に對して誇り得る現象とはなれない。

ミイラは墓場に、生き物は野原に！

實に近代の産業革命が機械の發明にある如く、そして機械が工場の出現を促した如く、學校の出現が文明の相を——そして、人間の素質を革命せしめつゝある。實に前世紀には思ひ及ばなかつた知能犯の頻出、最高學府出身者の最高收賄者なる事實。遊食、遊民、ユートピヤンの悉くが學校も學校高級の學校の所産なる統計を俟つ迄もない明確な事實。是らの事實は抑も何を語る乎。「學校と工場」とは、その發生の動機を同じうする。曰く大量生産、粗製濫造、さてこそ學校に長く月謝を拂へば拂ふ程、益々純眞な人間味を失ふに至るのであらう。

もし文部省なるものが、徴兵猶豫の特典だの、いろ／＼な受験資格などを一手販賣に獨占してゐるでなかつたら、人間が學問なり技術なりを學ぶ機關と機會とは、世の中の廣ツ場にまだまだ自由に豊富に出來たに違ひない。

日本に於て、最も多數の學生を包容してゐる法文科の如き學問は、取り分け私塾的であつて差支

ない。差支ない所が、流行りの學者などは市井に出て帷を開く方が、大學なんかできまり切つた俸給を貰つて、おまけに停年制なんかで脅かされるよりも、よつぽど割りのいい収入を得らるゝであらう。ドイツなんかでは同じ大學教授でも、講座に出てくる學生の數に依つて教授の懐具合が異なるそうだが、必ずしも大學の講堂でなくとも、劇場でも公會堂でも、寺院でも教會でも、適當に使へる講義所は幾らもある。近頃のラジオを利用したら、正に種切れになりなるとする放送局に新しい財源を供することとなるであらう。

法文科はそれでいゝとして、設備を要する理工科はどうする？ といふ者があるだらう。理工科だつてその通りと言下に答へる許りだ。大體、大學ではホンのプリンシプル丈の講義で、日進月歩の應用方面のことは、とても民間の營利機關に叶はないものだ。設備は實驗の爲に過ぎない。實驗の爲ならば理化學研究所や、民間工場などを利用見學したら澤山だ。それよりもいゝことは幾ら大學の實驗室で手際よくやつても、民間の工場に出て直ぐオイソレと役に立つものぢやないから、プリンシプル位で威張らせるクセをつけないやうに、「大學出が工場の下ツバ」に叩き込まれても顔をしめめないやうにしつけるのが肝腎だ。

もし、「社會は大學校なり」の金言を實行せんとならば、大學の講堂なんか巨額の資金を投ずるよりも、圖書館なり、博物館なりに充分の施設を整へることがより必要なことだ。大學に通つて一人／＼の教授の口授をノートに書き取ることは、下宿の二階で寢轉び乍ら、友人のノートを読メクラ暗記することゝ、試験の爲には何等の變りなき事實と、圖書館で權威ある著書を自由に讀みこなす態度と、孰れが眞の學習法に叶へるものか。然るに日本一の上野圖書館は開館時間前から満員で篤學の人士が空を持つ爲に館前に生欠伸をかみ殺して佇立しなければならぬといふミスボラシキ財政状態に於て、一大學の講堂に三百萬圓を寄附して大いなる名譽と心得るものあり、而して又、一大學の獨占圖書館に四百萬圓の寄附を一外人より受けて隨喜の涙を流す大學教授連もある。帝國大學は「書物の代りに生きた教授」に多大の金をかけてゐるんぢやないか。一週數時間に過ぎざるその講義時間と、高等官何等のその俸給を以てして書物を自ら買つて讀めないのか。圖書館なるものは其本來の性質からして、決して大學で獨占すべきものぢやない。市民も學生も大學教授も、學問眞理の前には同一の地位でしかない。何物のスノツプぞ（成り上り者）！眞理の前にその同胞を差別待遇せんとすることや！

フランク・マンゼイは、米國出版界の大立者の一人でありました。一八八一年に僅か四十弗を懐にして、紐育に出て來た田舎青年がその生涯に約一億圓に近い資産を作つて此程物故しました。之は一つのロマンスとして充分新聞雜誌にもはやさるゝネウチがありませう。而もそれ以上のロマンスは彼の死後に行はれました。彼の遺書を開いて見たら彼は殆ど全財産を紐育の博物館に寄附してゐることが分りました。大學の講堂や市民公會堂にそこばくの寄附を生前に於てなした日本一の大金貨と、一億圓の全財産にノシをつけて人にも知らせず、そつくりそのまゝ博物館に残して死んで行く人間の心持とを思つて見て下さい。

近來教育費の遞増が日本國家の細胞なる町村財政を破産に瀕せしめつゝある。而も教育費の國庫支辨といふことが、内閣の鼎を揺るがす大問題となつた。教育に關する問題が内閣を揺るがすといへば大きやうに聞えるが、その實わづか一千萬圓とか二千萬圓とかの差額で、軍艦一隻にかつかぬ費用なんだが、それが軍備擴張の爲ならば御無理御尤もで通り、教育などいふぢやムサ

イことにはなるべく出し澁るところにお目を止められたい。人口が殖へるに従つて教育費も殖へるのは當然のことだが、兎角文部大臣とさへ云へば伴食にきまつてゐた歴代の大臣が、只經費の年々嵩み行くことに依つて、教育といふものをやゝ水平面に浮き上らせた形だ。

一國の文教を司る文部大臣が伴食に甘んずるのは、それ自身耻である許りではない由々しい國家興亡の大問題だ。一體外の大員なら兎に角、文部大臣が内閣更迭毎に代らなければならぬ理由は何處にあらう？ 日本では陸軍大臣や、海軍大臣などは、數代留任しても一向誰も怪しまないが、文部大臣は必ず代るものと心得てゐる。一國文教の方針が内閣毎に變はるわけではないのに、なぜ大臣が頻々代らねばならぬのか。文部大臣こそ宮内大臣の如く「内閣の交迭なんか超然として」恒久なる理想の一路に邁進すべきではないか。

文部省などといふ事務的吏僚の府が一國文教の總本山として強權を揮ふ國に於て、文部大臣が伴食であつていいといふことは大へんな矛盾である。外のことは兎に角、教育に文は強權を以て臨まることが迷惑至極でなければならぬ。近頃日本でもワイワイ持てはやす丁抹の國民高等學校などに於ては、此の強權といふやうなことは、藥にしたくもない。學校のことは校長以外の何

處からも一切干渉が来ないのだ。學ぶならそんな點でも學ぶがいゝし、マネをするならそんな所から初めたらいゝ。教育家の部類にも、思想家の部類にも、哲人の部類にもカラキシ入れられそうもない人達が代々、文部大臣の椅子に坐つて、そこから全國のあらゆる學校といふ學校に號令を下してゐた國に、果して新しい創見と、獨創のプリンシプルに立つた教育機關を許して置けるかどうか？

もしも文部省の干渉がもつとゆるいならば、日本にも、必要に迫られてまだまだいろんな組織と内容を持つた學校なり私塾なりが出来るに違ひない。試験に終始する學校で學ぶよりも、食を慕ふが如く學を愛するが故に、一人の人格を中心とした學塾にシンミリと、そして又ミツシリと學びたい心持の者も多いことであらう。そうした心持のものそうした志の者を受け容るゝところが世の中にあつてもいゝ。

アリストートルであつたか『自らが自らに疑問を扛げる外に、智識への道がない』と云つた。自分の心の中に湧き起つた疑問、それを自分で解かうとする心が學問への最勝の道である。智識とは單なる受け容れべきものぢやない。自分の衷に醗酵さすべきものなんだ、それは決して他動

的なものぢやない、飽くまで自動的のものだ。

故に自ら學ばんとする者、自ら學ばんと欲することの外に、ほんとうに學べるものぢやない。自らの心が要求しないことを、他から強制されて記憶に別り付けやうとする努力は、全く徒勞に了るにしか過ぎない。そりや成程試験の一日丈は、或はどうか間合はされるかも知れぬが、試験が過ぎると茫然一夢と化し去る許りだ。それは些かも本人自身の血肉となつて後々までも役に立つといふやうなものがない。生涯に亘つて必要でもないものを、最も印象され易い若い頭に無理矢理に記憶させることは何の益になるか。記憶力の練習？ 笑はせるな、記憶力の練習とは何でもかでもゴツチャゴツチャに頭の中に詰め込んで置くことか。吾々は下らない餘計なものが頭の中にこびりついてゐる爲に、いかに困つてゐるかお互に反省して見たらどうだ。ほんとうに必要を感じ、ほんとうに興味を持つてやつたものならどうして忘れんとして忘れ得るものであらう。

ほんとうに心に理解しないことを試験の爲に無理に記憶に別りつけることは、取り回へしのない瘡癩を若い頭に蒙らしめてゐることに氣がつかないか。一時的、際物的臨機應變的に流れ

易い悪習慣は實にかうした試験を主眼とする學校勉強法に依つて意識的にも無意識的にも不斷につけられてゐる事にかがつかないか。凡てが義務であり、強制であり、競争であり野心であつて、落着いた實着な素直な心の満足が得られない。子供がその無邪氣な心の熟中し得るさまは、成人の法悦にもたぐひつべき三昧境である。そうした至上の境地を絶えず攪亂せしめて行くのが、學校に於て與へらるゝ變哲な習慣である。

「それからそれと辿り行く道行き」——これが成人許りぢやない、子供に取つても自然の行き方である。一つの知識が更に次の知識の要求を生ぜしめ、一つの疑問を解決し得た成長が更に次の疑問へと喜びの情を以て歩を進ましめる。智識が智識の踏臺であつて、學年などといふ單なる時の區切りや、先生の切り盛りする點數と通信簿が成長の階段となり得るものぢやない。そんな人工の階段などを眼中に置かない事が眞に物を學ぶといふ謙虚な態度に居らしむるのである。

高等教育を受けんとするものには、取り分けこうした態度がふさはしく必要なのだ。それだけに高等教育を受けんとするもの程、層々又層々、試験から試験へと連鎖的の難關を突破しなければならぬ。是れは學問への正順な道行きと態度との上に辯解の餘地なき大矛盾ではないか。その

試験も實力試験、性能試験ではなくて、單なる入學試験の爲でしかない。高等教育を受くる爲に人間がそれ程の犠牲を要するものであるや否やは暫らく不問に附すとすも、高等教育の目指すより深き研究に入る爲に、却てその本然の學習法を破壊してゐる態度は何としたもんだらう？

斯うした矛盾した態度を怪しまないでゐるのは、全く時勢の行詰りで人々の目が血迷つてゐる結果だ。ほんとうの人間の叡智とか成長とかに、もはやかゝづらつてゐられなくなつた爲だ。何んでもかんでも學校へ入れ、學校を出さないと飯が食へまいと思つた錯覺の爲だ。世の中の人は教育とさへ言へば直に學校といふものを聯想し、そして一世を擧げて學校といふものに膠着し、學校の外に教育といふものを認めず、求めざる間に、學校といふものが途方もない方向に成り上がつて、ほんとうは成り下がつて、恰も學校の門が人間の登龍門のやうになつて了つた。

學校といふものは、「單なる便宜の爲の一つの道具」に過ぎないものだ。道具といふ字が當らないといふならば、機關でもいゝ。それは教育といふことの爲に本質的に必要な機關では毛頭ない。それは教育普及といふ俄仕立の、泥繩式の間合はせの機關で、かの粗製濫造を旨とする工場とその出現の理由を同じうするものなのである。而も現在に於ては、その工場の役目さへ成し

得ず、多くの原料を門前に山のやうに堆積さして置き乍ら、自然に下の方から腐るがままに任
かしてゐる外ないといふ有様だ。

學校が不足だといふことは決して國として名譽なことではない。旅館、料理店、劇場、公會堂
官廳、等は實に堂々たる大厦高樓を以て、續々と出來つゝあるが、學校と言へばいつもきまり切
つたバラツクに毛の生へた程度の建物で我慢してゐる國も情ないものだが、それと好一對のバカ
ラシサは、學校で無ければ教育の夜も日も開ぬ國民一般の心理である。第一經濟的に學校の門か
ら玄關拂ひされてゐる階級が、國民の何十パーセントかを占めて居るのが明かな今日、學校に對
する絶望がそのまま教育に對する絶望となつてゐる心理は誠に怖るべくそして又憫れむべきもの
だ。

幸か不幸か、學校に對する幻滅は、もうそろ／＼現れ出してきた。高等遊民の増殖はその一つ
だ。成人教育の必要がその一つだ。在來の教育方針をすつくり改めない限り、日本人は死ね迄學
校に入れて置いても尙足れりとはしないであらう。

幸か不幸か我々農村人に取つては學校の生活はきまりきつてゐる。我々は義務さへ了へれば多

く學校といふものにかかはらなくて済む。勿論學校といふものを、時もあらうに漸く智識慾の芽
さす頃に思ひ切らさるゝ悲痛と煩悶とは、身を賣つても學校丈は續けさせることを傳統的に固執
してゐる階級には、とても／＼分りつこないのだが。

而し乍ら、學校の門を潜つて初めて學校といふものゝ價値に幻滅したものよりは、學校に憧れ
乍ら教育の道を自らに求め、自ら開拓し行く者の方が、どれ丈正しい道の上にあることか。學校
への絶望が教育への絶望となる類の者は、學校からの卒業が教育からの卒業と思ふこと程左様に
情けないケチな考へ方である。「教へられさへすれば誰でも發明になれる」と思つた考へ方は、傳
來の舊い考へ方であつたが、それは學校といふものゝ出現以來、長い年月の實驗に依つて全然間
違つてゐることが分かり出した。自ら學ぼう、自ら究めやう、飢えたるものが食を思ふやうに、
學ぶことに對して「飢え」を感じることが抑も教育の根元の出發點であることが分つてきた。「教
へらるゝ」よりも「學ばないで居られない」といふ自分自身の止み難き要求が第一なのである。
そしてこれは決していゝ加減分別のついた年輩に起る心の芽生えぢやなく、實に學齡に達する頃
から、否その以前からでも潜在してゐるから不思議だ。

學齡以前に「物を學ぶ飢え」を感じることは既に前號に述べた。又それを學校の故に抑へ付けて置くムダも亦前號に説いた。學校生活のペラボウに長い不經濟を如何ともされずにまごついてゐ乍ら、肝腎の芽生えをボンヤリほつとく無自覺には呆れて物の言へない阿呆らしさであるが、それらは教育のことを他動的に人任せに許り考へて、自分のこと自身で出来ることと思はない結果である。

教育のことは「學ばせる」事ではなくして「學ばう」とするその時期、そのキツカケが一番大事なのである。そのキツカケを逸し去り、その意氣込みを反らして了ふことは取り回しのつかない損失なのである。人間の行動は習慣化されるときに一番樂だ。幼児がヨチヨチ歩ける頃から無理でない指導を（指導といふヤツは元來自然法爾であるべきものなんだが）與へらるゝことはその成長の上に大へんいゝことだ。それは學校なんかの形式陶冶と全然異つたことなんだから、そこに充分の研究と工夫を積むことは人の親たるものにとつて最も肝腎のことである。そしてそこから一生に亘つて施して悖らざる教育法が出發しなければならぬ。

一生涯に亘つてそれに準據してやつて行ける教育法——そうしたものがあるか、と反問する人

があつた。私は書下に答た。それはあるどころぢやない、一生涯に亘つてそれに準據されないやうなものならそれは教育法ぢやないと斷言する。自ら志を起し、自ら樂しみを發見し、自ら一步歩築き上げること以外に、何處に成長も發達もあり得やうか。然り教育は幼小の時から徹頭徹尾自學自習に仕向けて行くべきである。それは決して普通兒許りでない、低能兒でさへも、彼自身の衷に潜む力を引き出す外に教育のやりやうがないのではないか。

自學自習の教育に取つて讀書と觀察とは二つの大いなる窓である。それは人間の二つの目の如くいづれ劣らずハツキリと輝いてゐなければならぬ。而して幼兒に取つてもこの二つは彼の進み行く軌道を成すものである。書物の選擇は殊に大事である。曲の生えた子供に粥の必要なき如く、特別にいはゆる兒童向きに捏ち上げ、稀釋し、煮くたれたものは却てわるい。最善のもの、それ自身完美したもの、纏まつた力作、それをよしんば分らない乍らも與えて置いて差支ない。文字は一字一句解釋し得なくとも意味を取れさへしたらいい。そして又よく子供は意味を取るに敏感なものだ。吾々は子供に説明や解剖に依つて分らせやうと肝膽を砕くよりも、いゝものを供給し、いゝものに親炙さしておくだけでいい。最初に接したいいゝものゝ感化は、それ丈で一の試

金石となる。子供にだつて選擇の本能がなくてどうしやう。そして子供がいゝものゝ感化によつて、悪い安ッばいものを排斥し得たら、それ丈で正しい軌道に乗つたものと言つていい！

こうした用意を念頭に置いて、扱世上の幼児に與へるものを見廻はす時に、吾々はそこに寒心すべき現象をザラに見る。たとへばかの「繪草紙類」である。幼児に毒にも薬にもならない玩具のつもりで與へるあの繪草紙の濫用は、薬どころか大へんな毒にもなれるものがある。汗牛充棟も只ならざるあんな粗製濫造の商品が、子供の爲によからう筈はない。どうすればホカと違つた毒々しい色や、コマチャクレタ文句で買人の目をひくかを専門に考へてゐるものに、教育上の效果などを求むるのは、求むる方の無理である、何でもいゝ、一時子供の歡心を買へさいすればいゝ、子供がそれに紛れてうるさくなければいゝと思つて與へる。呆れたものだ。子供に對して與へるものはどの道その心身の教育に影響しないわけではないのだに。子供に取つて遊ぶことは、即ち學ぶことである。學ぶことは又遊ぶことでなければならぬ。それなのに遊ぶことは何んでも構はぬといふやり方は、學ぶと丈けを取りはなして、妙に嚴格に窮屈に考へる事と共に、兩つ乍ら響つてゐる。「學ぶことが遊びであり楽しみである」様な教育の仕方をこそ工夫すべきである。それ

が苟くも教育にたづさわつてゐるものゝ不斷の研究でなければならぬ。そこに教育家としての腕が現れなければならぬ。窮屈な息苦しい所には、ものゝ成長——箇性の伸長が望まれない。かの學校に於て各人がほんとうに其箇性を發見し得ず苦しむのは、全く自由なきに依るのだ。劃一教育の強制訓練の中にどうして箇性の現れが可能であらうか。餘りにうるさく教師の干渉の行はれる所に於ては、子供が猿マネが上手になるかも知れんが、それ自身持つて生まれた稟性を自由に伸ばすことができない。一本の若木がその根を地中に、その枝葉を四方八方空中に伸ばして養分を吸収しやうとするのが、成長するものゝ態である。そして自由を束縛することは、テキ面に成長を抑止することになる。抑止されるが故に箇性がスナホに現れない。そして「箇性を發見し得ないのが自身として最大の損失であり、教育としては最大の失敗である。

せいゝ五十年にしか充たぬ人間の常命に於て平均二十五年を學校生活に費すことは餘りにも浪費すぎる。もし人が早くその箇性を發見して、それに即した職業技能を早く授けたならば、いかに經濟的な有効な行き方であらう。そういふと人間をあまりに早く専門化するとか何んとかいふて、教育理論家や、有閑職者などから非議されるかも知れんが箇性に立脚した専門化ならばい

くら早くたつて早過ぎるといふことはない。人間はどうせ何等かの職業に依つて飯を食ふ外ない。無職といふショウウバイは戸籍面の上から絶滅せられねばならぬ。そして大多数の無産階級に取つては、一日も早く飯食ひ道にありつくことは焦眉の急なのだ。何にをマゴマゴして餘計な道草なんか食つてゐるヒマがあらう。

然るに劃一教育なるものは、却て箇性の發見を妨げるやうにと努めてゐるかの觀がある。小學時代はおろか中學時代になつてもまだ箇性が發見されない。中學を卒業する頃になつて、最早いやでもおうでも何かしら専門をきめなければならぬ場合に立ち至つても、とう／＼箇性を發見し得ずして、只世間の需用とか収入の確實とかいふ第二義、第三義の條件に依つて専門がきめられるといふ有様だ。こんな風でほんとうに獨創的な仕事が産まれて來やう筈がない。それは到底備兵——被傭人の外に養成さるゝものぢやなからう。

第三

勤くとも、此のことを言はないで、私の教育論は止めにされない。人間の一生の中で尤もフレ

ウシユ（清新）な尤もフレキシブル（可撓）な、尤も感激し易い、尤も感染し易い——青年期の初夏——中等教育時代に言及することなくしては。否言及どころぢやない、總じて中等教育の根本的瓦解と立直しを言はないでは。この惜しんでも惜しんでも足りない時代に、浪費の上の浪費を敢てしてとても呆れた教育法を施してゐるさまを見ては。日本の教育の浪費と非能率は全くムダに等しき中等教育のある爲である。これが實に教育制度の癌腫をなしてゐるのである。

「抑も十二三歳から二十歳位までの時代」といふものは人間一代に取つて如何なる時代であるとすか。人間が生理的にも心理的にも劃時代的の革命をされる時代ではないか。人間の生理的機能は、或時代にその平均的進度を破つて躍進する。そうした生理的の革命は所詮心理的の革命を伴はずにゐない。此の内外両面の全部的革命は實に謂ふ所の中等教育時代に生ずるのである。而もかゝる人間の一生を左右する程の轉機を孕む大事な大事な時代に、果して如何なる教育が爲されつゝあるとなすか？

私の言振りを過激であるとす前に、先づ勤くとも中等教育を受けたる経験を有するものは、
ての経験の上に三省して欲しい。抑も中等教育なるものは土臺、教育などと言へる代物であるか

否かを。第一それ丈で役に立てる何等の才能を授くるに非ず、それ丈で實社會に出られる何等の心の準備を與ふることなく、「只單により以上の學校に送り込む橋渡しに過ぎざる中等教育」といふもの。それ丈のことに人間の一生の尤も潑刺たる四年乃至五年もの年月を費さねばならぬとは何んといたましいことではないか。いかなる學校と雖もそれ自身人間の完成の爲に全力を盡すべきもので、決して單なる橋渡し、準備など、思はしむべきものではないのに、一年や二年ならまだしも四年五年といふ長年月を人間そのものゝ完成に傾注しないで、單により以上の學校といふモノに隷屬させて置くといふことは何と考へても不合理極る浪費である。準備といふならばどこ迄行つても準備で、大學に入つたつて準備に過ぎないのだが、それとこれとはワケが違ふ。大學に入らなければテンデ役に立たないやうな教育を、恰も義務教育の延長でもあるが如く國民の間に普及さして置くその氣が知れないのである。

もし教育をギリツと二つに分けて、義務教育、大學教育となすならば、そして義務教育を兎も角も國民の常識教育として、下らぬ階段や試験などを撤廢して徹底的に充實せしむるならば、義務教育を了へたものは直ちに大學教育を受けさして差支なかるべきものだ。言ふ所の準備教育は

大學教育を受くることにきまつたもの、大學に入學してから教へたらいいぢやないか。大學に入るか否かは、その資質に依つて決さるべきものだが、そんなことはてんで問題とならず、一に經濟事情——資質ではない資力に依つて決せられる現代に於て、大學教育と義務教育とは各劃然たる独自の境域を有し、大學に入り得ないが故に無駄になるやうな努力を敢てせしむべきものではない。兩者は各々それ自身で渾然たる纏つた目的を有するものでなければならぬ。「義務教育から直ちに大學教育」への連絡は大體に於て西洋に於ては早くから行はれた學制であつて、その爲に彼等は日本人の中學生時代を大學に送つてゐるのである。もし理由のない梯子の桁式學制がなかりせば、日本人の頭を以てして十三四歳から二十歳前後迄を西洋人の如く大學教育を受けさせられぬわけではない。論より證據、明治以前迄の日本の教育の仕方は悉くそれではなかつたか？昔の學塾に於ては今のやうに準備教育と初めより銘打つたやうなものにべら棒な程長い年月を費しはしなかつた。

それは勿論そうあるべき筈だ。「役に立てる」といふことを專一に教育に求め、そして好きなものはいつ迄でも留つて居ればいゝし、もう澤山と思ふものは自由にいつでも出られるやうな家塾

であつたら。所が今はそうではない、好きだからつて長く留まるわけに行かず、嫌ひになつても卒業證書はいくら長くかゝつても手に入れねばならず。いくら面白くなくとも、氣に合はなくとも、無理やりに長い年月をノラリクラリ學窓に、否下宿の二階に暮らさねばならぬ。こんな熱のない身の入らない學問の仕方つてあるもんだらうか？

中等教育は教育を受くべきものゝ年齢、時代から見えて決して試験勉強の犠牲になんかすべきものでないに拘らず、「中等教員なるものゝ資格」に関する文部省の見解は餘りにも輕卒でそして杜撰極まる。即ち初めより教育家たらんとしたのでも何んでもない人間、従つて機會さへあれば商賈變へせんと欲し、若しくは失業したらそれでゝも飯が食へるといふので、取つて置く資格、それがどうして教育者といふ資格になり得るのか？ 或學術を一ト通りやつたといふに過ぎない各種専門學校の卒業生、大學の半途退學者、失業した會社員に迄、雜作無く中等教員の免狀を與へて置くのはどうしたものだ。これだから私が前文に口を極めて罵つた如く今の學校教育は教育に非して教授といふ小手先きの藝當のみで立つてゐることに偽りはないのである。事もあらうに人間が罷り間違つて本業から失脚した時に、しやうことなしに飯が食へる道を教師といふシヨウバ

イに求めしむるといふ文部省の大雅量は、教育さるゝものから見て飛んでもない難有迷惑ではないか。ほんとうに病氣上りの恢復期——コンツアレツセンスにも比すべき慎重にして行き届いた看護を必要とするアドレツセンス——青春期の教育に従事するものが、單に月給が食へる程貰へるのでたづさはつてゐるものに任かして置くとは、何といふ大きな手ぬかりであらう。このことは文部省の中等教育に対する見解の不徹底を、否寧ろ大へんな誤謬を端的に物語つてゐるものではないか？

それは一つの學術の初步さへ教授し得れば、誰でも中等教員がつとまることを天下に宣告するものではないか。あゝサイエンスの手ほどき、零碎なる智識の受賣りが中等教育といふものゝ全部である觀を呈してゐることは、何んといふ怖ろしい放漫と懈怠であらう。

小學教師はまだ教育家らしい所があり得る。彼等は學術教授以外に（甚だ稀だが教授以上に）教育といふことを考へもする。けれ共中等教員に至つては單なる月給取り、「學校といふ官衙の役人」である外の何物でもない。教育學などは資格檢定試験の外に一ページさへ見るべき義務も必要も持たない。十年据置いてもいゝ位の教科書の解説さへ出來れば能事了れり矣である。

そして、中等学校の教科書といふもの、よろづの教科書といふものあるに甲斐なき中にも、中等学校の教科書位ヤクザな成つてゐない代物は又とあるもんだらうか。新しいとか舊いとか、詳はしいとか略だとかいふことは別問題にしても、兎に角あういふものを讀ましてゐたんでは肝腎の學科に對する興味を殺いで了ふのが、誠に見遁すべからざる大缺點である。さてこそ中等學校に於ては誰でも學校生活の興味を教室以外に求めて辛じて過してゐる。その當然の因果應報は、見たまへ、あの中學生や女學生やのガサ／＼した、小生意氣な外衛内虚な、粗濫な態度を、どこに小學生の間に些しは見える訓練も、どこに昔の元服頃の侍の子ほどのカルチュアも現へるか？

虚榮、競争、野心、疎懶、その日課なる教室生活は悉く乾燥にして無味、その平生の家庭生活は悉く不從順にして不生産、どうしてまアあんなにも收穫の乏しい時を五年の長い間のべつに續けられたもんだと、今更乍ら、自分自身の取返しつかない浪費に臍を噛んでも及ばない。

特に、女學校てふものが、日本の家庭に不適合な仕立方をやつてゐることは見免せない。女學校といふものが一體何を標準とし、何を目的としてゐるものかさつぱり分らない。女學校は女子

の中等教育だといふのは法規上の言葉で、實際の日本人の大多数の家庭に取つては女子としての最高教育機關となつて差支ない。最高といふ字が當らないならば、最重要といふ文字で置換へられてもいゝ。女學校は嫁入直前の學校であることは昔も今も變りがない。もう間もなく主婦たり母たるべき人の教育である。それは良妻賢母主義とちやんと明文にあるのでも分る。然るにその教科目はどんなものか。果して妻たり母たる上に必要なものであるや否や。生理學は教へられるかも知れぬが性理學が教へられない。月給取りの家政學は教へられやうが、生産者の家政學は教へられない。物理化學は教へられやうが家庭に於ける衛生並に應急手當などは教へられない。植物や動物は教へられるが、宅地の一隅から野菜を取り鶏卵を取ることなどはてんで教へられない。そして例に依つて英語などが丸で無目的に教へられてゐる。無効果、非能率も茲に至つて極まる。

よしんば名は中等教育であらうが、女學校は中學校と同様に試験準備の教育なんかであつてはならない。それは年齢が中學と同じくとも、女子の性能、體質、心理に於て中學生と等し並みに取扱はれない幾多の差違がある。さればその教科目も中學などに準據せず、どこまでも實際の必

要といふことにきびしく立脚しなければならぬ。先づ何よりも「教育家としての素養」を與ふべきものだと思ふ。それは女子の悉くが先天的に母たるべき使命を有してゐるからである。もしも教育家としての資格に於て教養が與へられるならば、主婦としては家庭をよくし、社會人としては社會教育に直接間接の貢獻をなすことが出来る。

然るに女學校の取扱方は中學校の取扱方と殆ど同じだ。その爲に女子の本來の面目が發揮されないで、附焼刃の屬性や、ヘンな文化生活の憧れや、滿されない智識欲の不平や、總じてぢみな家庭生活なんか嫌ひになるやうな傾向に許り押しやつてゐる。私は勿論女子の向上心を否定しはしない。がその向上心といふも多くの低級な學科から來る不満が本だ。

女學校の教科は概して中學よりも程度が低いやうだが、あれなども昔からの男尊女卑が崇つてゐるので、ほんとうは中學よりも以上に程度を高めていゝのだ。勿論六ヶしい本がよめるからつて學問くさいわけではないが、母としての資格を作る教育なら、もつともつと實質あるそして又廣汎な範圍に亘つたものでなければならぬ。何も上の學校への試験準備なんか問題とする必要がなかつたらまだいゝ實のある教育が出来る筈だ。夢見たやうな學校生活ばかりではない、小説な

んかから受ける實際生活の想像などぢやない、もつと實生活に當つて狼狽せず、自らをアグプト順應して行ける創造性のある教育がやらなければならないのだ。そして凡てが家庭的といふ雰圍氣——農村の小學校が田舎化されなければならぬ如く、女學校の教育は家庭化したものでなければならぬ。社會の單位は家庭だ。近頃新しい女が社會事業にたづさはるを以て光榮としてゐるやうだが、社會事業なんか膏藥貼り位のきゝ目しかないものだ。あれで第一ホームが救はれるものではない。學校なんか脚下にも寄れないほどホームは子供のそして大人の教育所であるをと思へ。「中等學校はいろんな科學の初歩を教へる所だ」と一般に思はれてゐるが、あれ位の初歩は當然小學校の高等科に於て教へらるべきものだ。否高等科ではおそい小學五六年あたりから、もう一かどのサイエンスに取つかしていゝのだ。それが少くとも中學あたりでやつてゐる低級な程度では。國語讀本の中にいろ／＼なものを織り込んで五年も六年もやつてゐるよりは、國語は物語類でどし／＼進ませ、サイエンスに關することは纏つた一つのサイエンスとして初めから取扱ふに如かずだ。それはサイエンスをやる上に必要な用意でもある。決して中學あたりでやつてゐるやうなあうした零碎の智識の説明なんかで初むべきものぢやない。第一に宇宙の謎を解くといふが如き

驚異的の感興を湧起させることが必要なものである。元來理科でも地理でも取扱ひやうに依つて充分子供の興味をひける筈なのに、態々中學まで待つてそしてあんな乾燥無味なる教科書で與へんとする。中學の頃になるともはやあんな血肉のない教科書の筋書き丈では満足も出来なければ面白くも思はない時代なのである。もつと深入りした。血肉のついた、纏つたものを欲する時代なのである。もうそろ／＼自分の好きなものに没頭せんとする氣が萌し、又それを萌さしめるやうにこそ教育すべき時代なのである。

一體、今の中學卒業生で、卒業後の方針を定める場合にほんとうに自分の箇性を發見して定めれる者が果して幾人あるであらうか。勿論大部分のものはその父兄の生活上の功利的打算に依つて他動的に定められてゐるものゝ、それに對していくらかの抗議でも持込めるほどの、ほんとうに自分が一生たづさはつてもいゝと自ら許すほどの殉情的な感激を持ち得る何かしらの天分なり使命なりを感じ得る者果して幾人あるだらうかこのことは國民の中に天才を孕ます唯一の胎盤であるのだがそうした傾向を丸切りぶちこはしてゐるものは實に今日の學校教育、とり分け中等教育であるから情けなくなる。

人の子、一度中學校に入ると、もはや彼自身の下に烙印されたも同然である。それはより以上の學校に進まねばならぬ先天的約束、大學へ大學へといふ盲目的憧憬——そしてその爲の夢寐忘るべからざる、試験勉強の惡癖。もはや箇性伸長とか創造教育とか、小學校で少し目覺めかけて來た方針などは、ボリ／＼へし折られて、只夫れ平均點の強請めくら暗記の強請、競争々々マラソン競争、對校競争。斯して産れたるまゝに育たんとする箇性は無慚にふみにじられ、學藝への憧憬がショウツイニズムのチャンピオン崇拜と化し去つて了ふ。

こうして記憶力の尤も旺盛な、そして貪るやうに新しい智識にかぶりつける時代をジツクリと學藝に没頭せしむる代りに、可惜、虻蜂取らずの試験準備に費さしてゐる。これが實に日本の教育を非能率にしてゐる最大の原因に非ずして何んだ。記憶々々と記憶許り責め立てゝゐても、記憶力の尤も旺盛な此の時代に、つまらぬ學層、ゴミクク見たいな零碎の智識をゴチャ／＼に記憶させて置き乍ら、考へ得る頭でほんとうに働き出さなければならぬ大學時代になつても尙且機械的記憶を試験の故に強ゆるのはどうしたものだ。考へ得る頭の養成、科學的精神の洗禮を受けることが、キツだらけのレコードを蓄音器的に再現する練習よりは遙かにました。記憶で押し詰め

るよりも、頭を伸々と生々と成長させることが大事なのである。記憶力に非して頭の活動力——創造力が大事なのである。習つたものを連絡も統一も無しにガムシヤラに暗記するクセは百害あつて一益もない。そうした習慣は益々頭を融通の利かない乾干びたものにして丁ふ。

もし小學校を國民必須の義務てふ名に實を副はすべくもつと／＼充實し、教師の待遇を中等教員と同等若くはそれ以上に置き、國本の培養を此一點に集注する意氣込でやるならば、中等學校及び高等學校なる中間機關は、自然消滅の運命を免れぬものである。大學への豫備知識は大學へ任かせ、普通學の基本知識は飽く迄小學校に於て充實せしむるならば、何を苦しんで怠惰や不良の習慣を伴ふ道草を食ふに過ぎざる中等學校を外觀丈でも獨立的に存在せしめる必要があらう。

高等學校は大學の豫備教育などいふも、實際は語學の稽古の外に何があるか。而もいつ迄經つてもモノにならざる中學のやり方の引伸しのまゝで。

そして中學と雖も、實は小學校でやれるものを態々やらすに後へ延ばした迄のことに過ぎない。

だから今の時は成人教育だの、義務教育延長だのといふ徒らに年限を延長することなんか考へ

る時ぢやない。もつと内容の充實を計るべき場合なんである。頭から大學卒業の年齢を満廿歳に限定し、それからだん／＼下の方をミツシリ仕込むことを考ふべき時機なんである。

一體日本の教育家は生徒を見くびるクセがあつていけない。これは抑も小學校からしてやられてゐる悪いクセだ。子供にもそれ相應の消化力も洞察力も産れ乍らにして持つて來てるものだ。その證據には、父兄や教師が一々説明してやらんでも大概のことは目で知り心で悟つてゐるものだ。だから徒らに字句のセンサクなんか拘泥しないで、其道の權威ある書物をどし／＼讀まして置けば、格別手をかけなくともずん／＼成長して行けるものなんだ。それを是れ位のもは未だ早からうとか、理解が困難だらうとか、取越苦勞許りして、生徒の實力以下の低級なものを讀まして置くものだから、益々生徒の力が低下する許りなんだ。そしてその必然の結果として學校卒業生の非能率が暴露してゐるわけである。いくらか程度の高いと思ふ程のものでも讀まして置くのだん／＼向上せしむる刺激になるがあまりに凡てがイージーゴイーグ（安易）に出來てるものだから、自ら苦勞する氣が起らない。單に小器用に要領よくやつて試験さへパスすればいゝといふ風になる。學科の程度を低下させてゐ乍ら、徒らに年限許りづるづるに永く引張つたつて何

の効果が上るものか、

文部當局を初め、文政を審議する行政官連中は、何かといへば年限を延長することを主張するが、年限を延長することは、よきものを却てバカにし、バカをして益々バカならしむることではない。由來修學の方法から云つても短い間にミツシリやることは、長い間かゝつてグラ／＼やることよりも遙かに優るものだ。人間は必要に迫られたら五十になつてからでも勉強する氣になれるのに、なぜ學校に許り長い年月をくらすことのみが勉強だと思はせるやうなことをするのか。況んや教育費の爲に個人の經濟がギユウ／＼言はされて行つてゐる時代に、年限延長なんか考へてゐる人間の氣が知れない。中等教育時代に尤も多く不良生を輩出せしむるのは、全く「教科の内容の貧弱な爲」と「年限のぐうたらに長い爲」に基因すること大だ。即ち實務の技能なり、學問の習慣なりを、ミツシリと附けべき時期が中等教育時代であるの、に此の時代に何等役に立たない訓練、否軍事教練の如きものを除いては、何等の訓練といはるべきものさへも與へず、漫然と年月を過させて置くものだから、飛んでもない不良な傾向に赴き易いのである。一方に青春期の性の目覺めが用捨もなく押し寄せてくる。而るにそれに對する行き届いた心の上の用意が

與へられない。頭の上の理解が生れてゐない。それを克服すべき何等の偉大なる感化も與へられない。最高の音楽若くは詩歌を介して「魂への注射」が與へられない。一人々々の生徒に對する愛が小學教師の十が一も持てない先生に毎日一時間交替に接觸してゐるのみだ。こうした青春期に對する何等の周到な用意のないこと丈でも、現今の中等教育は呪はるべく充分の理由を持つが、更に能率から見ての看過し難き浪費が實例を擧げて一々並べ立て得るから堪らない。

先づ第一に槍玉に擧げなければならぬのは、中學校に於ける英語教授である。

請ひ問はん、中學校に於ける英語なるものは、抑も何の爲の準備ぞ？（高等學校の人學試験に必要なが故にといふ理由以外に——その外に理由なしと答へらるれば、我又何をか言はん）

中學校に於て最大の時間を取り、最大の膏を絞る學科は、曰く英語である。毎日尠くも一時間乃至二時間を教室に於て教はり、その上自宅に於て辭書と首引で豫習復習に費し、然り而して五ヶ年の長日月を此の一科に費し乍ら、イソツブ物語さへ碌によめず、外人に道を聞かれて開いた

口が塞り、塞つた口が開かざる態は、抑も何たることぞ！

もしこれ丈の時間とこれ丈の努力を日本人が日本語を以て學ぶ何かしらの學科に傾倒したら、果してどれ丈の進境が得られるであらう。何の故に尤も記憶のいゝ尤も心身の潑刺たる時代に、その結果から見て空の又空なる單なる語學勉強にあれ丈の長年月と頭の苦勞をさせなければならぬ必要があるのか。

更に、それ以外何もないと言つていゝ高等學校三年間ぶつ通しの語學勉強、それを通つて大學に行つてさへ、纏つた一冊の原書を読みこなせるもの果して幾人？ 最大級の月給を以て抱へてゐる外人教師の講義の分るもの果して幾人？ ほんとうに途方もない準備もあつたもんだ。こんな準備をやつて行つて抑も何時になつてから役立てる積りなんだらう。

これが最大の浪費に非ずして何んだ。日本の教育を憂ふるものよ、過去何十年もの間終始一貫能率の最小限の桁が、否能率から見て全然コンマ以下なる、日本の教育の「語學問題に對しては斷乎として劃時代的な一大革命を」やらなければならぬことに未だ氣がつかないか。中學生達が

下宿の二階や自宅の椽側で外人の耳には蛙の鳴く聲と同一に響く丸ツ切り成つてゐないアクセントや読み方で、大汗になつて復習してゐるのを聞くと、ほんとうに胸が痛くなるよ。

日本人は日。本。語。を。以。て。や。れ。る。文。の。最。大。能。率。を。學。校。に。於。て。學。ぶ。こ。と。を。心。掛。く。べ。き。だ。特に中學時代の如き尤も貴重な時代に於て然り。何を苦しんで讀書力もつかず、頭の思考力を練る上にも何等役に立たざる語學の勉強にあう迄努力させる必要があらうか。

もし夫れ、語學勉強の上に中學時代が一番適當だからといふやうな者があるなら、とても用捨はできぬ。時期の適不適を言ふならば、中學などは到底小學の足許へも寄れるものでない。最好の時期は實に尋常一年からである。(それ以前から初められたら尙いゝ)。中學では既に遅すぎるのだ。どうせ遅すぎるんだからそれはむしろ、大學卒業後迄待つて、いよ／＼原書研究の必要に差迫つてからでいゝのだ。必要の逼迫は成人をしてもどうにかこうにかもの にせしむるではないか。然し乍ら必要も感ぜず、さりとして無意識の口眞似も出來ざる中學時代に語學をやることは、丸ツ切り岩の上に種子を下うすも同然だ。

閑話休題、ではない、こゝに一寸閑話を挿むことを許して貰ふ。

語學教授の非能率的なことは洋語許りぢやない。同文同種と稱する漢文の上にもちやんと現はれてゐるから妙だ。昔から日本人は、漢文そのものゝ爲に非ずして、實に日本文の故に漢文を學んだ點がある。それかあらぬか「支那人がやりもしない訓點句讀送り假名」なるものを附けてサ分るものを分らなくして教へて來たものだ。なぜ支那人の讀むやうに、白文ですら〜と讀めるやうに教へなかつたらう。上り下りや送り假名をつけることに依つてどれほどの勞力と、飛んでもない意味の取り違ひをやつたか知りやしないのだ。

こんなとてもペラボウなやり方で今も尙漢文なるものを中學、高等學校あたりでやつてるものだから、これ以て何年やつてもものにはならず、論語一冊さへ碌に讀めず、元、明、清に下つては殆ど分らず、現代支那の時文に至つては皆目讀めない誠にはや御念の入つた徒勞を敢てしてるのだ。現代支那を解する上に何の裨益もないやうな二千年前の漢文を讀まして抑も何になるのだ。

文部省よ、全國の中等學校に號令して漢文の上り下り讀み文は速かに廢止したらどんなものぢやい。オツトそうなると第一先生ちゆうものが拂底して、又々本場から招聘しなまやならなくな

るか。

いやそれは心配したまうな。北京あたりで、苦力と同じ位ゐて、同じ位なくらしをしてる儒生インテリ處士シヤンを仕入れてくれば、高等師範出や大學出よりも餘ッ程安くつかう。そして何といつても明治以前の儒者といふ儒者が何千何百年の間餘蘊なき迄つつき散らした經書、八大家文などよりも、もう少しカビの生えない、それこそ昨今西洋で大ばやりの東洋思想の目新しいものを掘り出して外人に叩頭禮拜させる程の文化發祥が鬱然として日本に起つてくるかも知れぬ。東洋のルネッサンスとか何とか言つてね。

さるにても中等學校で國語の文法をやり乍ら「漢文の文法をやらないわけが分らない。語法、助字、熟語、押韻などを一ト通りやつたら、訓點句讀送り假名の必要がなくなるかも知れぬ、國文法を習つたことに依つて文章がうまくなつたためしも聞かぬが、尠くとも白文を讀む上に漢文典を習ふことは徒爾ではないと思ふ。

外國語には初めから文法をやり、漢文は文法といふものをやらずに、訓點句讀でよませる。吾

々には何とも合點の行かぬやり方許りではあるわい。

漢文を訓點句讀送り假名で讀むとてもペラ棒至極な惡習慣が、更に外國語にもり移つて、西洋人のやらないことを態々やつて苦しんでゐる。

中學あたりでやつてゐる英語の教へ方は、漢文の上り下り式教へ方と同一轍に陥つてゐる。白文讀みでない、日本語讀だ。歐文讀みでない。日本文讀みだ。

こうした變哲な習慣を語學の勉強の間に養つてゐるので、その翻譯は一律一篇に日本文にも非ず、歐文にも非ず、自分も分らず、他人にも分らざる鴟的文章となつて、原著者を賊し、人の子を毒しつゝある外ないのである。

日本のこれ迄の翻譯書は極く少數を除いて、十束一からげにして石油を注ぎ悉く焼き拂はるべき代物なり。翻譯は原著者の名前で賣らしむべきものに非ず。翻譯には原著者の名前を扉にかくし、實に翻譯者の名前に依つて人が買ふ迄に至らしめざるべからず。翻譯は辭書と小手先の仕事に非ず。腦漿と丹田の仕事也。

從來の翻譯は、一時流行せし漢籍の和文書きと何の異るところなし。漢文を和文に書き流したりとてそれ丈で意味通すべきやうなし。辭書に依つて文字を勝手次第に書き聯ねて、これが翻譯で候と曰ふはウソツキとゴマカシの外あるべからず。

さてこそ、日本の智識階級は、名前文は人名辭書も及ばぬ位に喋々するが、原著者の賜まで立ち入つてしらべ上げるものは極めて稀なり。

學校の語學できた腕と、それによりをかけた翻譯ではね。

翻譯は現はれた形にすぎないがその外に生かじりの原書讀みで出來た翻譯頭の方がどんなに多いか知れぬ。この方がよつぽど罪が多い。

斯くて語學教授に最大の時間と勞力をとり乍ら、物に成らざることが、遂に大きく廣く日本文化の發達にも響いてきてることが看免がせない。これは實に由々しき問題である。文部省よ、學制改革だの義務教育延長だの成人教育だのと形の上のことに許り狂奔することを止めて、こうした根本的な文化そのものゝ構成に迄目を留めたらどうだ。

よき翻譯は創作よりも六ヶしい。今迄の日本の無良心な翻譯を焼きすてる唯一の道は推敲に推

敵を重ね洗練に洗練を重ねたほんとうの翻譯を出現させるに若くはない。よき翻譯家がこれから國寶のやうに尊ばれる時期が必ず來やう。何となれば日本でやる語學教育はどうせいつ迄經つたつて物に成れるきづかいはない。そうすれば何と云つても翻譯に俟つ外に道はない。そしてよき翻譯を提供し得る程の人なら頭も充分出來てるに違ひない。そうした頭の人の翻譯なら、なまじつかの語學力でよんだり、生かじりの批評でなんかよむよりは、そうしたシツカリした翻譯で讀む方が遙かに讀み易く分り易い。どうしてもよき翻譯者、それは一生を注いでかゝつてくれるやうな翻譯者、山川氏のダンテに於ける、椎名氏のファブルに於ける坪内氏のシェイクスピアに於けるが如き、あういふ人達はほんとうに國寶だ。國氏の思想にほんとうのいゝ糧を持つて來てくれる人達だ。

語學をやるなら徹底的に、即ち尋常一年から。やらないなら徹底的に、即ち大學卒業後まで。

私は悪口許り言ふ積りはない。私にも腹案がある。前にも言ふ如く語學をやるなら中學一年生では既に遅すぎる。どうせやるなら尋常一年から、否その前から、即ち子供が母の言葉を無意識に眞似る時代から初めるのが一番いゝ。あの時代に於ては子供の耳には日本語も支那語もドイツ語も英語も同じに響く、そして同じに眞似られる。言葉といふものは元來眞似でしかない。理窟が入つたらもう駄目。然るに中學あたりでは初めから文法といふ理窟の入つたものでやる。言葉は決して理窟で覚えられるものではない。理窟は却て素直な進み方をぶちこわす。

それから最初の手ほどきは、必ずや外人に依つてやるべきもの。(これは中學校のある程の都市ならば大抵ひまな宣教師があるものだから必しも高い給料で態々本國から招聘するがものでもない。)而らずんば、尠くとも西洋に行つたことのあるものをして手ほどきさせべきものだ。語學に於ては最初の手ほどきが尤も大事で、意味なんか分つても分らなくともいゝから、兎に角純粹の言葉に親炙させるといふことが一番大事。

「語學をやるには目よりも耳が大事だ。耳を慣らしたらもうしめたものだ。語學は耳から入れべきもので、決して目から入れべきものではない。最初の手ほどきを外人にやらす必要も、實は耳

が大事だからで、そして日本人の教師ではとてもほんとうの發音が出ないからだ。

それから日本人の手で編んだリーダー(讀本)は全廢すべきこと。あれ丈は何ぼ考へても害こそあれ益がない。日本人の編んだリーダーを日本人の編んだ文法と一緒にやつて行くことは、足の達者な者に態々重いオモリを付けてドタバタ歩かせるやうなものだ。和製リーダーは恰も和製文法をやる料に編まれたとしか思はれぬ。

中學でやるなら、先づイソツプ物語あたりから初めて、まつしぐらに、ロビンソンクルソーにでも入つた方がよい。語學文は一年でこれ丈二年でこれ丈といふて進めるもんぢやない。興味とやり方の如何、油の乗り方如何に依つてどん／＼進める。そして讀むものに興味を持つと否とは進む上に大關係がある。文法を教へる材料として編んだやうな讀本に何の興味が湧こう？ スウイントンの萬國史や、クリスマスカロルや、スマイルスの立志篇などで初めた昔の流義の方がどんなに能率的であつたか知れぬ。

語學は、それを通して思想なり事實なりを攝取する爲で、文字そのものゝ穿鑿には用はない。勿論語學教師たらんが爲ではない。然るに西洋の小學讀本を日本の中學生に讀まして置くのはど

ういふものか。中學生には中學生の常識があり、それ相應の心的發達の程度といふものがある。故にそれに相應した實質あり内容ある讀み物を讀ませなかつたら、肝腎の興味が湧こう筈がないぢやないか。もうとつくに文藝趣味も附いてる頃に、ザツトのイットの大の猫のといふ小學一年がとこの讀み物をつつつかして置くのは可愛相なことだ。

先を讀みたい／＼と抑へられない興味で出つばつて行かれるやうな讀み物だつたら、辭書を引くこともオツクウぢやなし、又一字一字引かなくともよめるやうなよき習慣さへも附こうといふものだ。私自身の經驗から言つても、神田のリーダーから内證でユーゴーのミゼラブルに入つた時の驚異と執着は今も忘れられぬ。

語學の練習には第一にヴォケアバラリー(語彙)を出来る丈豊富にそしてそれを使ひこなせるやう實用的に覚えさせるに限る。日常尤も目に觸れ易い口にしゃべり易い單語を知つて置かなければ、どうにも進んで行きやうがない。

さりとて辭書は只暗記されるものぢやない。否たとへ只でも暗記されるやうな機械的に記憶のいゝ者にとつてもむやみに暗記することは、却つて自然の發達を害する。

それよりも、よい本、好きな本を、何遍讀んでも飽きないやうな本を、好めから終へまで徹底的に讀みこなす方が語學の進歩の上には非常に効界がある。文法のせんさくなんかどうでもいゝ讀み去り讀み來る中に自づから意味が取れさいしたらもうそれで足れり矣だ。

「本が讀めること、これが日本で語學をやるものに取つて第一番に期待されなければならぬ目標である。會話だの和文英譯だのフォネチツクのエロキュシヨンのといふことが、ロクスツボ語彙も知らないものに出來ることぢやない、必要さへもないことだ。横濱あたりの車夫は帝國大學の卒業生よりも會話が分るよ。日本人の教師と日本人の生徒とで外國語の會話をやるなどは、悪いクセがつくこと以外に何の取得がない。

更に和文英譯とか英文和譯とか凡て翻譯クサイことを初歩の中からやらすのが非常にいけない第一文章を一字一句譯さなければ承知出來ない悪いクセ、逐字譯はそれ丈で語學の進歩を阻害する病根である。西洋人と會話の時に、頭の中で文章を構成してからでないといふ口に出せないあの悪いクセは何から來るかを思つて見よ。又一つの文章の中に只の一字でも知らない字があつたが最後ギクツとつかへて、全體の意味が皆目つかめないあの悪いクセが何から來るか考へて見よ。

譯などいふことは、先づウンと本をよんで、すらく意味が分るやうになつた上でやるべきものだ。

「逐字譯」なんかは原文にも原著者にもちつとも忠實な所ぢやない。逐字譯なんか讀むと、日本人であり乍ら却つて日本文で書いたものが分らないやうなとてつもない憂き目を見る。(そのよき例は此頃出たスベングラの西洋の没落だ)これらは悉く不徹底なそして抑も初歩からやり方を謬つてゐる學校語學の因果應報だ。

翻譯は意味を正確に再現すること以外の何物でもない。一度意味がつかめたら、あとは自分の好きな文字を使つて、自分の好きな文章で、どんなにも思ふまゝに現はしたらいい。文字を生かすよりも、意味を生かすことの方がより大事なんだ。文字の譯は決して辭書に列擧された文が全部でもなからうし、勿論模範でもあり得ない。それなのに辭書を片手に翻譯など企てるものゝいかに多き。翻譯がかけ出し智識階級の一種の不熟勞動の觀あるは慨かほしき極みにこそ!

學校英語のどこ迄行つてもモノにならざる因果の連鎖は、いくら辿つても切りも限りもないからもう大抵で止そうと思ふが、もう一つどうしてもいはないで置けないことは、全國の中等卒業

生が學つて讀む、否、讀むどころぢやないしがみつくと云つていゝ位の、あの難句集といふものだ。なる程人學試験のゴツを覚える一種の技術の爲には誠に持つて來いの代物だらう。けれ共あゝしたものを大汗になつて讀まして置き、記憶に鑲り付けて置くことが、眞正の語學發達の上にとどれ程の悪影響を與へるものであるかは、あゝしたものと編者がもし一かどの英學者であるならば彼自身の良心に聞いて見れば一番よく分るだらう。

おまけに高等學校に入つてからが、日本人の編んだ拔萃文の教科書を使つてるのだから。とても何處迄行つたら目が覺めるのか、言ふ丈野暮な氣がするからも止める。

中學に於ては英語一つ例證に取つても、以上述べたやうな間違つたやり方に依るとてつもない浪費を致してゐるのだが、その他の學科目に就いても、一々當つて見ると土臺成つてゐないこと許り多い。英語の次に尤も多くの時間と腦力を使はしてゐるものは數學だが、中學に於ける數學のやり方といふものは、悉く生徒に嫌がらせる爲に拵へたのぢやないかと思はるゝ程極端に下手な教科書に依つてやられてゐる。幾何とか代數とかいふものは小學校でやつた算術の考へ方とはト

ント違つたものなんだから、先づ第一に考へた最初の考へ方について（心理的に）親切な周到な取扱方が必要であるに拘らず、いきなり、假定の定理を強請的に只記憶せしむる筆法である。こんなやり方が數學を嫌ひならしむる抑ものキツカケをなすものだ。なぜそこに何か歴史的事實を引張つてくるとか、日常生活に當てた應用的事例を持ち出して最初に生徒の興味をひくことが考へられないのか。東洋に於ても西洋に於ても、古代から智識の淵源は、天文曆數を考へるといふが如き、何かしら數學に關したことであつた。ピタゴラスの原理をやる際に、何かしらピタゴラスの傳記について物語るなどもよい思付でなければならぬ。近頃は空間觀念とか、函數思想とか云つて、小學校でさへ面白く幾何學の領域へ入つて行つてるのに、中學校に於ては十年一日の如く、公理、定理の繰り返しと、問題解答の一點張りで終始してゐる。吾々の中學時代にも三角は頭を三角にするといふ嘆聲を發したものが、あれなども最初先づ測量器械でも覗かして、何かしら生徒の氣持に驚異的の感じを起してから初める方がいゝのだ。こういふものには「何の爲に學ぶかといふ目的の如實な理解」が必要だ。（抽象的な學科には總じて目的が最初に來なければならぬ）代數などは記號の取扱ひに過ぎぬのに、算術的の數觀念のまゝで不用意に入らして丁ふ

から、初めの取つきから妙な錯覺に陥らしめ無用な難義苦勞を生徒に嘗めさせてゐる。かやうなことを考へ合はして行くと、中等學校に於ては、それ自身科學の初歩の教授に過ぎぬクセに、教授法そのものゝ研究が少しも行はれて居らぬ。その點は小學教師よりも比較にならぬ程劣る。大體そうした教授方法の研究などをしやうといふ親切味さへない。(昔から數學が嫌はれるのは數學の先生が嫌ひなことから来る。沒趣味な、枯淡な、無口な、シカメツラの先生が多いもんだからね。)

こうして中等學校に於て、學藝に深入りすることの出来る資質と心理傾向のあるもので、充分數學が出来る可能性あるもの迄「妙にこちらして數學が嫌ひならしめられてゐる場合」が極めて多い。このことを思ふとほんとうに涙が出る程惜しい。試験の點數の故にクソ勉強の結果成績のいゝものが、その頭の本然の資質の如何などには頓着なく、頭がいゝと即斷されてゐる。野心家とか精力家とかいふものが表面にのさばり出て、そんな虚榮に無頓着な個性の強いものが、教師には憎まれ生徒間には輕蔑される。そうして了へには、自分自身までがほんとうに自分がヤクザなのかと思ふやうになる。かゝる傾向からして中等學校に於ては人間を生かすよりも殺すことの

方が多い位だ。殺さない迄も自殺を強いてゐる。彼を思ひ是を思へば小學校はまだ我慢される。中等學校に至つてはとて人の子を托される所ぢやない。

學校に於て數學が嫌ひだからと云つて必ずしも理論家になれないわけではない。數學の故に學校は再々落第し、とう／＼途中でやめたのはニュートンぢやなかつたか知ら。學校で數學が好きになれぬからつて必ずしも一生涯數學が嫌ひなものぢやない例は幾らもある。カーライルは數學專攻者として大學を了つた。彼は數學の教師たらんとしてゲーテに推薦狀を頼んだ程だ。けれ共誰も彼を數學者だと思ふものがない。彼は口を極めて當時盛んだつたペンザム一流の功利哲學を損得勘定の哲學として事毎にケナシつたではないか。ミルは大經濟學者であるに拘らず「思考力養成の手段としては數學をむしろ論理學よりも遙かに以下」に見てゐる。思考力養成の爲に數學が必要だと思つてゐる者に取つて空谷蟄音の感あるであらう。論理學は高等學校へ行つてから課してゐるやうだが、あゝしたものは中等學校に於てこそやらなければならぬものだ。

一體凡ての學問は決して同一の研究方法でやらるべきものぢやない。同じ數學の中に包括さるべきものにしてからが、算術と代數と幾何とはその方法は甚しく違ふ。そのことをよく呑み込め

ない爲に我々は初め大に戸迷ひし、頭を苦しめる。又物理と化學とは理化學なども同じやうにがつくるめて言はれてゐるが、その研究方法は決して同一ではない。一方は演繹的であり、一方は歸納的である丈でも大へんな違ひだ。これらのことは最初の學問への取つつきに際して一ト通り納得さして置くべきものだ。

更に中等教育時代の青春期に、「生理學と共に心理學」をやらないわけが分らない。生理學をやる位なら當然心理學をもやれるし又やらなければならぬのは自明の理ではないか。取りわけ感受性の強い、動搖し易い青春期に心理學の智識を持つことは、各自の性格を築き上げる上にも、個性の發見の上にも極めて役に立たう。それは外國地理だの、西洋歴史だのの暗記を強ひることもよりも遙かに重要なことだ。

外國の地理や歴史などは課外讀本として勝手に讀まして置いて差支ない。試験の脅威で強請しなくとも、教科書のやうな下らぬ本でなかつたら、何んで中學あたりの生徒が歴史や地理に興味を持たないわけがあらう。教科書の地理なんかやらなくとも、地文、人文の智識の方が遙かに必要でもあり興味も持てる筈だ。そして地文、人文は西洋の山や川の名前なんか知らなくとも、自

分達の居る周圍で充分研究が出来るんぢやないか。そして「自分達の周圍をそうした新しい科學的智識の見方で觀察」することが屹度生徒の興味をひくこと請合だ。それなのにハナから面白くないことを、興味の乗らないやり方で強請してゐる。そのくせ肝腎のことは大抵お留守だ。

地理や歴史の教科書の書き方と來たらとても呆れて物が言へない。あんなシャレコウベ式の書き方であれば生徒の頭に入らないといふのか。フン、あんなシャレコウベのやうな書き方ではなかつたら、地理や歴史には先生の必要さへないかも知れぬのに。

小學校からして歴史の話といふものは一番生徒に面白がられるものだけに、中等學校に來るとそれが益々面白くなる代りにヘンな乾燥した學科に乾上つて了ふ。年代だの、系圖だの、權力の消長だのを棒讀みに讀んで、そして試験の爲に暗記することは、誰だつて面白くなれやう筈がない。一體そんなやり方は眞正の歴史教育といふものゝ目的にどう叶ふのか。

丁株の國民高等學校で歴史科に尤も重きを置いたグランドツイの用意が今の中學あたりの歴史教師に分るかどうか？ 歴史のやうなものまで、試験の脅威で勉強せしむるのは一つの耻ではないのか？ 歴史のやうなものは、讀むなと云はれても讀んで讀んで仕方がない位でなければなら

ありふれた治亂興亡の史跡は、課外讀物で勝手に讀まして置いた方が却つていゝ結果を得るかも知れぬ。そして中等學校あたりの歴史は、もう一步進めた文明史くさいものでなければならぬ。經濟史社會史を加味したものでなければならぬ。それらのことは決して程度が高いとか、無理だとか云つて差控へらるべきものではない。それは自然の要求でもあり、物の觀方、考へ方を練る上にも當然役に立つ徑路でもある。

歴史をやる上にも、私は、初め神代史からやることに大いなる疑を持つ。もつと手近い明治史なり幕末史あたりから入る方が面白くもあり、且つ科學的ではないか。凡て手近い入り易い親しみのあるもので科學的研究に慣らすのが必要だ。何かしら生徒自身の手で資料を蒐め生徒自身の心持でありくと架空でない想像を畫ける近接せる時代の歴史的研究が望ましい。事相の瞭らざる觀察は、あまりにかけ隔つた神代史などで養はれるものではあるまい。尤も祖先崇拜の爲とか何んとかいふことは又別の問題だが。

それは中學四年の頃であつた。學生訓の大町桂月から日蓮主義の高山樗牛に赴きつゝある頃で

あつた。時代管見の劈頭の論文、「人種競争としての極東問題」といふ大論文が空谷足音のやうに私の魂を揺がし初めた。樗牛のものを貪り讀まうとした私の手に世界文明史が入らないわけではない何といふ歴史の觀方！ 今迄の歴史の幼稚なさ、子供だまし、雜然たる叙述、もはや教科書の一ページさへ翻す氣になれなくなつた。歴史の時間はどうかして完全に居睡りしたいと無理に努めた。教室で居睡るクセのついたのはそれが初めかも知れない。

地理もその通り、「地理學者、見て來たやうな嘘を言ひ」など、皮肉つてゐる中は未だよかつたが、或日村の小學校で牧口常三郎の人生地理學といふ大冊を覗き見してから、もはや義理にも地理の時間に教室に出る氣がしなくなつた。幸ひにも地理の先生は義眼でおまけに吞氣屋だつたので出席の點呼にはいつも代返事して貰つて圖書館へ入浸つてゐた。

中學許りぢやないが一般に學校教育の通弊なる断片的な智識は、断片的な寄せ切れと共に、完きものゝ創造には應はない。事實を断片的に頭の中に容れて置くことは、それ丈の口眞似、もしくは筆眞似には役立たう。誰それがこう言つた、あう言つた、と言ふ位のこと物識り振ることには役立たう。しかしそれが何んでえらい？。そんな人間を何千何百人養成することよりも毎年

新しい百科辭書でも出す方がよつぽど安上りだ。教育とは百科辭書の製造とは違ふ。一つひとつの事實を頭の中に貯蔵することよりも、物を考へ得る頭、メンタル、アクティブイター——頭腦の活動力——を強めるといふことが一番大事なことである。一つの事實、一つの智識を嚙んで含めるやうに教へ込んだところがそれ丈で決して頭の思考力が旺んになるべきものぢやない。人から嚙んで含めらるゝことではなくして、自ら嚙むべき齒を丈夫にすることがより重要なのである。

然るに試験に許りかゝづらつてゐるものだから、教師も生徒も一向にそうした根本的の思考法を習慣づけやうとはしないで、只散漫な皮相なかい撫での教科書のみ勉強に満足してゐる。教科書の中の箇々の事實を暗記して居れば能事了れり矣である。(私がかやうなことを言ふと或は、中等學校と大學とを混同してやしないかと反問する者があるかも知れない。が決して混同してゐるのぢやない。大學は専門教育である。私の言ふのは専門ではない。常識としての教育である。常識としてゝも諸科學の取扱方は斯様にすべきものだ)と確信する。勿論、専門に赴く爲にもこれが自然の行き方で何等不都合のあるべきものぢやない。

教科書ちゆうものゝ智識探求の熱意には水をさし、好きになれるものをも嫌ひならしめる、口

クでもない作用許り發揮してゐる例證は何ば言つても切りも限りもないが、第一その書出しからして氣に食はない。

數學でも、科學でもその書き出しが、少しも實感的ではない。悉く抽象的だ。印象的ではなく素通り式だ。丸で法律書が官廳の訓令でも讀むやうなものだ、苟も新しい一つの科學に入る時は何かしら驚異的な感じを惹き起すやうな書方でなければならぬのに、初めから定義などを棒書きに書き下すものだから——そしてあの定義なるものゝ分ることも分らなく響くことよ——土臺興味も趣味も湧かう筈がない。興味の湧かないものに注意が集中されるわけはない。注意が集中されないことは當然記憶にも残つてゐやう筈がない。

アツテンション——「緊張した注意」——これほど大事なことは教育の上にはない。アツテンションの中にこそレテンション——保存力——が伏在するのだ。それは決してコラツ！などゝ巡査のやうな大聲を發することぢやない。そんなセンサーショナルな何等の手段を借らずとも自然法兩に學習そのもの間に湧起してくることではなければならぬ。鞭を揮り上ぐる教師を俟たずして、子供達の目が自然に輝き出すことではなければならぬ。それはクド／＼と説明を試みたり、何遍も

く繰り返すことに依つて記憶を強請したり、七面倒な問答法に依つて興味を索然たらしめたりすることぢやない。要は打ち込んで行ける文の興趣をそゝられることだ。何よりも好奇心を刺激しなければならぬ。好奇心こそ好學心の母胎だ。所が好奇心の刺激は、教師の取扱方に依つても、又は教科書の書き方に依つても大へんなちがひが生ずる。文學的の描寫、表現の仕方も大に考へなければならぬ。

私は茲で物理學に對して持つた私の經驗を物語りたい。嘗て私は物理學といふものは、物の現を究める學問だと思つて、それ故にこそ憧憬を感じたものだ。然るに初めから假定の臆説から出發して先づヘンに思はされた。假定に立つ凡ての學説は要するに假説ではないかといふ疑ひ。これがどうしても頭を去らなかつた。憧憬に水をさされた氣持だつた。先生は言ふ、「假説だつて事實を説明する上にシツクリ當て鉄まれば、それが眞説になれる」と。なんといふ取つて付けたやうな都合のいい話だらう。そんな御都合主義のものに千古不磨なるが故に尊い「眞理」があり得るものだらうか。

私の起した疑問は無理からぬものであつたと思ふ。無理でないどころか、そうした疑問を抱く

その心が實に眞理探求への正しい道筋であると思ふ。それが人の子の知識への芽生えを取扱ふすべを知らぬカイナデの中等教師に依つて枯らされた恨みはあきらめられぬほどではあるが、それと共に教科書なるものゝ書き方にも實に憤滿に堪へないものがある。原理プリンシプルよりも具象フオクトから着實に入らざりし不用意が。

はしなく私は中學にありし日に、「原理馬鹿」といふ一文を草して校友會誌に出したことを思ひ出す。それは自分の原理探求の僻と、之に對する學校教育の不滿とを批瀝して、同時に自らの焦燥的氣分を嘲つたものであつたが、當時校友會誌の係をしてゐた國語の教師は筆者に一言の注意もなく、勝手に所々を抹殺してまるで意味もなさないやうな支離滅裂のものとして會誌の末端を埋めてあるのを見て、實に忘るゝことの出来ない羞耻と憤滿の情を稚ない心に印せられたのを覚えてゐる。

色々な學問の初歩を五年もの間中學で習つてゐる間、私の面白いと思つた學科は一つもなかつた。三年頃から何となく鬱々として缺席勝ちなりし私は、ほんとうの話四年の時に退學しやうと

獨りできめてみました。もしあの前後に有美先生といふ評判の先生が来らざりせば、そして又吾々の受持教師たらざりせば私も永久に學校といふものを見切つて、純然たる百姓のアンコとして天下泰平に送つたであらう。先生の風變りな張扇教授と、いやになればいつでも缺席する變りものを大目に見てくれたのが、兎も角中學を卒業した所以であらう。けれ共卒業しなかつた方がどんなによかつたことかと今はた悔ゆる次第だ。

只一ツ、そうたつた一ツ私の興味をひいた學課があるにはあつたのだが——それは物理といふものであつた。物理、何だかその名前からして好奇心をひく。何もかも面白くなかりし私にも、こいつ丈はほんとうに興味を持つてやれるだらうとひそかに心に期してゐた。眞先に物質並にエネルギイの不滅など、從來の學科に比べて正に空谷響音の感があつた。教科書などはあまりに簡單で面白くないので殆毎日圖書館に入り浸つて、木村駿吉の「物理學現今の進歩」だの、飯島魁の「物理學講義」など借出して分らない乍ら喰ひ付いてゐた。(あれらの書き方も今から思へば何といふ晦澁な無趣味な書き方であつたらう。)體操などは勿論、有美先生の英語を除く大抵の午後の學課は、この爲に顧みられなかつた。丁度灯ともし頃當時圖書館のあつた公園から停車場に

下りて、田圃に沿ふた大堰端の道を何かに酔つたやうな氣持で、家路を辿りつゝありしことなどゆくりなく思出す。當時の私に取つて「物の原理」を究めるといふことが、一切の前に來らざるべからずと固く信じ、そしてそのことが何物にもまさつて尊嚴な事業に見えた。

けれ共當時私共に物理及化學を教へて居つた教師は、教員養成所を出た許りの生徒よりも若い位の男であつた。勿論含蓄も教授も成つてゐず、教科書を開けて只それを素讀的に講義するに過ぎなかつた。講義するのに始終天井や書物とにらめつくらをする有様だつた。漢學に凝つて落第の數を重ねた石川といふ老書生が教室で毎々「アンチャコ、何か言つてるのかい」と茶々を入れて満場を哄笑させたものだ。

何事も一徹になり易い青年の純一な心と、盲目的な程烈しい智識欲と、上ツツラをかきなでる教科書の素讀と、それすら分るやうに響かない教室のバカゲたる鈍き空氣と、其間にモク／＼となつてきた或ものが、「原理馬鹿」てふ一文を草せしめたのであつた。

扱英語が既にあの通りとして、扱て肝腎の國語教育はどうか。此事は何よりも國民として第一に

要求されてゐる所のものだ。ところが、中等學校に於ける國語讀本などは、どう考へてもその存在の理由が分らぬ。それは小學校の國語讀本と同一の手心で編纂されたものであるから、小學校でさへあうした斷片物の寄せ集めに反對する私は、既にあうしたものを六年も八年も繰り返してきて尙其上にちつと位難解な文字が入つてきたといふに過ぎざる寄せ集め讀本を更に四五年續けることに黙つて居られやう筈がない。文字を習ひ、文章を綴ることが國語教育の全部だと思つてゐる國語教師の頭が情けなくなる。

國語教育は文字の教育ぢやないんだぜ。國語教育は國史教育と共に、否それ以上に、日本人が日本民族の思想を講究すべき教育であるのである。文字の註釋なんか抑も末の末だ。何よりも先づ代表的の傑作に親しませることが心掛けられなければならぬ。現代の小説の中からチョコ／＼した所謂いゝ文章なんか小出しに抜いて來たものなんか讀まして置いてどうする積りだ？

何故に、眞先に日本文學史をやり、それから幕地に古典なり、代表作なり、纏つた一部の完成したものを読ませないのだ。日本人が日本人の書いたものを読むのに、外國人が日本語を習ふよりも以上の歳月を費さなければならぬ必要がどこにあるのだ。見たまへ、中等學校あたりの學生

の現代小説やチョコ／＼した隨筆ものなんか許り耽讀して、何等自國固有の古典なり傑作なりに親しめない大いなる缺陷を！こんな國語教育はどう考へても日本人として恥である。これも決して時間の足らないのではない、全くやり方のウソな爲めである。外國語と同じ筆法で自國語をやつてゐる無自覺の結果である。さてこそ、見よ、中學あたりでやる日本文法の何ぞ夫れ英文法と相似たるの甚しき！主語だの述語だの、目的格だの、テンスだのと、丸で西洋臭い名前で解剖していゝ氣になつてゐる。一切適切口語體化した今日、あんな文法をやることは抑も何の益ありや。もしあれで古典がよめ名文が書けるといふならそれでもよいが、土臺あんな外語文典の模倣見たいなもので日本文を解剖したところが何の役にも立たぬ。況んやそれに依らなければ文章が綴れないやうなもの外國人位のものだらう。中學あたりでは何よりも、文字の驅使——蠶が糸を吐出すやうにする／＼と自分の心の中のものが出せるといふことが第一に望まれなければならぬ。然るにあんなもので初めから文章を縛るのは決して文字の驅使を容易にする所以ではない。却つて窮窟にし不自由にする許りだ。一體文章を書いたり、讀んだりする場合に、主語だの述語だの目的格だのといふ名稱を覚えてゐたところが何の足しにならう。そんな名辭なんか知らんで

も間違なく文章が書けてゐる。そんなひまにもつと役に立ついゝことがいくらもありそうなものぢやないか！ どんな名文だつてあんな風に解剖されたら死屍をほじくるやうな業になつちまう許すべからざるは、國語教師なるものが、單に文字の教師であれば足る低級と卑下だ。國語教育なるものは本来コトバや文章などの問題ぢやない、充分思想の問題でなければならぬのぢやないか。日本人が日本固有の思想に親しむ一番直接的な道は國語教育ではないか。小學校で六年も國語教育をやつてゐ乍ら中學へ來てもまだ何一つ纏つた日本人自身の傑作に親しめない缺陷、親しませない等閑は、これ國語教育の名の上に大いなる耻辱ではないか。

ひとり國語教師に限らず、苟も教育家といはれる程のものは、何よりも思想の修養が第一義的に必要な條件だ。此のことに就いては伊太利現時の文部大臣ゲンチレはいしくも卓見を吐いてゐる。彼は全國の小學教師に宣言した。

「教育家は、何の修業よりも先づ彼自身の魂を鍛へ上げ、彼自身の思想を豊富にすることが第一に心掛けられなければならぬ。煩鎖なる教育技術書や出來合ひの教師用参考書や生徒用教科書などかなくなりすて、古今の大思想家にチカに接觸して彼自身の魂に洗禮を受け、彼自身の胸奥に

炬火を燃やすのでなければ、到底教へ子に對して何等のよき感化を與へ得ない。」

これは誠に教育の技術化に對する一大痛棒でなくて何であらう。苟も教育に従事する程のものは、その算術を受持つと理化を受持つとに論なく、その氣魄と教養に於て全人的の一大感激が伴はなかつたらどうして人の子を教育するなどの大それたことが出来るか。いかに小手先や口先がうまからうが、そんなことは教育家の誇りにはならない。もつと根抵的な全人格ぐるみの教養が尤も教育家に求められなければならぬ。

こうした教養は而し教員養成所たる師範學校などに於て與へらるゝかどうか？ 師範學校と雖も中等教育の一機關でしかない。その目的は中學校よりも少しく早く飯食ひ道を授けるといふことで、その内容は大して中學校と變つたものではない。飯食ひ道と云つてもそれは陶工が陶器を作るが如き箇人に附屬せる技能に依つてに非ずして、只小學教師たり得るといふ文部省の約束に依つてのみ然るのである。されば中學卒業者と雖も代用教員となり得、又師範學校の門を一年まぐることに依つて容易に師範卒業生と同等の資格をさへ持ち得ることを約束されてゐるのである。

されば中學校に於けるが如き階段的準備教育は當然師範學校に於ても行はれて居る。師範學校と雖も高等師範なるものを唯一の登龍門と心得てゐることに變りはない。それ故に大部分の高等師範に行かざるものが、早く既に自分等の地位にあきらめ、何ぞ獨り月給の多寡の故に非ず、より以上の學校に入らざりしその外形的向上心のあきらめが、既に、高等師範出の中等教員に頭の上らざる因をなしてゐるのである。

あゝ小學教師の使命と、資質、中等教員の使命と、資質、此の兩者の比較に於て、次の時代を考ふるもの、自の兒孫を考ふるものにつけて孰れか重要であり、孰れが尤も關心すべきであるかは言はずして明らかだと思ふが、何故に最善を要求すべき使命と資質のものが中善、次善の（教育に非ずして教授で事足る）準備教育にたづさはる中等教員よりも一段下だと思ひ思はせて置くのか。尠くとも有つて甲斐なき中學校文でもなかりせば、文部省は何を苦んで中等教員なるものを養成する必要があらう。（近頃では臨時教員養成所なるものが全國に十四ヶ所もあるそうだが高等學校程度の教育を二ヶ年位やつたものをどし／＼中學校に配つてゐる。）中學校の存在がこうした思ひがけないところに、殆ど教育界の基調に毒水を流してゐる消息は恐らく文部省の思及

ばぬことであつたらう。

一つの惡組織を維持する爲には千百のそれにあらずさはる人間を犠牲にしなければならぬ。中學校一つの存在が、年に何十萬といふ「不熟練労働者であり、同時に不熟練智識階級」であるところの卒業生を放出する外に、更に小學教師として最善を盡し得るものゝ中から向上心あるものを抜いて態々わけの分らない中等教育の僱教師たらしめ、その上大學閥の高等師範閥の私學閥と下らぬしのぎをけづらせてゐる。こゝに於てか筆者は小學教師に踏留まりし多くの人々を賢とし教育家として最善の境地の故に尊敬の念を禁じ得ない。

教育家に取つて尤も欲すべき境地は、尤も教育の可能な境地でなければならぬ。岩の上や、砂の上には種子は下らされない。皮の硬ばつた、骨の固まりかけた時代よりも、皮の軟かい、骨のしなやかな時代を擇むのが當然だ。だから信賴すべき教師をしつかりと把握することの出来ない爲に何かといへばストライキを起したが、教師の沽券をその出身學校の如何に依つて輕重するやうな生徒を相手に、毎日一時間毎に甲の教室から乙の教室へ、一年から三年へと、廊下を渡り歩いて教科書の素讀を授ける文が仕事なる人々にどうしてほんとうの教育が出来るものか。教科

書の解説の爲なら参考書といふものがある。けれ共だん／＼箇性の目覺めつゝある「ケアラクター」のクリスタライズ（結晶）しつゝある青春期の、一人々々の生徒の全人格に何等かのよき感化と指導とを與へ得る資格あるものが、中等教員の中に果して幾パーセントあるだらうか。このことが何よりも小學教師と中等教員との教育家としての態度や自覺の上に劃然たる區別をなさしむるものでなければならぬ。

中等教育時代の年輩の男女に對して、修身倫理を講義することに依つて、人格の陶冶などは望まらるべくもない。理屈はものを知る爲には役立たう、けれ共それは魂を揺がすことができない。魂に交渉のない説話はどんなにしたつて人のケアラクターに影響を與へ得ない。ケアラクターに影響のない倫理の講義は、魂の胃潰であり、青年のヤンチャな不徳を免疫する。されば見よ、中學生などの知ることは即ち得たり、行ふことに於て極めて無力なることを。倫理の講義なんかよりも偉大なる文學、偉大なる音楽などに親しませることがどんなにいゝことか。魂へドシンと來るものでない限り、もはや感激性を稀釋された現代の學生をほんとうに感化することができな

50

ケアラクターのクリスタライゼーション！ 人格の結晶！ このことはほんとうに青春期に於ていくら強調しても限りがない。才能とか智識とかに程度の差はあらうが、人間がそのケアラクターを築き上げる努力の上に高下のあらう筈がない。然るにこのケアラクターといふことを尤も強調すべき中等教育時代に、漫然とすごさせて置くものだから、いくら學校生活に年數を過ごさしても、人間そのものはてんで成つてゐない。不道德と破廉耻とが、最高學府からいくらか輩出されるんだ。人間としての價値の最高の現はれは、その才能とか智識とかではない、その人格——否その神格であらねばならぬ。スポーツでその骨格を逞うすることよりも、精神の淨化作用に依る「モーラル、バックボーン」——道義的骨格を強靱にすることではなければならぬ。而してそれを鍛へ上ぐべき最善の時代は、實に謂ふところの中等教育時代である。若い人達が、性に目覺める頃から簇り起る疑惑、誘惑、煩悶、動搖、人間がその動物進化の遺傳を縮圖的に強烈に閱みし嘗むる時代、一切の慾情が煮えくり返る一大坩堝の中でさん／＼に煮られ溶かされ、そしてその冷むると共に漸次にそれ相應の、各人独自のケアラクターの結晶を爲しつゝある時代！ あゝ此の時、此の時代に、中等學校は何を爲しつゝあるか？ 官廳會社の事務員と相去る遠からざる中

等教員に抑も何が爲せるか？

人が尤もアイデアリストツクになれる此の時代に、しつかりした精神的感化を與へることは他のいかなることを扱て措いても第一義的に必要なのだ。初めて人生を考へ、「我」なるものを考へものを一段深刻に考へ初める此の時代に、ほんとうに魂への糧を與へないとは何といふ手ぬかりか。宗教でもいゝ、藝術でもいゝ、何かしらドキンと魂を揺がすやうな偉大なものゝ感化を與へて置くことは、地理だの歴史だの理科だのゝ講義などゝ比べにならぬほど重要なことだ。あんな倫理教科書などはやらない方がよつぽりました。人間の道義的修養に理屈をつけるクセ丈でも大へんな害毒を流す。忠君愛國にも理屈をつけないでおけないのは倫理教科書の職分だ。哲學ならば哲學でいゝ、倫理の講義に至つては冷汗淋漓だ。あんな乾からびたお談義よりも偉大な文學を味はせる方がどんなにいゝか。とりわけ文學中毒に陥り易い中學時代に、最善の文學に親しませることは他の群小作家の蠢惑をしりぞけ得る力を與へる丈でもいゝ。況んや魂への糧が豊富にそれらの偉大なる古典的傑作の中に藏されてゐるをや。

思想とか、道義とかいふ方面の缺陷は如上の通りだが扱てその次の「科學的智識」にしてから

が、中等學校あたりで提供されてる智識はあまりに幼稚すぎる。あまりに梗概すぎる。もつと豊富に潤澤に與へるならば、元來智識慾の極めて旺盛に働く此の時代に、智識に對する憧憬と享樂とは、自然に青年學生の日常生活を慎重ならしめ彼等をして不良な傾向に赴くスキなからしむべき筈だ。學科そのものに面白味がついて來ると、もう止めて遊べと言つても止められるもんじやない。少青年時代には旺んなるその肉體の成長の爲に、いくら食べても食べたがるやうに、その精神生活にも充分の糧を要求する。それは勿論マツター(物質)ではない、マスターピース(傑作)だ。グニャ／＼に煮くたれたソツプぢやない、丸ゴト提供されるソート(思想)でなければならぬ。科學でも文學でも、いいといふいい本をドシ／＼讀ましてやるべきだ。下らぬものを繰り返し／＼試験勉強さすヒマに悠々として完き著作を縦横に讀みこなさすべく充分の時間を與へなければならぬ。道明寺乾飯のやうな片々たる教科書の代りに、もつと水氣たつぶりな、あたゝかい湯氣のホヤ／＼立つ食べ物を山盛りに提供さるべきものだ。下らぬ教科書をあてがつておいて何でもかでもムリムタイに記憶にえり付ける試験勉強の強請が、學問へのほんとうの趣味と「學問そのものゝ持つよき感化」とを打ち壞はしてゐる。智識に對して自然に起るアツペタイト(食慾)

を無くきしてゐるもんだから、今度は別のもので勉強を強請しなきゃならなくなる。優等賞だの席順だのいふものはつまりそれだ。こんなロクでもない懸賞で、學習への態度を不純にし、吾學生時代の心理を不純にして顧みないのは何といふ無反省な仕打であらう。

これについて思出すは或る小學校長からの手紙だ――

「舊詰の廿九日當町の町税完納者表彰式が紀元節式後行はれました。表彰されたるもの二百三十餘人、一人毎に反物一反手拭幾本を添へて此代五百幾圓とか式の仕舞頃になると貰ふ人達は反物の柄の選み方にて全く奪ひ合ひの状態、表彰者は反物を握り次第サツサとお歸り、全く物を取りに来るのである、而も表彰されたものは貧階級の小前もの許り、資産級の町會議員で表彰されたものはたつた一人。これが町政に當る人達の納税の状態である。それでも町當局は來年はもつと盛んにして益々納税成績を擧げやうと力んでゐる。

寒帯のある地方の橋引犬は鼻バシの先にぶら／＼してゐるボク(鹽鮭)を嚙らう／＼として終日走るといふ話を聞いたが、我々の教育も或はこれと似た所がないだらうか？ 黙つてやつてれば子供が本道を進むものを、あの方法、この方法とあまりに方便に疲れさしてゐはしないか。

「兒童をして自治の態度を取らしむる方法如何」はもつと方法を無くする方法如何であると思ふ。自分が分らねばそれは理想だとわけなく斥け、自分の考と違ふとそれは危険思想となり異端者となる。吾々教育従事者はもつと純でありたい、正直でありたいと思ふ。」云々。

第四

中等教育時代に充實した教科を與へないことは、純な學生々活を維持し難きスキを與ふるのみならず、學習研鑽の心理的プロセス(徑路)の上に、大へんな損をさせて置く。その爲修學年限が先へ／＼と延びて行く許りだ。小學校でやれべきものを中學校迄延ばし、中學校でやれべきものを大學迄延ばして恬としてゐる。而も「二十才以上の青年男女を學窓に留めて置くことの危険」を思はない。大學生活なるものは、取りわけ實生活とは相容るべからざる弛緩な習慣を養ふに都合よく出來てゐる。内からは性的要求が旺んに湧起し、外には誘惑の手が至る所に待つてゐる。而も生ぬるい倫理の講義などで道德觀を養つてきてゐるものだから、到底こうした内外兩面の敵に双向へるものではない。その證據には彼等の間に性的の不行跡は尋常茶飯事の如く云爲されて

る。これ實に他の何物を以てしても償ふべからざる大いなる害毒ではないか。此のことを大目に見られるやうな教育ならてんでお話しにならない。性的苦惱期を不しだらな學窓に徘徊させて置き乍ら、それに對する何等の豫防——然り精神的にも肉體的にも行き届いた何等の對策をも講じないで、ほつたらかして置くことは何といふ手ぬかりであらう。他のことは、重箱の隅ツコをほじくるやうに、やれ危険思想の何のかのと峻嚴な取締りをやつて行くに性的方面に對しては、細かい用意が一つもやられてゐない。教育とは抑もそうした微妙隱微な方面に尤も手を盡し、そして又尤も効果を豫期さるべきものではないのか。實にこの性的不道德からして人の世がいかに暗黒化されてゐるかといふことを考へると、學校に於ての手ぬかりは到底默視するに忍びないのである。

性的不用意に次ぐ、學校の手ぬかりは「群集心理の惡感化」である。ヤンチャな野治的な粗濫な態度である。

同じ位の年輩の男同志、或は女同士、「一區域に多勢收容して置くことは」教育の目的から見て

危険極ることだ。教育といふものは元來個性に據る個別的なものなのに、多勢集るとそこに忽ち群集心理といふものが醸される。群集心理ちゆうものは兎角に箇別的教養を蹂躪する。即ち多勢に依つてよき感化を與へらるゝことよりも、惡い感化を與へらるゝことの方が多い。否、元來多數といふものは決して何等のよき感化も與へ得ないものだ。群集を支配するものは、人間の魂の光りではないもの。腕力だとか、権力だとか、金力だとか、凡て野心の伴ふ外部的な街耀的なことでしかない。もしくは個人々人の克己とは丸であべこべな人間の弱點の跳梁に任せられる場合が多い。惡貨が良貨を驅逐するてふグレシヤムの法則は誠によく群集心理の中に行はれる。自ら顧みて直くんば千萬人たりとも我往かんの氣概は、個人的教養の高調に達した人にして初めて言へることで、團體訓練などを標榜する學校の產物には望まらるべくもない。團體訓練なるものは本來個人々の充實せる教養から生ずる自然の結果でなければならぬのに、初めから群集心理の跳梁を是認するか、もしくはは團體訓練の名の下に、天下り命令を強請し、個人々のイニシエテブ（發言權）を全く屏息せしむる一種の訓練であるのだからたまらない。

實に輜なるは燒野ヶ原に放たれた雉子の如く、バラツクの中にウヨ／＼押込まれる兒童であ

る。自然といふものゝ背景もなく、教化に裨益ある環境もなく、只交通機關とか、通學區域とかに依つて決される學校の敷地、火事や水害に避難民でも收容するやうに、多くの少年青年を狩集めて入れるバラック學校、あの中に行はるゝ群集心理を思ふと實に悚然たらざるを得ない。

人間の或一區域に群集するところには決してよき感化は産れない。工場、兵營、牢獄——そして學校、これらの内部に發生する群集心理は決して良いものではない。諺に女三人集れば姦しいといふが、男でも女でも大勢群居して居る處には決して善い感化があらう道理がない。

で、家庭に於て折角良き環境を與へ、良き習慣をつけても、學校といふ雜駁混沌裡に放してやると、善玉がいつも悪玉に蹴押されてはじき出されるか、さもなくば悪玉の中に化すべく塵埃だらけ庇だらけにされて了ふのである。學校から出てくる兒童は決してその入る時の純真さを保つてはゐない。

「兒童がその本來の純真を失ふ」といふことは、外のいかなるものを勝ち得たにしろ償はるべきものでない。このことは親の身になつて觀なければ分るものでないが、そうした點を痛切に考へべき親達が却つて、仕方がないとあきらめてゐる愚かさもないものだ。あゝ何と云つても教育の

「育」は學校では出来ない。學校は「教」だけだ。教授だけだ。物を覺えることだけだ。それなのに世の殆ど凡ての親達は學校は教育するところだと思ふて安心してゐる。否、教授も教育も全く同一に見てゐる。

教授——インテレクトにのみ訴へることは、決して教育——エヂュケイトすることではない。

(エヂュケイトといふ言葉はプリングアップ、養育といふ意味から來てる)。「育」はどうしても家庭内のことだ。教授だけは或は學校でも出來やう。育のつく教育だけは斷じて親達の家庭内の仕事だ。

何が人間を作るか？ 教育か教授か？ 人間が出来る出来ないは、物を覺えることのも寡ぢやない。文育の者にもほんとうの人間がいくらもあり得る。「頭の利く奴に機械許り多い」曰く法律運用の機械、曰く本讀み並に製造の機械、曰く金持使用の機械等々。凡て金を食ふた學問をしたものに限つて金の奴隷になり易い。機械はあり餘る。けれ共肝腎の人間の乏しいのはどうしたものだ。學校ばかり殖へて人間が益々減少する。

樹はその實に依つて判斷される。學校での優秀者は全然インテレクトチュアルのそれである。頭

がいふことが無條件に賞讃される。けれ共それは必しも創造的ないふことではない。寧ろ機械的な記憶偏重と要領のいふ才子肌がその標本だ。他を凌ごうと焦せる野心、他に見せやうとする虚榮、が隠約の間に働く。そうした智識偏重の傾向は、益々人を貴族的に成上らせる。そしてほんとうに人としての美はしい點がさつぱり顧みられない。總じて徳行への競争が少しも刺激されない。このことはほんとうに悲しいことだ。

學校に入つたが最後、親達も教師も只人に負けるなの一點張りでゆく。この人に負けるな、といふことは結局試験成績の席次を意味することではかない。人間らしい點、俠氣、義氣、將器といつたやうなものが強調されない。人の世には知識などよりもこれらの人間としてのいふところがどんなに必要であるか。此等の鍛練はとりわけ少青年の頃から吹き込んで習慣する迄に至らしめなくてはならぬ。

知識と徳行とは別のものだ。徳行が知識に先んずべきものであつて、知識をして先んぜしむべきものではない。成り上り者の知識は徳行さへも愚弄し兼ねない。そして學校あたりの生かじり知識は、徳行への下地たるべき青少年の眞純をさへ稀釋し易い。此事は教師も父兄も三たび省み

るべき問題だ。

いろ／＼な理屈や議論を抜きにしても、教育といふものは何よりも先づ「役に立つ人間」を作

ることを目的としなければならぬ。出來るとか出來ないとかいふことは頭のことであるよりも、より多く腕（行爲）のことであり智であるよりも、より多く能のことでなければならぬ。エライとかエラクナイとかいふ概念は後廻しでいふ。先づ何よりも必要な資格、「役に立つ人間」といふことを眼中に置かなければならぬ。然るにこれ迄の教育は、「人間が人間を支配する」ことに許り重きを置いて、「人間同士が協力してよりよき世界を形作る」といふことにハッキリと目を附けなかつた。學校に於ては競争試験に許り精を出さして、學業そのものゝ本質的研究に取つては協力といふことが競争よりも必要なことに気が附かなかつた。實際の世界に於ては何一つとして個々人の力で大きな仕事の爲し遂げられた例がない。強者と弱者の協力なしには何事も了ふせられなんだ。優者も劣者と共働する外に何事も爲し得なんだ。競争よりも協力がより偉大なる効果を擧げてゐるのは否まれない。何故に學校に於て學業の研究にこの協力が強調されぬのか？

夫といふのも學校に於て爲さるゝ事は、單なる記憶の稽古に過ぎないからだ、教師の口授した
こと、若くは教科書に書いてあることを、試験の時遺漏なく再現し得れば能事了れり矣である。
だから學校に於てよき成績を得んが爲には集團的協力の必要なかない。隠れた所でコツソリと
勉強してゐても事足るのである。だから出来る生徒といふものは取り分け個人主義的なものであ
る。又試験の成績に許りかゝぶ生徒に取つては、正課外の讀書などは異端のこととして斥けて
ゐる。若い時は何もそんなに馬車馬的にやらなくとも、もつと餘裕のある、學問への逍遙といつ
たやうな氣分を味はしてもいいではないか。

「試験間近の俄勉強」がいかに青少年の生理と心理を二つ乍ら壞はしてゐるかは何人の體驗にも
明らかなことであらう。アンナ間歇的なヒステリックな勉強が害になり毒にならずに何が毒にな
るものか。もつと継続したジツクリした系統的な努力に習慣づけるのが取りわけ中學時代などに
は必要ではないのか。而もあれ程精根を竭して勉強したことが、試験の後に茫然一夢と化し去り
何等役にも立たず記憶にも留つてゐないのはむしろ不思議な位だ。あんなバカ／＼しい努力つて
ありやしない。あれがもし物の考へ方、問題の調査方法、學問の仕方といふやうな後々になつて

も役に立てるトレーニング（鍛練）だつたらどんなに有効だらう。即ち單なる記憶の試験に非ず
して何か一つの問題を提供して、夫を縦からも横からも徹底的に研究させ、其纏つた報告に依つ
て優劣を決定するといふやり方。それならば到底個人々々では完きを期し難い。それ／＼の組を
作つて各成員が分擔をきめそれ／＼の研究調査をなし、それを持ち寄つて互に批評し合ひ補修し
合つて初めて完全なものが出来上るといふ風なやり方。實際の世の中へ出て見ると皆そうした經
路によつて仕事が出来上つて行つてゐる。そうした習慣を學校時代からしてやつてゆくのが何ん
でわるい？

一年三百六十五日接觸してゐる生徒の實力の程度が、たつた一時間や二時間の試験でなければ甲
乙がつけられないとはあまりにも迂濶すぎる。それほど平生のことに無頓着な教師があり得るだ
らうか？ 五十點と六十點と其差幾許ぞ、三十點と三十五點とその差幾許ぞ、又一番とか二番と
かいふものを競争させないとベストを盡さないやうなクセを一體誰がつけるのだ。ほんとうに一
番になれるものなら、生れからして學問の好きな資質のものではないのか。資質が自然に優劣を
結果せしむるに任かしたつていゝぢやないか。

試験をするならば、「できる実力に近似し得る方法」でやるべきものぢやないか。

例令語學の試験なんかには辭書を側に置いてやらしたつて差支なからう。一つの文字を知らない爲に、文章の組立が充分呑み込めてゐるに拘らず、答案が書けないやうな目に逢はしたつて何んにならう。そんなことで決して實力が試験されるものぢやあるまい。

數學ならば必要な公式を提供してもいい、その公式をいかに使ひこなすかといふことが各人の實力の分るところでなければならぬ。

歴史などは一時間や二時間で與へられた一二枚の紙に書かさなくたつて、三日も四日も與へて参考書を読まして思ふ存分書かしたらいい。

地理ならば、手近な郷土を實地踏査さして、觀察と調査の上で、纏つた報告を書かすといつたやり方。

理化學などは勿論紙の上で書かすべきでなく、一つ／＼の實驗をさして見るべきものだ。

生徒の實力の測定は一時的の試験ではできるものでない。繼續した生徒との接觸に依つて自然に分るべきものなんだ。それが分らないやうでは先生でもない、生徒でもない。

「誰も訊かないでくれると、私にはチャンと分つてゐるが、訊かれるともう分らなくなつて了ふ。」

これは賢哲セント、オーガスチンの告白だ。この言葉は味へば味ふ程深い意味が出てくる。これは解釋する途もないお互の心にシンミリと聞いて見れば分る。人の子を試験するといふ者に取つては、ほんとうにシミジミ味つて貰ひたい言葉だ。

口に出して言へないことが實に澤山にある。それは巧、拙、の程度に非して、本來言へないこともあれば、又言ひ得ない子供もある。紙の上に書くことでもそうだ。それが紙の上に試験官の注文通りに現はれて來ないからつて、どうして分らないと即斷することができやう。心に於てある理解、それを洞察し得なかつたら、ほんとうに人の子を試験するなどいふ大それたことが企てられやう筈がない。

心に理解があつたらそれで澤山だ。それを輕々しく口にも筆にもされぬ人に限つてそれを味ふ奥行が深い。手ツ取早く答へられるやうなクセのものに限つて、不徹底な、そして膠つた概念をたやすく受け易い。若しくは生かじりのままで無雜作に出して自ら得たりとするクセがつく。そ

の爲一步突込んで訊いて見ると、忽ちギツクリつかへて了ふ。学校の秀才は得てこうした型のものが多い。

教師が言つた通り、教科書に書いてある通りしか再現せないものは、少しも感心するに足りない。知識にしる表現にしる、一度違つた個性を通つたら、もう決して同一に出て来るものではない。同一に出て來たらそれは不消化の素通りだ。

所が學校の試験勉強といふものは一生懸命になつてこうした不消化の素通り式學習を奨励してゐる。その爲に學校で習つたことはチツとも身にならない。勿論その内容からして身になれそうなものもないのだが。

私が試験の害毒を力説すると、そんなら試験に代る刺激は何かと反問するものが出て來るであらう。私は言下に答へる許りだ。試験はそれに代る何物を案出する迄もない、即坐に廢止すべきだと。恰度吾々の少時の經驗、黙つてゐれば適度に勉強するものを、なまじ勉強しなさい、などといはれると却て嫌になるやうに、試験を廢止すると、試験にまさる利目ある大事な〜學習へ

の興味イニテレストが自づから湧いてくる。そして試験なんか束縛されなかつたら教師も、もつと自由な創意ある教へ方が各自に案出されるに違ひない。こうして試験がなかつたら誰も勉強するものがあるまいと思ふ杞憂論者の目を驚かすやうな偉大な成績が結果として現はれてくるであらう。

近頃、新しい教育を標榜して所在に起つてきた學園は大低自學自習主義の教育を採用してきてるやうだが、それはよけいな設備や献立をする迄もない試験を廢止することに依つて尤も容易に自學自習に導き得るのである。試験なんかの束縛がなくなると、めい〜がほんとうに箇性と能力に適合したものを發見することができる。そうした餘裕と自由とを與へることは一番必要なことだ。凡て興味の持てないものはやれと云つたつてやれるもんでなし、興味の持てるものは止せといつても止められはしない。

興味の持てないものはどうするかつて？ 興味が持てないといふことはやり方の間違つてゐるか。未だやるべき時期に達してゐないか。その必要を明晰に感じないか。或は全然それに適しない特異の箇性を持つてゐるか、等々の理由に依るであらう。此の最後の理由に依ることが明らかになつたら、それは斷念する外ない。そして斷念することは、無理やりに強請するよりもまし

だ。それよりも却つて伸しうるものをぐんぐん伸して行つた方がよい。元よりそれを決定するには慎重の注意と甚深の洞察とを要すること勿論だが。もし初めより自學自習に即した教育に浴し得るならば、そうした箇性の發見は、他動的によりも、自動的にきめられ得るものだ。勿論箇性の強烈さにも程度があり、それを生かす力にも大小があるだらうから、箇性に即したからつて直ちに大成は保證されない。而し乍ら同じく苦しむならば、同じく努力するならば性格にかなつた素直な道を行く方がよい。それはどんなに岐路を迂餘曲折しても、遂に本道まで出ないと氣が晴れぬものだから。

競争々々と言つても個々人の自由競争が進歩の母となつた時代はもう過ぎ去つた。それは十八世紀末葉の啓蒙時代に芽生えて十九世紀末葉に於てその役目を了つた。それは二十世紀に入つてもはや落果を待つ許りになつてゐる。見よ、あらゆる人間の活動舞臺は至る所特權網に張り詰められて、もはやハンチケアップなしには到底競争の出来ない世の中と化し去つた。競争が出來ないことが明かになつたら協力がその次に來なければならぬ。さてこそ當今はあらゆる方面にコオペレーションが唱道されて來たわけだ。そしてそこいらから人間社會の行詰りを打開する新しい

道を見附け出そうとしてもがいてゐる。

けれ共共同組織コオペレーションといふが如きものには、とり分け箇人々々の協力的教養が必要なのに、現在の學校は悉く競争試験の鐵火の下に訓練されて來てゐるので、どうしてもそうした組織に不向きな人間を出來して了ふ。學校に於ける優等生、落第生の區別は益々階級思想を固定する。劣弱なものをも輔佐して各々の能力を平均的に引上げやうとする相互的努力は盡されない。こうした教育を受けて行くから成人になつても、共同組織といふやうな、個人の優越が必しも特權化されないやうな組織を歓迎したくなる。そしていつ迄も階級組織の嚴乎たる墻壁を築き上げてゐるのである。

コオペレーションといふことを、しつかりと學校内に樹立した人に、英國のサンダーソンがある。氏は數年前に物故したが田舎の中學校に埋ること三十年、晩年に掘り出し物の如く認められ出し、かのエッチ・ジー・ウエルの如きさへ自分の二人の息子を托した程だ。彼は早くから群團的研究法をその學校に採用した。それは生徒が個人々々で力を角逐することなくして、三

人乃至五人位づゝ組を作つて研究する。そうした組全體の協力の結果として現はれる成績を以て競争するといふやり方だつた。

そのよき例は毎學期に行はれる「科學の夕」とでも名くべき催しによく現はれてゐる。その日には生徒の獨創に成つた諸種の實驗——理化學、生物學、機械工學などに關する實驗が公開される。それは玩具のやうな學校用の模型的機械を以てするに非して、實際の工場に使はれてゐる精巧な高價な機械を自由に使つてやらせるのだつた。それらの實驗の準備は主に正課以外の時間を振り當てゝやるがいよゝ實驗の近くにつれて正課の時間さへも犠牲にされる。その頃になると生徒の興味もだんゝ白熱化して來て、或組は遠い町へ注文した部分品の到着が後れるのを恐れて自動車を飛ばして取りに行く。或組は生物學の實驗に供する爲に網をかたげて湖沼に漁りに出かける。或組は油脂に塗られ、汗にまみれ乍ら機械の組立に没頭する。

こうして各組の成員が、割り當てられたる仕事を分擔して互に組全體の成績に對して責任を持つ。どんな些末な部分的な仕事に粗漏が生じても全體の實驗にクルとが生じる。チョットとした鉄一つ弛んでも機械が圓滑に動かない。各自の分擔する仕事そのものに優劣がなくなつて、お互

の責任と努力とが平等に要求される。而もそれが上からの強制命令に依つてはなくして、仕事の良き成績を翹望する組全體の熱心から自然に湧いてくる所に言ひ知れぬアジがある。

いよゝその日には、父兄來賓の前で全校生の緊張裡に各種の實驗が行はれる。それは全然生徒自身の創意に成つたものだから二つと同じものがない。同じものゝ優劣で競争が行はれないで或る實驗を完全にやり了せたか否かといふことに依つて成績が決せられる。

もし實驗が甘く行かないやうなことがあると、そこへ教師が乗り出して、その原因を生徒と一緒になつて調査する。そうした時に發見された故障は生涯に亘つて鏤刻される。仲々試験場でチョットとした年代や譯語や公式などを忘れた爲に大マゴツキをなし、試験場を出てから教科書を開いて見る時は一生忘れまいと思ふ程の残念サだが、數日ならずして忘れて了ふと言つたやうな類ひとは異ふ。それは紙の上で記憶をたよりに書き綴るやうなその場限りの小手先の仕事ぢやない。もつと血肉の加つた體驗的の仕事なんだ。それは教科書の一隅に介在して一二的記述に止らず、實際世の中に出して成人の仕事として提供してもいゝ出來榮えを現はすことなんだ。どうしてその場限りに忘れんとして忘れられるものであらう。

(どうせ苦しめるなら、忘るべからざることだ試験したらいい。後々まで役に立つこと、それ自身充分の価値あることで試験したらいい。單なる記憶の再現でなしに、各自の創造を促す刺激とならしむるもので。何にしても人間をあんまりいちくり廻すことは止してくれ。もつと人間をいたはることを知れ！)

タンダーソンは文學、語學の方面にも「オペレーション」を採用した。そのいい例は演劇である。たとへばシェイクスピアの研究を初めると、只單に本を讀む丈ではなく、ちかちかに生徒をして芝居を演ぜしめた。それに依つて常に文句の暗調のみに止らず、背景、扮装、動作等に依つて劇そのものの精神が徹底的に味讀される。そのみならず、演劇には大勢の人が要る。その役割にもめい／＼の特徴を捉へて個性を旨く利用することができる。教室での單なる暗誦には鈍いものでも或は異常な執り役を實際に見出すかも知れぬ。どんな端役でも充分にやり了ふせなければ劇全體が生きない。そこには役割の高下よりも、個性をよく生かすかどうかの問題となる。どんな役をふり當てられやうがベストを盡すべきもの、一人のしくじりでもが全體の出來榮えを傷ふと

いふ連帶責任の感じが絶えず働く。「個人が全體の爲に負ふ責任感」が強く働く所がいふ。

タンダーソンはグループ、システムを極めて自然に歴史科に採用した。彼は全然教科書といふものをきめなかつた。又上古——中世——近代、といふ風に年代順にやる必要を認めなかつた。生徒達が容易に興味を惹けるやうな一時代、一事件、たとへばナポレオン戦争とか、フランス革命とか、或は産業革命とか、或はヴィクトリア朝の文學とかいふ風に、特定の一時代を抽出してそれを圖書館へ入つてあらゆる参考書相手に思ふ存分縦からも横からも解剖、考究させる。學校の圖書館で足りなければ態々大きな市立の圖書館に通はせる。こうした圖書館勉強法を寧ろ奨励したものだ。そして何でも一つのものを徹底的に研究し盡くすまでは承知しない習慣を養成した。

歴史といふやうな學科は、只カイナデの教科書を讀む位では興味も何も湧くもんぢやない。詳細ければ詳しい程面白くなる。又興味を惹く事柄とか時代とかいふものも自然と出てくるべきものだ。歴史は初めからいくら深入りしたつて構はない。興味を以て進み行ける學科によつた

ら飽きる迄追窮して行くことを許していい。サンダーソンは或る場合には一つの學科に没頭して他を顧みないやうなことをも平氣で許して置いた。そうかと思ふと或る場合には不得意な學科に對して一週間なり二週間なりそれのみ没頭するをも許した。こうした集約的な研學法と、かの試験勉強法とを比較する時に、吾等はその根本的な學習の相違を認めないわけに行かない。簡より繁に、易より難にといふ順序は、推理、思考を主とする數學、物理學のやうなものには必要だらうが、その法則をそのまま、推理思考に非る歴史とか地理とか博物などにも移して墨守すべきものでない。

歴史とか地理とか植物動物などは簡單では第一興味が湧かない。又必しも簡よりしなくともいへば、自力で深入することが出来るものだ。圖書館や博物館の利用などで。

國語、外國語でもそうだ。興味の起り得るもので教へて行くといふことが必要なのだ。一つのものを感じたらそれを土臺として、そのもたらす興味に促されて、ひとりですり深いところに進んでゆけるやうな學習法。

それからそれと辿り行く道筋は、各々の性向、素質に依つて違ふであらう。それだから各自の

自學に任かす餘裕を與へなければならぬ。それと共に氣の合つた友達が自由にグループを作つて協働的に研學するといふことが必要だ。

やりたいと思ふものは、他から干渉しないでそれを素直に追窮せしめる。或る程度に至つてそれを止める迄構はないで置く。

農業に「インテンシブ、カルチュア」といふことがある。譯して集約農法といふ。これは小地積の土地で最大量の收穫を擧げる農法だ。人口稠密な國柄では何よりもかゝる農法が採用せられ又自然に發達もしてゐる。

所が、教育にも斯うしたインテンシブ、カルチュアを適用することができる。即ち性格にかなつた、そして境遇の許す或る特定の科目を集約的に勉強するといふことは、個々の人間を生かす上に、極めて經濟的で又能率的な行き方だ。

然るに學校に於ては、そうした行き方は全然許されない。平均點の強請は事毎に素直な個性の現はれを沮む。好きな學課は嫌ひな學科の爲に蠶食され、相殺され、稀釋される。何事にも全

全力を集中するといふ熱意が許されない。それは實に何ものかを持つて生まれて来たものに取つて堪へがたいことだ。私の言ふのは勿論好きなと思ふ學課に許りインテンシブなれといふのではない。時には嫌ひなと思ふものにもインテンシブならしめることが必要だ。數學の嫌ひなと思ふものにも、或時期、或るチャンスに、たまに旨く出来たシホに、ミシツとすかさず没頭さして見る。數學の歴史、數學的遊戯、數學的實驗、天文曆數の話、經濟や社會上の各種の統計、といったやうな何かしら數學といふものゝ持つ背景に迄親しましめ、遊ばしめ、逍遙させて置くといふ風なやり方が、きつと意外の面白い結果を將來すると思ふ。(頭に鉢巻して、めくら暗記に徹夜したりする試験勉強などは天國と地獄ほどの違ひだ)

然るに學校に於ては、教師が一通り定理や公式を説明し一二の例題を解いて見せた丈で、後はウンザリする位多い例題の運算を生徒に強請する。例外といふものゝない規則整然たる數學に於て、原理さへ呑み込めたら何十何百の例題も双を迎へずして解かるべきで、何も數多くこなすを以て能事とする必要はないのだ。けれ共基本智識を徹底的にそして一人残らず分らせるといふことが時間割と劃一教授の故に許されないので、幾多の學生が分らない乍らスキブ、オプア(滑

り越し)して了ふ。それだから先へ進むに従つて益々分らなくなり、いつも數學といへば顔をしかめざらんとするも得べからざるやうになる。そりや頭の受け容れ方に速い者もあるだらうし遅いものもあるだらうから、遅いものには特別の時間を與へ、特別の指導をしてやつても、基本原理解丈はどうしても呑み込まずやうに手を込めてやらねければならぬ。

然るにそうした伸縮が今の學校にはとても望まれない。凡ての學課は「時間割」といふもので小刻みに機械的に運んで行かねばならぬ。あゝあの時間割といふやつは何といふ學問研究の上にふさはしからぬやくざな發明だつたであらう。生徒の頭の心理的プロセスなどには寸毫の顧慮する所もなく、只夫れ教師達のアツチの教室からコツチの教室へとかけ持つて歩く時間の都合の爲に決めらるゝのみだ。朝、登校するや否や第一時間目に軍事教練とかで、背囊をしよつたり、重い鐵砲を擔ぎまはして野外をかけまはる。それからその後で數學の時間が來たりする。朝の清新な頭の状態をなべての學生の好まざる力役に浪費して、疲勞した頃に數學を考へさせるとは、なるほどスパルタ式の本領かも知れぬ。

更に一時間づゝ小切つて別々の學科をやることに就いては根本的の疑問がある。教室へ出たり

入つたりする時のドサクサした騷擾、一時間毎に出缺を調べたりするヒマを差引いたら正味三四十分にしかつかぬだらう。こんな零碎の時間に一體何が出来るのだらう。興味も熱度も湧けるものぢやあるまい。どうしてあんなガサ／＼した工場労働的生活を四年も五年も、続けられるものだらう。もし小學第一年から否應なしにあらうした學校生活に慣れさせられなかつたら、眞に物を學ぼうとする氣分と、あのやうなツグハグな時間割とはいかに相容れざる零圍氣を成すものであらう？毎日カバンに一杯本だのノートだのを詰めて兵隊の武裝よろしくのスタイルで通はなくとも一冊の小形ノートをポケットに入れた丈で學業が授けられて差支なからうぢやないか。特に入學した許りの尋常一年生にまで肩がゆがむ位の道具を擔はして歩るかせるのは、生理的にも何か影響がないもんだらうか？

一日に一つのこと、一週間に一つのこと、更に一ヶ月を一つのこと、に没頭さしたつていゝぢやないか。天は二物を與へない。一つのことを完全に成し遂げることは百のことを生嚼りするよりは遙かにましだ。

人間の個性は、その稟質は各自の顔付の如く異ふ。高能の者は只の一人だつて居らない。元よ

り人の世に於ては高能者などを必要とはしない。人は各々その持つて産れた稟質を生かすことに依つてお互に裨益し得るのだ。たつた一つのことといふ、それを間然するところなく仕上げ得たら、それで充分人の世に貢献することが出来る。外のことは又他にそれを能くする者が出て來やう。そうして各々がその得意とする持物を持寄つてこそ人の世は初めて相互扶助の圓滑な生活圏を形成することが出来るのだ。然るに各自の個性、稟質には頓首なく、何を標準とするのか分らない科目の並べ方や、時間割を劃一的に多數の生徒に強請し、而も平均點を強要するものだからいくら長い年數を學窓に送つてもほんとうに身についた何らの學藝をも習得せず結局ウヤムヤにアブハチ取らずに了つてしまふ。尠くとも義務教育を了はる頃にはハツキリとその、個性に根ざした進路を發見し得なければならぬ筈なのに、中學校を了はる頃になつても未だ自己を發見し得ずらうろついでゐる。これ畢竟するに學校に於て平均點に重きを置く結果だ。

而し乍らよく考へて見ると、平均的によきものは或る意味に於て進歩の限定して平平凡な素質の者である。そうしたルーチンな機械的な努力をコツコツやつて行けるものが必しも人間の精粹ではあるまい。特異の資質を現はすものこそ特に手をかけてはぐくんでやらなければならぬ。然

るに今のやうな學校のやり方では、特異の資質あるものは、實にその資質の故に學校に於て苦しみ、自らは大いに迷ふ。彼は絢爛な雑色を賞美する學校に於て、單一な赤とか黄とか黒とかしか持つてゐない爲に、丸で異端扱ひされる場合が多い。そして至純に直截に驀地にその欲する所に赴きたい熱意が無理解にも事毎に阻まれ挫かれ虐げられ侮られて、言ふに忍びざる産みの苦しみを濟り抜けなければならぬ。

然るに學校を出てからの社會は少しも雜藝を尙げない。一技一藝で立派に飯が食へて行つてゐる。取りわけ一技に長じ一藝に秀でたものの方が、より多く優遇されてゐるではないか。これは何事も分業になり行く現下の文明の相の當然の要求ではないか。然らば學校に於てのみ平均點に重きを置く理由は、個人的には元より、對社會的にも成立たないではないか。況んや平均點の故に特質の優秀を犠牲となして顧みず、甚しきは一科の不出來の爲に落第などいふ尤も不合理な停滯を、一筋に進歩を生命とする青少年に強課するは何たる無謀な懲罰であらう。

「一人々々の特長を擱へてそれをどこまでも伸してやること」どんな劣才のものにも何かしら取柄を見出してそれで以て世渡りに差支なからしむるやうにする。こうしたことが教育の極致でな

ければならぬ。下らぬ點數の詮義立てなんかよりも、人間にスタリの出來ないやうな教育の仕方をこそ斷えず行はなければならぬ。人間には本來スタリがない。スタリがあるのは教育の仕方のわるいのと、社會の活動舞臺がいろ／＼な制約の爲に狭められてゐる爲だ。活動を自由にすれば人間にはスタリがなくなる。

新しい發明發見が、劃一教育などの及びもつかぬ多種多様の職業を人間社會に提供してゐる。タイプライター一つの發明の爲にどれ丈婦人の職業の範圍が擴められ、そして婦人解放の刺激になつたか知れぬ。その他キネマ、ラジオ、飛行機、自動車といふやうなものゝ發達が、どれ丈特異の人間を有益に使つてゐることか。きまりきつたルーチンな生活に堪へないものが、従つてそうしたちみな生活に向けるとシクシリ許りしでかすやうな人間が別の分野に働かすと、驚くべく有能な天才的な働を爲せるといふこともある。こうした新しい分野の開拓といふことが、人間經濟の上に極めて必要だ。

學校に於ては物の經濟を教へる、けれ共「人間の經濟」に就いては甚だあきたらぬ點がある。人間の本能を殺す傾向がそれだ。本能に立つ時ほど人間の強烈なことはない。ところが學校教育

は、事毎に人間の本能を丕め、薄め、殺すことのみ敢てしてゐる。そのクセ権力や財力の上の本能は無制限に跋扈跳梁さして構はない。それだから人間が人間として大きく深く強くならないで、機械の部分品のやうな小さく固まつた曲謹な人間のみ多くなつて、所謂桁外れの人間が益々減少する一方だ、マーシャルが、経済學原論に鹿爪らしく定義を下した、デリベレートネス——用心深い、しまり屋のみ結局巾を利かすやうになり、世の中が益々平凡に益々セチ辛く益々狭苦しくなりゆく。人間が人間を尊重することをしないで、物を尊重する。天然資源や生産機關を獨占して、地球の上に人間の放牧を許さず、目に見えぬ鐵條網を以て固く其埒内を守る。同胞の窮困を見殺しにして自らの枕を高うする徒輩は、人間經濟の上に有るすべからざる障礙物にあらずして何ぞ！

人間は人間を尊重しないで何を尊重するのだ。人間が人間を愛しないで何を愛するのだ。凡ての人間を無差別に愛し得るてふ第一要件を具へてゐなかつたら、その外のどんなものを持つてゐやうが教育家としての資格には大いなる缺けであらう。愛しないでは何も出来ない。その代り愛し得れば凡てが出来る。出来る生徒が愛され易く、出来ない生徒が顧みられないのは、只智的な

頭の資質許りが強調されて、ハートの心情のいゝ所が看逃さるゝ大へんな手ぬかりである。それといふのも試験といへば智的事と許りで、心情とか徳行の上の試験といふものが、點數に盛られないからであらう。エリ／＼した野心の塊りのやうな人間の代りに、いかにも人間らしい信望のある人が上位に立たねば學校でも世の中でも決してよりよくなれる氣づかひはない。何人も少しく深い省察を以て今の學校といふものを考へる時に純粹に教育といふことから遙かに外れて了つてゐることを看破せず居られまい。既に學問、知識の習得と言つてもどうせ學校での教科書學問はタカの知れたものだ。それはそのままではチツとも實社會に通用のならぬものだ。そんなら何がせめてもの求められ得るものか、それは要するにごく淺露な基本教育に過ぎまい。そうしていかに己の志す研究を進め、いかに自らを生かす行くべきかの基本教育を與へる爲には、そんなに長く年數をかける必要はない。又それ位の基本教育さへ與へられなかつたら、よしんば三十迄學校の門を濟つた所が遂に何するものぞ。然るに「學校に入る目的」は教育されることよりもより多く單なる卒業證書を握ることにあるのだから、年齢などは必しも問ふ所でない。資力あり境遇の許すものは、いつ迄かゝつても、世間が認めて以て最高の學府となすものに膠着して、

之と心中することさへも敢て辭せない有様である。それもその筈、就職にはデプロマ(免狀)を要し、免狀には席順の上下に依つて價值が違ふので、泣いても吠えても卒業する時丈は最後の馬力をかけて試験勉強に熱中しなければならぬのだ。が、今はそれさへもいくらか變はつてきて、職業的運動家ももてるといふ話だ。被僱人本位の教育は使用人の意向に依つていろ／＼變つてくるから困る。

「被僱人としての教育」——これが今の學校教育の別名かと思はれるほど肯綮に當つてゐる。長い／＼年期奉公を學校といふものに拂ひ乍ら、それを出て來ても獨力で仕事の出來るやうな何等の技能も授けられないもんだから卒業するや否や極度の不安と焦燥を感みせざるを得ない。往いて職業紹介所に至り失業者の述懐を開け！彼等の受けた學校教育なるものがどれ丈のネウチあるものであつたかは一番よく分るだらう。一度失業したら手も足も出ないやうな不備不敏な修業法であつたとは、意識せざらんとして得べからざるものがあるであらう。そこには一人前の人間としての本質的必要が等閑に附されて、徒らに制度や組織に都合のよい屬性許りが力を極め

て仕込まれた。人間一匹何處へ出してもかゝらずに飯が食へる修業が不可欠に與へられなかつた。一箇の生産人たる資格が作り上げられずして、他に奇食せずんば生きて行けない不生産者のみが盛んに濫造される。地道を歩く足を健やかにする代りに、空飛ぶ鳥の翼を羨しがらせた。一定の學資を月々貰つたクセがどうしても一定の月給にありつくことを最上の處世法と心得しむる焦燥と不安と嫉妬とが學校の門を出る一步にして散々に青年の心をさいなんで了ふ。

知——智識——智識階級——大學に日本國中の官吏なるものを養成さして構はないで置くことは、明治以後の民力疲弊の結果から見て、最早充分に考察すべき時期に達してゐる。官吏の仕事といふものは少しも土着的ではない。根が土の中に下りてゐない。計畫丈は机の上で何ぼでも立てられる。横文字で生かじりの西洋くさい計畫を遠慮會釋もなく、土着の民に押付ける。そして矢鱈に金ばかり使つてゐる。彼等の計畫することは金の産ることではなくして悉く金のかゝる豫算を食ふこと許りだ。そしてロクスツポやりかけた仕事の尻拭ひもしないで、轉任又轉任、日本國中を渡り歩いている。このことは政府なるものゝ最大の浪費たる明證に非して何んだ。このことにハツキリと土着の民共が目をつける迄は、いつ迄たつたつて民力の充實する時はないんだ。

今の大學教育などで無雜作に支配階級の資格が附けらるゝ程土着民に取つて難有迷惑なことはない。事務や形式は或は擧らう。けれ共肝腎の牧民といふ要諦は少しも會得されない。彼等は六法丸呑みで、權力てふ銘刀を恰も三才の童子に正宗を持たした如く揮り廻して得意になつてゐる。此のことを思ふと、這般の郡廢に際して、無資格の故に老熟の循吏を誡つて、高文パスのホヤ／＼法學士を代らしめて一かど整理を行つたつもりでゐるのが空恐ろしい。

支配ヴァイレンといふことはどんなにしたつて智識の力であつてはならぬ。「智を以て治を爲す」の大危険は三千年の昔老子に依つて喝破されてゐる。支配は純粹に德行に依るべきものだ。德行は實踐であつて單なる智識でない。無爲にして化すといふことは、政治の根本義であるが、智識は決して無爲ではあり得ない。生かじりの智識は殊にそうだ。だから計畫に次々に計畫を以てし、設計に次々に設計を以てし、而も一つとしてそれを遂行しやうとする程の土着的執着力がない。今は法律さへ知つて居れば、人の風上に置ける人格など有つても無くとも構はぬ。上官の命令を是が非でも通しさへすればそれで官吏の能事了れる如しだ。

支配ヴァイレンと仰山に言ふが、人間の學ぶべきは、人間が人間を支配することではなくして人間が

物質を支配ヴァイレンすることだ。

人の世の萬事は悉く物質の得失に依つて起ると云つていい。物質の處理安排がうまく行きさへすれば、人間が人間を支配する必要が大に減じるであらう。近代の政治が全く資本関の傀儡に過ぎなくなつた事實は、何よりも此間の消息を語るものである。

ポリティカル、エコノミーといふ言葉がある。しかしこれはエコノミカル、ポリテツクスと引くり返しても實際に於ては大した違ひはない。政治と經濟とは丸で一つ。マルクスでなくとも、政治だの何だのいふ一切の上層建築は經濟といふ物質問題の上に立つカラクリに過ぎない。

勿論經濟といふ言葉が、經國濟民といふ大きな意味から來てるのだらうが、學校なんかでやる經濟學なるものが、ヘンにそれを小さいものにしてつた。マーシャルはそれをデリベレートネス——用心深いことといふ風に定義を下してゐるが、なるほどそれで金持の息子達がやるにはふさはしい學問であるだらう。いかに資本を有利に動かし、いかに資本関を堅固に守るべきかを教へる學問としてならぬ。所がそれをそのまま無産者までが、無自覺に學校で學んでゐる。一體財産がなければ、施すに所なきものを財産なきものが學んだところがどうなる。他人の財産をマネ

一ツしてやる番頭學としてなら少しは役立つかも知れないが。そうだ、番頭學だ、番頭、使用人
傭兵、昔はローマにグラチレーター(騎士)なるものがあつた。體格の優秀なもの、そして又死を
見ること歸するが如き心掛を有する者だつたから、無論人間としては立派なものであつたに違ひ
ない。けれ共ローマの社會制度からは、それは單に奴隷に過ぎなかつた。金があると學者でも何
でも使へると空嘯いた金持の息子があつたそうだが、なるほどローマまで遡る必要もないわい。

經國は誰でも口はゞつたく言へもしやう、けれ共濟民はどうしてくれる。細民が町に野に充ち
満ちてゐるのに、徒らに聲を大にして經國を叫んだところがどうなる。ほんとうの經濟の道は濟
民にあらねばならぬ。野に餓孚あるうちは、どんなにしたつてよき政治の行はれてゐる證據にな
らないことは昔も今も變りはない。近頃頻々として起る生活難故の全家自殺は、之れ取りも直さ
ず野に餓孚ある明證ではないか。

飢ゆる民を野に有つて、しきりに強い兵隊に仕上げやうとする國策がある。民に菜色あつて何
として強兵になり得るか。私の縣に一人の痛快な村長がある。お上の無理強えに強うる何々訓練
所とかいふものをピンとはねつけた。役人達がいろ／＼な理屈をこねくり廻して説伏しやうとし

てもいつかな聞き入れない。その理由は至極簡單だ。曰く「金がない」の一點張り。その通り／＼
それ丈でいゝ、理由もヘチマも入らぬ。無い裾はふられずだ。それ丈の理由にしつかり立つてビ
クともしない腹があればほんとうに名村長だ。此の村長は嘗て消防の道具は買ったが今以て消防
組といふものを置かぬ。道具さへありや、あんなもの誰だつて使へる。わざ／＼兵隊上りにトビ
の装束をさせたり、毎年々々飲み代をせがまれ、なけなしの豫算を食はれるに及ばぬこつた。

こうした名村長はきまつて學校出でないのも妙だ。學校出のものはとてもこうした強いところ
がない。なまじ理屈を知つてゐるものは理屈で苦もなく説き伏せられる。苦もなく妥協して了ふ。
學校教育といふものは人間に妥協性を養成するに都合よく出來てる。その尤もいゝ例は、労働争
議に於ける所謂最高幹部の態度だ。學士などいふ肩書を有するものに限つて妥協性が尤も強い。
労働者が結束しないのぢやない。幹部と稱する智識階級の腹がすはらないので却つて結束が崩
れ、勝敗が岐れる場合が多い。妥協はプロカーの仕事だ。扱てこそ労働者の間に智識階級排斥
の聲も上るわけだ

人間が抜きさしならぬ必要にギツシリ立つ時ほど強いことはない。素朴的であればある程人間

は必要の眞髓をしつかり擱んでゆるぎなき態度に出ることが出来る。然るに理屈は解釋に依つて必要さへもごまかすことができる。白を黒とすることなどは理屈の上では朝飯前の仕事だ。現代のやうにあらゆるものが分裂し分科し來ると、頭と足とが同一の肉體にくつついてゐるに拘らず極端に違ふ方向にある故に丸で反對にさいなれる。理屈を覚えさせる教育は少しも感心されない。人が素朴的に物の眞髓に觸れてゆくのが一番いい。この素朴的ないゝところを態々取り去るものは曰く學校教育といふものだ。

素朴——自然——體驗(實社會)——人格——意志——力
技巧——偽善——教育(學校)——資格——命令——位

學校へ入つて學問をするといふことは、額に汗する勞働から免役されることだと思つてゐる。手足を動かして飯を食ふ位なら學校へなんか入る必要はないと思はれてゐる。それ程學校といふものが、成上り者の心理を養成してゐる。

しかし乍ら學校卒業生の生産過剩はそんな成り上り者を用捨して置かない。大學を出さすれ

ば直ぐさま支配階級に入れる時代はもはや過ぎ去つた。今は大學卒業生ほど就職口が乏しい。何となれば、學校といふものゝ人間仕立方が實際の必要にそぐはないものだから學校に長く暮せば暮らすほど、潰しが利かない。そして月給が足りない、仕事が低級だといつては不平たらしく、そして能率がちつとも舉らない。その上永い學生生活の間に贅澤な眞似は充分心得てるものだから、生活費が當然に嵩む。おまけに女學校出の妻君でも貰ふものなら忽ち文化生活の憧れで、萬引でも働かねばやり切れなくなる。

その仕事にしてからが官廳や會社で、椅子にかゝんでペンや紙でする仕事だ、どうして、大氣の中で日光を浴び乍ら鉢を動かし、鉤を動かし、鶴嘴を動かし、コテを動かす仕事よりもより高尚なのだらう。それが高尚だとか樂だとか思はせるやうな教育なら教育の方が間違つてゐる。

學校に於ては勉強といへば本を讀むことだと思つてゐる。勉強といへば本を讀むことだと思はせる觀念と、そうした習慣ほど馬鹿げたことはない。此の本をよむことをしかく尊重することからして、飛んでもない悪い習慣が派生してくる。即ち、勞役を厭ふクセ、物を面倒がるクセ、現實を飛び離れるクセ、時間を空費するクセ、他人のもつたいぶつた理屈を無條件に有難がるクセ。

それから本でも書くことをよつほどえらいことのやうに思ふ途方もない間違つた考を知らずく
でつち上げるクセ——

人間の勉強といふならば、「體をエフィシエントに働かすことの訓練」ほどの勉強はない。頭の
仕事ぢやない。體の仕事だ。何でもかまはない、手が利くといふとはかの理屈ボイかけだし智識
階級などより何ぼう有益でそして尊貴なことか。本を読むことを一かどの仕事だかに心得る學校
教育の悪習慣丈はどうしても何んとかしなくてはならぬ。本を読んでも間はいくらでも時間を空
費することができるのに、本をよんだ後は晝寝する権利があるやうに心得てる。二重の浪費だ。
勉強とは本なんかで手ツ取り早く片付けることぢやない。肉眼で眞實に觀ることだ。手足を以
て物事にぢかに觸ることだ。意志に意識を従はせることだ。考へることよりも爲すことだ。

勉強とは行爲のことだ。智識的手淫のことぢやない。所が學校に於ては試験によき點數を取る
ことが唯一の勉強なんだからしやうがない。親達も試験といへば態々うまいものを食はせ、夜遅
くまで起きてることを奨励し、朝寝することを見通し、何かといへば机にしがみついていることを
よきことと思つてゐる。机にしがみついていることにロクなことはない。

學校では勉強の意味をはき違へて、勉強にもならないことを勉強だとし、ほんとうの勉強をば
等閑に附してゐる。つまり勞することを自然に習慣づけることをしないで、勞せずして出来るこ
とを態々勉強の名をつけて不自然にやらしてゐる。

體を働かすことは頭を新鮮にするものだ。槍投げやマラソンなんかやらなくとも、朝早く起き
て裏の畑の草取りでもやつて見る。とても頭のすがくしくなるものだから。そしてそれはうま
い汁の實を供し、母の笑顔を買ふに充分だ。

人間と生れては、朝早く起きること、風雨寒暑をいとはぬこと、粗衣粗食に堪へること、勞役
をいはぬこと、そうしたことを勉強して習慣づけべきものだ。何事も習慣づけると樂にやれ
る。しかるに學校生活の安易の習慣は、當然セヤミやおモヤミのクセを成人の後に迄曳きづる。
冬になれば襟巻や長マントを引づつてストープに股あぶりし乍ら本なんかよんでゐる。その本に
してもだ、ほんとうに生涯をつぎ込んだ勞作——エギゾーステブな大著作に非して、それこそ肩
のこらない讀物、何々叢書などゝ銘打つたレデーメイドの間に合せもの許りだ。何んでもかでも
手ツ取り早く片付けやうとする。一寸人中で合槌を打てる位の智識で満足してゐる。そして口先で

は人名辭書でも暗記したやうに西洋人の名前なんか喋々して、そしてしたり顔に批評などして
が肝腎の原書の本文は一章も読んでゐない。従つてほんとうのことは一つも分らないくせに、只
人があういつたこゝろいつたといふそれを受賣りしてチヨコ／＼した短評にお茶を濁してゐる。だ
からいくら本を讀んでも少しも眞髓のカルチュア(修養)に資する所がない。

現下の世相に眉を擧めるものは、此の世相を持ち來たした皮相的のカルチュアに遡つて見るが
いゝ。明治以後、學校出現以後のカルチュアが、當然に今現はれて來てゐるのである。これは決
して日本固有のクラシカルなカルチュアの現はれではない。尠くとも家塾的カルチュアの現はれ
ではない。それ自身西洋の受賣りに過ぎざりし學校カルチュアの現はれなんだ。このことに深い
考察を拂ふものは、とうに學校なるものゝ狂つた磁石に氣が附かねばならぬのだつた。一方に於
ては現前の世相に非憤慷慨し乍ら、一方に於てはそれの母胎たるカルチュアの發生所を等閑に附
して居るマヌケさよ!

第五 開國以來の道

「お前達、一千町歩もあれば大したもんだと思ふのか、此地球をそう大したもんだと思ふのか?
本が讀めるちゆうことの爲に、そんなに長いこと稽古しなきやならんのか?

詩の意味が分るといふことがそんなにどえらいことなのか?

此朝^{あした}、此夕^{ゆう}、俺と一緒に過ぎて御覽、お前達は詩の本質を掴めるだらう。

お前達は此の地球やあの太陽のよといふよいものを掴めるだらう(まだ／＼知られない無數
の太陽もあるにはあるが)

お前達は骨董店や古本屋からものを仕入れやうと思ふな、死んだものの目で視やうとしたり、
本の中の化物にとつ憑かれたりしたつて初まらない。

俺の目を通してだつていけないよ、何ものをも俺から期待するな。

お前達は凡ての方向に聴耳を立て、そしてお前達自身の衷から滲し出せ。

無理に努力したつてどうなるもんだ、——學問があらうがなからうが、ものを感じることに變
りはない。」

ワルト、ホイットマン

昔は萬卷の書を讀破することが儒者の理想だつた。萬卷の書なんか讀まうとしたらそれ丈で生命が費えて了はう。殊に昔と違つて汗牛充棟も管ならざる今の時代に於ては萬卷なんかで盡きはしない。億萬卷だ。それを讀んだつてどうなる。今の時は實に百卷に代る一卷、萬卷に代る百卷を擇むことがより必要だ。そしてそれを擇む目と頭を仕立てることが大事なんだ。先生の口眞似をすることは書物の口眞似をすると何等變らない。自分のものとして、自分の内から發したものとするには、自分で自分を教育して行く外に道がない。

茲に於てか、學校と交渉な境遇に生れ合はした、吾等百姓の子は、結局恵まれたる境遇にあることを意識しないわけにゆかない。ピンからキリまで生産者たる吾等百姓は、學校教育なんかとは違ふ、別のプリンシプル(原則)に據つて、「自分で自分を教育してゆくと」を工夫しなければならぬ。ミイラ取りがミイラになるやうなところへもぐり込まなくとも、生きものは野原にある方がどんなにふさはしいことか。されば自分で自分を教育することにハッキリ目覺めたものにつては田舎は究竟の道場であり私塾である。先づ田舎人に取つて不可欠な研究題目たる農業に關してだつて、田舎の環境がどんなに學校なんかよりも適切だか知れやしない。農業といふものは

實にあらゆる自然科學と密接の關係あるものなんだが、その自然科學を研究する上にも田舎は決して大學の附屬試驗場などに劣るものではない。田舎に於ては極めて手近に觸接し得るもので分科學への憧憬が充たされる。多くの人は或る一つの科學に入らんとする際に、教科書通りに初め極く漠然とした一般原則から入るのを常とするが、そんなやり方では肝腎の興味が湧かない。ヒョット氣の附いた一つの問題、或る機會に特に必要を感じた事柄、それを手に取つてだん／＼研究を深めてゆくといふやり方が一番身につく。「凡て必要に迫られるか、興味を持つか」二つに一つ缺けたらほんとうに打ち込めるものではない。學者が教科書を書くやうな順序になんか少しも依る必要はない。或る一つのものを探んで、そいつをヒマに任かしてユツクリと追窮して行くうちには、いつとはなしに全般の學にも通じるやうになる。どうせ食ふことが大部分の時間を使つて了ふのだから、講壇フオロ的な學習法なんか面白くなくてつゞけてゆかれるもんぢやないのだ。

例令、畑の雜草一つ取つてきても、それを詳かに研究して行くことに依つていつとなしに糧物學の尤も肝腎なところがあらまし學ばれる。何も分類だの解剖だの道具立てに大騒ぎする必要はない。況んや何を苦しんで見もしない熱帯植物なんか繪に依つて學ぶ必要があらう。